

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度 自 平成22年4月1日

(第108期) 至 平成23年3月31日

株式会社 山梨中央銀行

(E03562)

第108期（自平成22年4月1日 至平成23年3月31日）

有価証券報告書

- 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書に添付された監査報告書及び上記の有価証券報告書と併せて提出した内部統制報告書・確認書を末尾に綴じ込んでおります。

株式会社 山梨中央銀行

目 次

	頁
第108期 有価証券報告書	
【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【沿革】	4
3 【事業の内容】	5
4 【関係会社の状況】	6
5 【従業員の状況】	6
第2 【事業の状況】	7
1 【業績等の概要】	7
2 【生産、受注及び販売の状況】	26
3 【対処すべき課題】	26
4 【事業等のリスク】	27
5 【経営上の重要な契約等】	29
6 【研究開発活動】	29
7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	30
第3 【設備の状況】	40
1 【設備投資等の概要】	40
2 【主要な設備の状況】	40
3 【設備の新設、除却等の計画】	41
第4 【提出会社の状況】	42
1 【株式等の状況】	42
2 【自己株式の取得等の状況】	48
3 【配当政策】	50
4 【株価の推移】	50
5 【役員の状況】	51
6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】	55
第5 【経理の状況】	65
1 【連結財務諸表等】	66
2 【財務諸表等】	120
第6 【提出会社の株式事務の概要】	141
第7 【提出会社の参考情報】	142
1 【提出会社の親会社等の情報】	142
2 【その他の参考情報】	142
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	143
監査報告書	
内部統制報告書	
確認書	

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成23年6月29日

【事業年度】 第108期(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

【会社名】 株式会社 山梨中央銀行

【英訳名】 The Yamanashi Chuo Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役頭取 進 藤 中

【本店の所在の場所】 山梨県甲府市丸の内一丁目20番8号

【電話番号】 055(233)2111(大代表)

【事務連絡者氏名】 常務取締役経営企画部長 安 藤 昌 夫

【最寄りの連絡場所】 東京都千代田区鍛冶町一丁目6番10号
株式会社 山梨中央銀行東京支店

【電話番号】 03(3256)3131(大代表)

【事務連絡者氏名】 取締役東京支店長 荻 原 政 行

【縦覧に供する場所】 株式会社 山梨中央銀行東京支店
(東京都千代田区鍛冶町一丁目6番10号)
株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第 1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
		(自 平成18年 4月1日 至 平成19年 3月31日)	(自 平成19年 4月1日 至 平成20年 3月31日)	(自 平成20年 4月1日 至 平成21年 3月31日)	(自 平成21年 4月1日 至 平成22年 3月31日)	(自 平成22年 4月1日 至 平成23年 3月31日)
連結経常収益	百万円	61,610	67,206	60,333	57,423	54,514
連結経常利益	百万円	17,066	8,363	7,383	6,913	8,013
連結当期純利益	百万円	7,721	4,252	5,774	3,475	4,056
連結包括利益	百万円	—	—	—	—	△ 5
連結純資産額	百万円	184,836	161,799	146,722	161,976	159,424
連結総資産額	百万円	2,595,307	2,602,302	2,605,532	2,709,198	2,731,372
1株当たり純資産額	円	998.34	874.47	793.66	875.40	878.10
1株当たり当期純利益金額	円	41.83	23.04	31.31	18.85	22.23
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	7.09	6.19	5.61	5.95	5.80
連結自己資本比率 (国内基準)	%	12.03	13.11	14.20	15.23	16.07
連結自己資本利益率	%	4.32	2.46	3.75	2.25	2.53
連結株価収益率	倍	19.17	26.11	16.44	21.79	18.16
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	△ 91,072	29,565	137,248	92,036	44,621
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	26,017	△ 21,584	△ 66,253	△ 135,694	△ 61,293
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	△ 1,002	△ 1,151	△ 1,102	△ 1,117	△ 2,551
現金及び現金同等物の 期末残高	百万円	52,317	59,142	129,018	84,251	65,030
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,589 [577]	1,543 [657]	1,589 [692]	1,643 [742]	1,691 [759]

- (注) 1 当行及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。
2 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3 「自己資本比率」は、(期末純資産の部合計－期末少数株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
4 「連結自己資本比率」は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第104期	第105期	第106期	第107期	第108期
決算年月		平成19年 3月	平成20年 3月	平成21年 3月	平成22年 3月	平成23年 3月
経常収益	百万円	55,364	60,939	53,710	50,830	48,511
経常利益	百万円	16,659	8,750	6,063	5,863	7,380
当期純利益	百万円	7,718	4,678	6,021	2,744	3,861
資本金	百万円	15,400	15,400	15,400	15,400	15,400
発行済株式総数	千株	189,915	189,915	189,915	189,915	184,915
純資産額	百万円	183,884	161,421	146,652	160,953	157,974
総資産額	百万円	2,595,549	2,602,032	2,606,822	2,714,416	2,736,548
預金残高	百万円	2,204,810	2,263,480	2,300,516	2,314,434	2,349,338
貸出金残高	百万円	1,519,463	1,542,584	1,543,405	1,503,191	1,526,084
有価証券残高	百万円	891,458	870,502	894,711	1,048,515	1,094,686
1株当たり純資産額	円	996.52	875.08	795.72	873.43	874.97
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	6.00 (2.50)	5.00 (2.50)	6.00 (3.00)	6.00 (3.00)	6.00 (3.00)
1株当たり当期純利益金額	円	41.81	25.35	32.65	14.89	21.16
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益金額	円	—	—	—	—	—
自己資本比率	%	7.08	6.20	5.62	5.92	5.77
単体自己資本比率 (国内基準)	%	11.99	13.11	14.23	15.14	15.90
自己資本利益率	%	4.32	2.70	3.90	1.78	2.42
株価収益率	倍	19.17	23.73	15.76	27.59	19.08
配当性向	%	14.34	19.71	18.37	40.28	28.34
従業員数 [外、平均臨時従業員数]	人	1,507 [540]	1,473 [601]	1,521 [630]	1,575 [676]	1,653 [729]

(注) 1 消費税及び地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。

2 第108期(平成23年3月)中間配当についての取締役会決議は、平成22年11月12日に行いました。

3 第104期(平成19年3月)の1株当たり配当額のうち1円は創立65周年記念配当であります。

4 「潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額」は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

5 自己資本比率は、期末純資産の部合計を期末資産の部の合計で除して算出しております。

6 単体自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づく平成18年金融庁告示第19号に定められた算式に基づき算出しております。当行は、国内基準を採用しております。

2 【沿革】

- 明治10年4月15日 第十国立銀行創業
- 昭和16年12月1日 第十銀行と明治28年創業の株式会社有信銀行が合併し株式会社山梨中央銀行創立
- 昭和39年5月1日 外国為替業務取扱開始
- 昭和44年11月17日 新本店竣工
- 昭和47年10月2日 東京証券取引所市場第二部に上場
- 昭和48年8月1日 東京証券取引所市場第一部に指定
- 昭和49年7月26日 事務センター竣工(現、電算センター)
- 昭和51年9月11日 第一次総合オンライン完成
- 昭和55年11月25日 第二次総合オンライン完成
- 昭和58年4月1日 国債の窓口販売業務開始
- 昭和59年4月1日 外国部新設(現、営業統括部 国際業務室)
- 昭和60年6月1日 ディーリング業務開始
- 昭和60年9月10日 外国為替コルレス銀行として許可される
- 昭和61年7月1日 個人向けローンの保証業務を目的とした山梨中央保証株式会社(現、連結子会社)を設立
- 昭和61年12月1日 東京オフショア市場参加
- 昭和62年4月6日 リース業務を目的とした山梨中銀リース株式会社(現、連結子会社)を設立
- 昭和63年6月9日 担保附社債信託法に基づく信託事業の営業免許取得
- 平成元年1月10日 本店別館竣工
- 平成元年1月17日 第三次総合オンライン完成
- 平成元年5月31日 国債証券等に係る有価証券先物取引の取次業務認可取得
- 平成2年5月10日 証券先物オプション取引に係る受託業務の認可取得
- 平成3年7月2日 クレジットカード業務を目的とした山梨中銀ディシーカード株式会社(現、連結子会社)を設立
- 平成5年5月18日 香港駐在員事務所開設
- 平成5年7月2日 当行の各種事務処理業務を目的とした山梨中銀ビジネスサービス株式会社を設立
- 平成7年10月26日 研修センター竣工
- 平成8年8月2日 ベンチャー企業への投資業務を目的とした山梨中銀キャピタル株式会社(現、連結子会社)を設立
- 平成10年12月1日 証券投資信託の受益証券等の窓口販売業務に係る認可取得
- 平成13年4月2日 損害保険窓口販売業務開始
- 平成14年10月1日 生命保険窓口販売業務開始
- 平成15年6月27日 山梨中銀キャピタル株式会社を山梨中銀経営コンサルティング株式会社に商号変更し経営コンサルティング部門を強化
- 平成17年4月1日 証券仲介業務開始
- 平成22年3月31日 山梨中銀ビジネスサービス株式会社を解散
- 平成23年1月4日 新勘定系システム「Bank Vision(バンクビジョン)」全面稼動

3 【事業の内容】

当行グループは、当行及び連結子会社4社で構成され、銀行業を中心にリース業、クレジットカード業等の金融サービスに係る事業を行っております。

当行グループの事業に係わる位置づけは次のとおりであります。

なお、当行グループは、報告セグメントが「銀行業」のみであり、セグメント情報の記載を省略しているため、事業区分は「銀行業」と「その他」としております。

〔銀行業〕

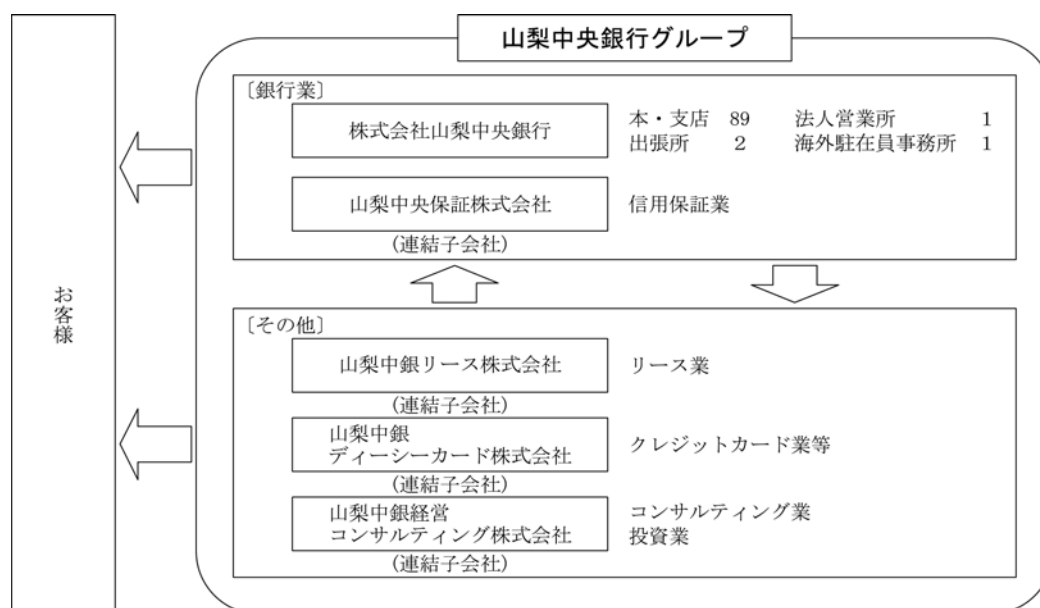
当行の本・支店においては、預金業務、貸出業務を中心に、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務、内国為替業務、外国為替業務、社債受託業務、国債等公共債・投資信託・保険の窓口販売業務などを行い、地域の中核金融機関として地域社会の繁栄と経済の発展に積極的に取り組んでおり、当行グループの主要業務と位置づけております。

また、山梨中央保証株式会社(連結子会社)においては、貸出業務を補完する信用保証業務を行っております。

〔その他〕

山梨中銀リース株式会社(連結子会社)においてはリース業務、山梨中銀ディーシーカード株式会社(連結子会社)においてはクレジットカード業務、山梨中銀経営コンサルティング株式会社(連結子会社)においてはベンチャー企業への投資及びコンサルティング等の業務を行い、いずれも総合金融サービスの一部として銀行業の補完業務と位置づけております。

以上述べた事項を事業系統図によって示すと、次のとおりであります。



4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有(又は 被所有) 割合(%)	当行との関係内容				
					役員の兼 任等(人)	資金 援助	営業上 の取引	設備の 賃貸借	業務 提携
(連結子会社)									
山梨中央保証 株式会社	山梨県 甲府市	20	銀行業	99.8 (0.1) [—]	3 (3)	—	預金取引等 保証取引等	建物の 一部賃借	無
山梨中銀リー ス株式会社	山梨県 甲府市	20	その他	61.0 (30.7) [—]	3 (3)	—	預貸金取引等 リース取引	建物の 一部賃借	無
山梨中銀ディ ーシーカード 株式会社	山梨県 甲府市	20	その他	67.5 (37.2) [—]	3 (3)	—	預貸金取引等 保証取引等	建物の 一部賃借	無
山梨中銀経営 コンサルティ ング株式会社	山梨県 甲府市	200	その他	85.0 (40.0) [—]	3 (3)	—	預金取引等 事務受託	建物の 一部賃借	無

- (注) 1 当行グループは、報告セグメントが「銀行業」のみであり、セグメント情報の記載を省略しているため、「主要な事業の内容」欄は「銀行業」と「その他」としております。
- 2 上記関係会社のうち、特定子会社に該当する会社はありません。
- 3 上記関係会社のうち、有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している会社はありません。
- 4 「議決権の所有(又は被所有)割合」欄の()内は子会社による間接所有の割合(内書き)、[]内は、「自己と出資、人事、資金、技術、取引等において緊密な関係があることにより自己の意思と同一の内容の議決権を行使すると認められる者」又は「自己の意思と同一の内容の議決権を行使することに同意している者」による所有割合(外書き)であります。
- 5 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。
- 6 山梨中央保証株式会社は、平成22年8月12日付で1,750百万円の無償減資を行い、資本金を20百万円といたしました。
- 7 山梨中銀ビジネスサービス株式会社は、平成22年3月31日付で解散し、平成22年6月18日に清算いたしました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

平成23年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業	その他	合計
従業員数(人)	1,657 [737]	34 [22]	1,691 [759]

- (注) 1 当行グループは、報告セグメントが「銀行業」のみであり、セグメント情報の記載を省略しているため、「セグメントの名称」欄は「銀行業」と「その他」としております。
- 2 従業員数は、執行役員7人及び海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員753人を含んでおりません。
- 3 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。

(2) 当行の従業員数

平成23年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,653 [729]	37.7	14.2	6,911

- (注) 1 従業員数は、執行役員7人及び海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員723人を含んでおりません。
- 2 当行の従業員はすべて銀行業のセグメントに属しております。
- 3 臨時従業員数は、[]内に年間の平均人員を外書きで記載しております。
- 4 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 5 当行の従業員組合は、山梨中央銀行職員組合と称し、組合員数は1,416人であります。労使間においては特記すべき事項はありません。

第2 【事業の状況】

1 【業績等の概要】

・業績

平成22年度のがわが国経済を振り返りますと、経済政策効果の剥落や円高の影響により、夏場から秋口にかけて一時足踏み状態を呈しましたが、海外需要の拡大を背景に総じて緩やかな回復を辿りました。しかし、東日本大震災発生後は需要・生産ともに大きく落ち込み、急速に不透明感が強まりました。

この間の金融情勢をみますと、日経平均株価は夏場を底に上向きに転じましたが、震災以降、不安心理の広がりから大きく落ち込みました。一方、為替相場は年間を通じて円高基調で推移いたしました。

当行グループの主たる経営基盤である山梨県経済をみますと、個人消費や設備投資が力強さを欠いたものの生産が増勢を維持し、全体として持ち直し傾向で推移いたしました。しかし、震災発生後は生産活動が停滞するとともに消費マインドが一段と悪化するなど、厳しい状況となりました。

このような金融経済環境のなかで、当行は平成22年4月に策定した中期経営計画「未来創造プラン2013」（平成22年4月～平成25年3月）の初年度目標達成に向け、役職員一丸となり、業容の拡大や収益力の強化、経営の合理化・効率化に取り組んでまいりました。

当行グループの営業概況及び業績は、以下のとおりであります。

当連結会計年度において、同計画で掲げた基本戦略の一つである「営業力の強化」については、CS（お客さま満足度）の向上とソリューション（問題解決）営業の強化に努めました。

具体的には、事業を営むお客さまに対しては、「山梨中銀経営支援コーディネートサービス」の活用により、山梨大学、やまなし産業支援機構など多くの外部支援機関と連携して事業課題の解決に向けた適切なソリューションを提供いたしました。

また、経済産業省から「中小企業応援センター事業」の実施機関として認定を受け、地域と一体となった産業の育成・強化に取り組みました。

さらに、販路開拓・拡大のための支援策として、「やまなし食のマッチングフェア」、「地方銀行フードセレクション」などのビジネス・マッチング事業を展開したほか、中小企業の皆さまの事業承継に関わるご相談に対応すべく「事業承継支援サービス」を提供いたしました。

商品面では、成長分野への取り組みを行うお客さまの支援を目的に、日本銀行の「成長基盤強化を支援するための資金供給」の趣旨に則った「山梨中銀『成長基盤強化ファンド』」の取り扱いを開始いたしました。

また、環境負荷低減に向けた取り組みを行うお客さまの支援を目的に、国の利子補給金交付事業に対応する「山梨中銀『環境格付融資制度(利子補給口)』」を新設いたしました。

個人のお客さまに対しては、定額複利型定期預金「すずなり」の販売や外貨普通預金のATMでの取り扱いを開始したほか、新たな投資信託・生命保険商品の導入、各種セミナーの開催などにより、多様な資産運用ニーズに積極的にお応えしてまいりました。

また、シルバー層のお客さまとの関係を強化するため、「年金感謝デー」を全店で実施するとともに、年金相談会を随時開催いたしました。

さらに、生涯設計に合わせた資金ニーズにお応えするため、住宅ローン金利プランを継続実施するとともに、教育ローン・マイカーローン特別金利キャンペーンを実施いたしました。

地方公共団体に対しましては、「山梨中銀コンビニ収納サービス」、「Pay-easy（ペイジー）口座振替受付サービス」などの各種サービスの導入を提案するなど公金業務の合理化・効率化の支援に強力に取り組みました。

また、「地域社会への貢献」については、社会貢献活動の一環として、昨年11月、小瀬陸上競技場の命名権（ネーミングライツ）を取得いたしました。本施設運営への協力を通じて、地域スポーツとスポーツを通じた情操教育の振興に努めております。

さらに、視覚に障がいをお持ちのお客さまに配慮した取り組みとして、「ハンドセット方式ATM」をすべての本・支店、出張所に設置いたしました。

このほか、地域密着型金融を推進するため、引き続き「ライフサイクルに応じた取引先企業の支援の一層の強化」、「事業価値を見極める融資手法をはじめ中小企業に適した資金供給手法の徹底」、「地域の情報集積を活用した持続可能な地域経済への貢献」の3項目に取り組みました。

また、「中小企業者等に対する金融の円滑化を図るための臨時措置に関する法律」の趣旨に則り、中小企業のお客さまや住宅ローンを利用されているお客さまからの資金繰り等の相談にきめ細かくお応えするとともに、経営改善計画策定の支援を強力に進めてまいりました。

なお、本年1月、新勘定系システム「Bank Vision (バンクビジョン)」が稼動いたしました。これにより、営業店の事務効率化を図るとともに、新規業務への対応や新商品・新サービスの迅速な提供が可能となりました。

店舗については、これまで以上にお客さまの利便性向上と更なるコスト低減を図るために、引き続き店舗改革を推進いたしました。

平成22年6月には、お客さまに一層便利にご利用いただけるよう明見支店を移転新築いたしました。なお、同支店では、CO₂排出量削減への取り組みとして、当行初の太陽光発電システムを導入いたしました。

その他の店舗につきましても、ご来店いただくお客さまの利便性向上のため、貸金庫の増設など設備を充実させるとともに、お客さまに落ち着いてご相談いただけるよう相談コーナーやローカウンターを増設いたしました。

また、平成22年8月には、神奈川県相模原市に町田支店橋本法人営業所を開設いたしました。本営業所は、事業を営むお客さまを対象とした当行初の営業拠点として、地域の企業の皆さまの利便性向上を図るとともに、山梨県内企業とのマッチング機会の創出等への取り組みなど、地域の企業の皆さまとのパイプ役としての営業を展開しております。

なお、店舗外現金自動設備は、3か所を新設する一方、5か所を廃止いたしました。この結果、期末現在の営業拠点数は89本・支店、2出張所、1法人営業所、1海外駐在員事務所、また、店舗外現金自動設備は130か所となっております。

主要勘定について、預金は、依然として金利は低水準で推移いたしました。多様化するお客さまの資産運用ニーズに迅速かつ適切にお応えすべく、商品やサービスの充実に努めてまいりました。この結果、預金の期末残高は、個人・法人預金等の増加を主因として期中に349億円増加し、2兆3,486億円となりました。

また、譲渡性預金を含めた総預金は、期中に394億円増加し、期末残高は2兆5,058億円となりました。

なお、国債及び投資信託の窓口販売残高の合計は、期中に22億円減少し、期末残高は2,299億円となりました。

貸出金は、引き続き資金需要は総じて低調に推移いたしました。個人向けローンや中堅・中小企業向け融資の拡大に努めるとともに、公共団体等の資金需要にも積極的に応えてまいりました。この結果、貸出金の期末残高は、中堅企業・公共団体向け貸出の増加を主因として期中に242億円増加し、1兆5,166億円となりました。

有価証券は、政府保証債・地方債などの公共債を引き受けるとともに、投資環境や市場動向を見極めながら効率的な運用に努めました。この結果、有価証券の期末残高は、期中に466億円増加し、1兆918億円となりました。

また、連結自己資本比率(国内基準)は、前期比0.84ポイント上昇し、16.07%となりました。

損益面については、資金利益は減少したものの、役務取引等利益の増加や国債等債券関係損益の増加により、業務粗利益は増加いたしました。一方、新勘定系システムへの移行作業に伴う人件費増を主因に経費も増加いたしました。

また、不良債権処理費用につきましては、引当手法の見直し等なお一層の厳格な対応を図りましたが、お取引先企業に対する経営相談や再生支援の積極的な取り組みに効果が表れたことなどから、前年比大幅に減少いたしました。

なお、東日本大震災を主因とする株式相場の下落に伴い、保有株式に多額の償却負担が生じたことなどから、株式等関係損益は減少いたしました。

この結果、連結経常収益は、前期比29億9百万円減少し545億14百万円、連結経常利益は、前期比10億99百万円増加し80億13百万円、連結当期純利益は、前期比5億81百万円増加し40億56百万円となりました。

山梨中央銀行単体のコア業務純益は、前期比11億58百万円減少し118億6百万円となりました。また業務純益は、前期比3億94百万円減少し136億57百万円となりました。

なお、当行グループは、報告セグメントが「銀行業」のみであり、セグメント情報の記載を省略しているため、セグメント別の業績については記載しておりません。

・キャッシュ・フロー

営業活動によるキャッシュ・フロー

預金、譲渡性預金が394億円増加、コールローン等が394億円減少したものの、貸出金が242億円増加、借入金で213億円減少したことなどから、446億円のキャッシュイン(前期は920億円のキャッシュイン)となりました。

投資活動によるキャッシュ・フロー

有価証券の取得を2,485億円行いましたが、売却・償還が1,915億円あったことなどから、612億円のキャッシュアウト(前期は1,356億円のキャッシュアウト)となりました。

財務活動によるキャッシュ・フロー

自己株式の取得14億円、配当金の支払11億円などにより、25億円のキャッシュアウト(前期は11億円のキャッシュアウト)となりました。

以上の結果、現金及び現金同等物の期末残高は、650億円(前期比192億円減少)となりました。

(1) 国内・国際業務部門別収支

当連結会計年度の資金運用収支は、貸出金利息の減少等により前年比2億37百万円減少し、363億92百万円となりました。役務取引等収支は、投資信託販売手数料の増加を主因に前年比1億22百万円増加し、58億90百万円となりました。その他業務収支は、国債等債券売却益の増加などにより前年比2億66百万円増加し、18億64百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	相殺消去額(△)	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	36,543	86	—	36,629
	当連結会計年度	36,345	47	—	36,392
うち資金運用収益	前連結会計年度	40,384	214	34	40,565
	当連結会計年度	38,613	65	4	38,674
うち資金調達費用	前連結会計年度	3,841	128	34	3,935
	当連結会計年度	2,268	17	4	2,281
役務取引等収支	前連結会計年度	5,729	38	—	5,768
	当連結会計年度	5,843	46	—	5,890
うち役務取引等収益	前連結会計年度	7,415	67	—	7,482
	当連結会計年度	7,565	74	—	7,639
うち役務取引等費用	前連結会計年度	1,686	28	—	1,714
	当連結会計年度	1,721	27	—	1,748
その他業務収支	前連結会計年度	1,477	120	—	1,598
	当連結会計年度	1,727	137	—	1,864
うちその他業務収益	前連結会計年度	6,943	120	—	7,064
	当連結会計年度	6,581	137	—	6,718
うちその他業務費用	前連結会計年度	5,466	—	—	5,466
	当連結会計年度	4,854	—	—	4,854

- (注) 1 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。
- 2 「相殺消去額(△)」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借取引の利息であります。

(2) 国内・国際業務部門別資金運用／調達状況

当連結会計年度の資金運用勘定の平均残高は、有価証券の増加を主因に前年比796億94百万円増加し、2兆6,181億円となりました。資金運用勘定利息は、貸出金利息の減少を主因に前年比18億90百万円減少し、386億74百万円となりました。

資金調達勘定の平均残高は、預金及び譲渡性預金の増加を主因に前年比730億60百万円増加し、2兆5,139億円となりました。資金調達勘定利息は、預金利息の減少等により前年比16億53百万円減少し、22億81百万円となりました。

① 国内業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	2,526,168	40,384	1.59
	当連結会計年度	2,613,132	38,613	1.47
うち貸出金	前連結会計年度	1,462,959	27,951	1.91
	当連結会計年度	1,470,677	25,665	1.74
うち商品有価証券	前連結会計年度	56	0	0.23
	当連結会計年度	78	0	0.21
うち有価証券	前連結会計年度	973,081	12,234	1.25
	当連結会計年度	1,073,834	12,792	1.19
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	57,749	72	0.12
	当連結会計年度	46,052	59	0.13
うち買現先勘定	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち預け金	前連結会計年度	10,094	10	0.09
	当連結会計年度	7,788	7	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	2,428,610	3,841	0.15
	当連結会計年度	2,508,764	2,268	0.09
うち預金	前連結会計年度	2,278,768	3,378	0.14
	当連結会計年度	2,327,577	1,956	0.08
うち譲渡性預金	前連結会計年度	136,091	377	0.27
	当連結会計年度	156,847	254	0.16
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	410	0	0.11
	当連結会計年度	82	0	0.10
うち売現先勘定	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うちコマース・ ペーパー	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち借入金	前連結会計年度	11,411	27	0.24
	当連結会計年度	24,101	38	0.15

(注) 1 「平均残高」は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、金融業以外の国内連結子会社については、期首と期末の残高に基づく平均残高を利用しております。

2 「国内業務部門」は国内店の円建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

3 「資金運用勘定」は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度7,039百万円、当連結会計年度7,729百万円)を控除して表示しております。

② 国際業務部門

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	24,734	214	0.86
	当連結会計年度	8,179	65	0.80
うち貸出金	前連結会計年度	2,338	28	1.20
	当連結会計年度	1,121	9	0.87
うち商品有価証券	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち有価証券	前連結会計年度	11,374	132	1.16
	当連結会計年度	1,369	24	1.79
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	9,846	52	0.53
	当連結会計年度	5,025	29	0.59
うち買現先勘定	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち預け金	前連結会計年度	246	0	0.19
	当連結会計年度	—	—	—
資金調達勘定	前連結会計年度	24,635	128	0.52
	当連結会計年度	8,257	17	0.21
うち預金	前連結会計年度	4,605	9	0.20
	当連結会計年度	4,979	5	0.11
うち譲渡性預金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	7,558	54	0.72
	当連結会計年度	92	0	0.54
うち売現先勘定	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うちコマーシャル・ ペーパー	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—
うち借入金	前連結会計年度	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—

(注) 1 「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 国際業務部門の国内店外貨建取引の平均残高は月次カレント方式(前月末TT仲値を当該月のノンエクステンジ取引に適用する方式)により算出しております。

3 「資金運用勘定」は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度10百万円、当連結会計年度11百万円)を控除して表示しております。

③ 合計

種類	期別	平均残高(百万円)			利息(百万円)			利回り (%)
		小計	相殺 消去額 (△)	合計	小計	相殺 消去額 (△)	合計	
資金運用勘定	前連結会計年度	2,550,902	12,401	2,538,501	40,599	34	40,565	1.59
	当連結会計年度	2,621,311	3,116	2,618,195	38,679	4	38,674	1.47
うち貸出金	前連結会計年度	1,465,298	—	1,465,298	27,979	—	27,979	1.90
	当連結会計年度	1,471,799	—	1,471,799	25,675	—	25,675	1.74
うち商品有価証券	前連結会計年度	56	—	56	0	—	0	0.23
	当連結会計年度	78	—	78	0	—	0	0.21
うち有価証券	前連結会計年度	984,455	—	984,455	12,367	—	12,367	1.25
	当連結会計年度	1,075,204	—	1,075,204	12,817	—	12,817	1.19
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	67,595	—	67,595	125	—	125	0.18
	当連結会計年度	51,077	—	51,077	89	—	89	0.17
うち買現先勘定	前連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
うち債券貸借取引 支払保証金	前連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
うち預け金	前連結会計年度	10,341	—	10,341	10	—	10	0.10
	当連結会計年度	7,788	—	7,788	7	—	7	0.09
資金調達勘定	前連結会計年度	2,453,246	12,401	2,440,844	3,969	34	3,935	0.16
	当連結会計年度	2,517,021	3,116	2,513,904	2,286	4	2,281	0.09
うち預金	前連結会計年度	2,283,373	—	2,283,373	3,387	—	3,387	0.14
	当連結会計年度	2,332,556	—	2,332,556	1,962	—	1,962	0.08
うち譲渡性預金	前連結会計年度	136,091	—	136,091	377	—	377	0.27
	当連結会計年度	156,847	—	156,847	254	—	254	0.16
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	7,969	—	7,969	55	—	55	0.69
	当連結会計年度	174	—	174	0	—	0	0.33
うち売現先勘定	前連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
うちコマース・ ペーパー	前連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
	当連結会計年度	—	—	—	—	—	—	—
うち借入金	前連結会計年度	11,411	—	11,411	27	—	27	0.24
	当連結会計年度	24,101	—	24,101	38	—	38	0.15

(注) 1 「相殺消去額」は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の平均残高及び利息であります。

2 「資金運用勘定」は、無利息預け金の平均残高(前連結会計年度7,049百万円、当連結会計年度7,740百万円)を控除して表示しております。

(3) 国内・国際業務部門別役務取引の状況

当連結会計年度の役務取引等収益は、投資信託販売などの証券関連業務手数料の増加を主因に前年比1億56百万円増加し、76億39百万円となりました。このうち国内業務部門は、前年比1億49百万円増加し75億65百万円、国際業務部門は、前年比7百万円増加し74百万円となりました。

役務取引等費用は、前年比34百万円増加し17億48百万円となりました。このうち国内業務部門は前年比34百万円増加し17億21百万円、国際業務部門は、前年とほぼ同水準の27百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	7,415	67	7,482
	当連結会計年度	7,565	74	7,639
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	2,718	—	2,718
	当連結会計年度	2,772	—	2,772
うち為替業務	前連結会計年度	2,224	65	2,289
	当連結会計年度	2,166	71	2,238
うち証券関連業務	前連結会計年度	723	—	723
	当連結会計年度	843	—	843
うち代理業務	前連結会計年度	767	—	767
	当連結会計年度	842	—	842
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	258	—	258
	当連結会計年度	252	—	252
うち保証業務	前連結会計年度	281	2	283
	当連結会計年度	229	2	232
役務取引等費用	前連結会計年度	1,686	28	1,714
	当連結会計年度	1,721	27	1,748
うち為替業務	前連結会計年度	688	25	714
	当連結会計年度	696	27	723

(注) 1 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 相殺消去額については、該当ありません。

(4) 国内・国際業務部門別預金残高の状況

○預金の種類別残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	2,308,768	4,990	2,313,758
	当連結会計年度	2,343,196	5,469	2,348,666
うち流動性預金	前連結会計年度	1,222,607	—	1,222,607
	当連結会計年度	1,258,967	—	1,258,967
うち定期性預金	前連結会計年度	1,064,984	—	1,064,984
	当連結会計年度	1,064,664	—	1,064,664
うちその他	前連結会計年度	21,175	4,990	26,166
	当連結会計年度	19,565	5,469	25,034
譲渡性預金	前連結会計年度	152,658	—	152,658
	当連結会計年度	157,211	—	157,211
総合計	前連結会計年度	2,461,426	4,990	2,466,416
	当連結会計年度	2,500,408	5,469	2,505,877

(注) 1 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金

定期性預金＝定期預金＋定期積金

3 相殺消去額については、該当ありません。

(5) 国内・海外別貸出金残高の状況

① 業種別貸出状況(残高・構成比)

業種別	平成22年3月31日		平成23年3月31日	
	貸出金残高(百万円)	構成比(%)	貸出金残高(百万円)	構成比(%)
国内 (除く特別国際金融取引勘定分)	1,492,384	100.00	1,516,665	100.00
製造業	162,643	10.90	157,706	10.40
農業、林業	1,352	0.09	1,454	0.10
漁業	13	0.00	18	0.00
鉱業、採石業、砂利採取業	2,230	0.15	2,340	0.15
建設業	50,657	3.39	45,445	3.00
電気・ガス・熱供給・水道業	32,765	2.20	33,591	2.21
情報通信業	20,968	1.41	19,992	1.32
運輸業、郵便業	66,705	4.47	72,681	4.79
卸売業、小売業	125,090	8.38	127,125	8.38
金融業、保険業	42,895	2.87	45,983	3.03
不動産業、物品賃貸業	212,139	14.22	188,695	12.44
その他のサービス業	149,591	10.02	163,583	10.79
国・地方公共団体	231,672	15.52	278,456	18.36
その他	393,658	26.38	379,588	25.03
海外及び特別国際金融取引勘定分	—	—	—	—
政府等	—	—	—	—
金融機関	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	1,492,384	—	1,516,665	—

(注) 「国内」とは、当行及び国内連結子会社であります。

② 外国政府等向け債権残高(国別)

該当ありません。

(6) 国内・国際業務部門別有価証券の状況

○有価証券残高(未残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	474,603	—	474,603
	当連結会計年度	564,537	—	564,537
地方債	前連結会計年度	173,378	—	173,378
	当連結会計年度	174,655	—	174,655
社債	前連結会計年度	308,246	—	308,246
	当連結会計年度	278,354	—	278,354
株式	前連結会計年度	60,651	—	60,651
	当連結会計年度	50,312	—	50,312
その他の証券	前連結会計年度	25,833	2,461	28,295
	当連結会計年度	21,987	2,004	23,992
合計	前連結会計年度	1,042,713	2,461	1,045,175
	当連結会計年度	1,089,848	2,004	1,091,852

(注) 1 「国内業務部門」は国内店の円建取引、「国際業務部門」は国内店の外貨建取引であります。

ただし、円建対非居住者取引等は国際業務部門に含めております。

2 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

3 相殺消去額については、該当ありません。

(単体情報)

(参考)

当行の単体情報のうち、参考として以下の情報を掲げております。

1 損益状況(単体)

(1) 損益の概要

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
業務粗利益	42,070	42,247	177
経費(除く臨時処理分)	28,326	29,342	1,016
人件費	14,860	15,978	1,118
物件費	12,126	12,108	△ 18
税金	1,339	1,254	△ 85
業務純益(一般貸倒引当金繰入前)	13,744	12,905	△ 839
一般貸倒引当金繰入額	△ 307	△ 752	△ 445
業務純益	14,051	13,657	△ 394
うち債券関係損益	779	1,098	319
臨時損益	△ 8,188	△ 6,277	1,911
株式関係損益	△ 1,009	△ 3,759	△ 2,750
不良債権処理損失	7,246	2,198	△ 5,048
貸出金償却	1	9	8
個別貸倒引当金繰入額	6,765	2,010	△ 4,755
債権売却損	213	143	△ 70
その他	266	35	△ 231
その他臨時損益	67	△ 319	△ 386
経常利益	5,863	7,380	1,517
特別損益	△ 31	△ 607	△ 576
うち固定資産処分損益	△ 114	△ 230	△ 116
うち減損損失	27	307	280
税引前当期純利益	5,831	6,772	941
法人税、住民税及び事業税	1,783	1,711	△ 72
法人税等調整額	1,302	1,199	△ 103
法人税等合計	3,086	2,911	△ 175
当期純利益	2,744	3,861	1,117

(注) 1 業務粗利益＝資金運用収支＋役員取引等収支＋その他業務収支

2 業務純益＝業務粗利益－経費(除く臨時処理分)－一般貸倒引当金繰入額

3 「臨時損益」とは、損益計算書中「その他経常収益・費用」から一般貸倒引当金繰入額を除き、退職給付費用のうち臨時費用処理分等を加えたものであります。

4 債券関係損益＝国債等債券売却益＋国債等債券償還益－国債等債券売却損－国債等債券償還損－国債等債券償却

5 株式関係損益＝株式等売却益－株式等売却損－株式等償却

(2) 営業経費の内訳

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
給料・手当	11,275	12,041	766
退職給付費用	932	1,595	663
福利厚生費	109	74	△ 35
減価償却費	1,866	2,112	246
土地建物機械賃借料	911	837	△ 74
営繕費	138	84	△ 54
消耗品費	432	567	135
給水光熱費	304	305	1
旅費	70	44	△ 26
通信費	701	823	122
広告宣伝費	231	243	12
租税公課	1,339	1,254	△ 85
その他	10,114	10,095	△ 19
計	28,429	30,081	1,652

(注) 損益計算書中「営業経費」の内訳であります。

2 利鞘(国内業務部門)(単体)

	前事業年度 (%) (A)	当事業年度 (%) (B)	増減(%) (B) - (A)
(1) 資金運用利回 ①	1.59	1.47	△ 0.12
(イ)貸出金利回	1.90	1.74	△ 0.16
(ロ)有価証券利回	1.25	1.18	△ 0.07
(2) 資金調達原価 ②	1.31	1.24	△ 0.07
(イ)預金等利回	0.15	0.08	△ 0.07
(ロ)外部負債利回	0.10	0.10	0.00
(3) 総資金利鞘 ①-②	0.28	0.23	△ 0.05

(注) 1 「国内業務部門」とは、国内店の円建取引であります。

2 「外部負債」=コールマネー+売渡手形+借入金

3 ROE(単体)

	前事業年度 (%) (A)	当事業年度 (%) (B)	増減(%) (B) - (A)
業務純益ベース (一般貸倒引当金繰入前)	8.93	8.09	△ 0.84
業務純益ベース	9.13	8.56	△ 0.57
当期純利益ベース	1.78	2.42	0.64

4 預金・貸出金の状況(単体)

(1) 預金・貸出金の残高

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
預金(末残)	2,314,434	2,349,338	34,904
預金(平残)	2,284,050	2,333,230	49,180
貸出金(末残)	1,503,191	1,526,084	22,893
貸出金(平残)	1,476,246	1,481,912	5,666

(2) 個人・法人別預金残高(国内)

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
個人	1,746,448	1,776,172	29,724
法人	424,636	438,722	14,086
その他	143,348	134,444	△ 8,904
合計	2,314,434	2,349,338	34,904

- (注) 1 譲渡性預金を除いております。
2 「その他」は、公金、金融機関等であります。

(3) 消費者ローン残高

	前事業年度 (百万円) (A)	当事業年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
消費者ローン残高	387,151	379,722	△ 7,429
うち住宅ローン残高	366,875	361,410	△ 5,465
うちその他ローン残高	20,275	18,311	△ 1,964

(4) 中小企業等貸出金

		前事業年度 (A)	当事業年度 (B)	増減 (B) - (A)
中小企業等貸出金残高	①	888,883	860,655	△ 28,228
総貸出金残高	②	1,503,191	1,526,084	22,893
中小企業等貸出金比率	①/②	59.13	56.39	△ 2.74
中小企業等貸出先件数	③	66,615	65,311	△ 1,304
総貸出先件数	④	66,947	65,666	△ 1,281
中小企業等貸出先件数比率	③/④	99.50	99.45	△ 0.05

- (注) 中小企業等とは、資本金3億円(ただし、卸売業は1億円、小売業、飲食業、物品貸貸業等は5千万円)以下の会社又は常用する従業員が300人(ただし、卸売業、物品貸貸業等は100人、小売業、飲食業は50人)以下の企業等であります。

5 債務の保証(支払承諾)の状況(単体)

○ 支払承諾の残高内訳

種類	前事業年度		当事業年度	
	口数(件)	金額(百万円)	口数(件)	金額(百万円)
手形引受	—	—	—	—
信用状	4	33	5	33
保証	1,850	8,282	1,636	7,189
計	1,854	8,316	1,641	7,222

6 内国為替の状況(単体)

区分		前事業年度		当事業年度	
		口数(千口)	金額(百万円)	口数(千口)	金額(百万円)
送金為替	各地へ向けた分	5,719	5,326,517	6,106	6,008,162
	各地より受けた分	6,192	5,344,311	6,083	5,370,182
代金取立	各地へ向けた分	739	721,493	570	569,780
	各地より受けた分	756	817,766	615	696,945

7 外国為替の状況(単体)

区分		前事業年度	当事業年度
		金額(百万米ドル)	金額(百万米ドル)
仕向為替	売渡為替	333	231
	買入為替	187	64
被仕向為替	支払為替	143	167
	取立為替	7	9
合計		671	472

(自己資本比率の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号。以下、「告示」という。)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

なお、当行は、国内基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては標準的手法を、オペレーショナル・リスク相当額に係る額の算出においては粗利益配分手法を採用しております。

連結自己資本比率(国内基準)

項目		平成22年3月31日	平成23年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
基本的項目 (Tier 1)	資本金	15,400	15,400
	うち非累積的永久優先株	—	—
	新株式申込証拠金	—	—
	資本剰余金	8,307	8,287
	利益剰余金	122,029	122,889
	自己株式(△)	2,507	1,836
	自己株式申込証拠金	—	—
	社外流出予定額(△)	552	541
	その他有価証券の評価差損(△)	—	—
	為替換算調整勘定	—	—
	新株予約権	—	—
	連結子法人等の少数株主持分	659	885
	うち海外特別目的会社の発行する 優先出資証券	—	—
	営業権相当額(△)	—	—
	のれん相当額(△)	—	—
	企業結合等により計上される 無形固定資産相当額(△)	—	—
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額(△)	—	—
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 (上記各項目の合計額)	—	—
	繰延税金資産の控除金額(△)	—	—
	計 (A)	143,335	145,083
補完的項目 (Tier 2)	うちステップ・アップ金利条項付の 優先出資証券(注1)	—	—
	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の 差額の45%相当額	—	—
	一般貸倒引当金	9,390	9,177
	負債性資本調達手段等	—	—
	うち永久劣後債務(注2)	—	—
	うち期限付劣後債務及び期限付優先株(注3)	—	—
計	9,390	9,177	
うち自己資本への算入額 (B)	6,127	5,865	
控除項目	控除項目(注4) (C)	126	115
自己資本額	(A)+(B)-(C) (D)	149,336	150,833
リスク・ アセット等	資産(オン・バランス)項目	893,023	852,741
	オフ・バランス取引等項目	13,810	13,056
	信用リスク・アセットの額 (E)	906,833	865,798
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 (G)/8% (F)	73,601	72,618
	(参考) オペレーショナル・リスク相当額 (G)	5,888	5,809
計(E)+(F) (H)	980,435	938,416	
連結自己資本比率(国内基準)=D/H×100(%)		15.23	16.07
(参考) Tier 1比率=A/H×100(%)		14.61	15.46

- (注) 1 告示第28条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。
- 2 告示第29条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。
- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
- (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
- (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
- (4) 利払い義務の延期が認められるものであること
- 3 告示第29条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。
- 4 告示第31条第1項第1号から第6号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額、及び第2号に規定するものに対する投資に相当する額が含まれております。

単体自己資本比率(国内基準)

項目		平成22年3月31日	平成23年3月31日
		金額(百万円)	金額(百万円)
基本的項目 (Tier 1)	資本金	15,400	15,400
	うち非累積的永久優先株	—	—
	新株式申込証拠金	—	—
	資本準備金	8,287	8,287
	その他資本剰余金	19	—
	利益準備金	9,405	9,405
	その他利益剰余金	112,280	112,943
	その他	—	—
	自己株式(△)	2,507	1,836
	自己株式申込証拠金	—	—
	社外流出予定額(△)	552	541
	その他有価証券の評価差損(△)	—	—
	新株予約権	—	—
	営業権相当額(△)	—	—
	のれん相当額(△)	—	—
	企業結合により計上される無形固定資産相当額(△)	—	—
	証券化取引に伴い増加した自己資本相当額(△)	—	—
	繰延税金資産の控除前の〔基本的項目〕計 (上記各項目の合計額)	—	—
	繰延税金資産の控除金額(△)	—	—
	計 (A)	142,331	143,658
補完的項目 (Tier 2)	うちステップ・アップ金利条項付の優先出資証券(注1)	—	—
	うち海外特別目的会社の発行する優先出資証券	—	—
	土地の再評価額と再評価の直前の帳簿価額の差額の45%相当額	—	—
	一般貸倒引当金	5,820	5,068
	負債性資本調達手段等	—	—
	うち永久劣後債務(注2)	—	—
うち期限付劣後債務及び期限付優先株(注3)	—	—	
計	5,820	5,068	
うち自己資本への算入額 (B)	5,820	5,068	
控除項目	控除項目(注4) (C)	—	—
自己資本額	(A)+(B)-(C) (D)	148,152	148,726
リスク・アセット等	資産(オン・バランス)項目	892,952	852,022
	オフ・バランス取引等項目	13,810	13,056
	信用リスク・アセットの額 (E)	906,762	865,079
	オペレーショナル・リスク相当額に係る額 (G)/8% (F)	71,470	70,283
	(参考) オペレーショナル・リスク相当額 (G)	5,717	5,622
	計 (E)+(F) (H)	978,233	935,363
単体自己資本比率(国内基準)=D/H×100(%)		15.14	15.90
(参考) Tier 1 比率=A/H×100(%)		14.54	15.35

- (注) 1 告示第40条第2項に掲げるもの、すなわち、ステップ・アップ金利等の特約を付すなど償還を行う蓋然性を有する株式等(海外特別目的会社の発行する優先出資証券を含む。)であります。
- 2 告示第41条第1項第3号に掲げる負債性資本調達手段で次に掲げる性質のすべてを有するものであります。
- (1) 無担保で、かつ、他の債務に劣後する払込済のものであること
 - (2) 一定の場合を除き、償還されないものであること
 - (3) 業務を継続しながら損失の補てんに充当されるものであること
 - (4) 利払い義務の延期が認められるものであること
- 3 告示第41条第1項第4号及び第5号に掲げるものであります。ただし、期限付劣後債務は契約時における償還期間が5年を超えるものに限られております。
- 4 告示第43条第1項第1号から第5号に掲げるものであり、他の金融機関の資本調達手段の意図的な保有相当額が含まれております。

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、3ヵ月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定の内訳

債権の区分	平成22年3月31日	平成23年3月31日
	金額(百万円)	金額(百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	29,318	14,608
危険債権	33,119	37,043
要管理債権	1,404	2,379
正常債権	1,451,921	1,483,001

2 【生産、受注及び販売の状況】

「生産、受注及び販売の状況」は、銀行業における業務の特殊性のため、該当する情報がないので記載していません。

3 【対処すべき課題】

今後を展望いたしますと、3月に発生した東日本大震災は国内経済に深刻な影響を及ぼしており、当行グループが営業基盤とする地域におきましても、売上げや受注の減少に伴う企業収益の悪化が懸念されるなど、当面、不透明な状況が継続するものと予想されます。

また、世界経済における中国を中心とするアジア諸国の台頭や地球環境問題の深刻化に加え、国内では人口減少と少子・高齢化の進行などに起因する、様々な社会的、経済的な変化が顕在化しております。

このような様々な環境変化のなか、地域金融機関が地域社会の繁栄と経済発展のために果たすべき役割は一層重要になっているものと認識しております。

一方、金融界におきましては、ゆうちょ銀行の積極的な営業展開や、規制緩和の進展に伴う他業態からの参入など、競争が益々激化しております。また、今後予定されている新自己資本比率規制(パーゼルⅢ)や国際財務報告基準(I F R S)等への対応など、更なる経営体質の強化が求められております。

当行グループでは、平成22年4月からスタートした中期経営計画「未来創造プラン2013」(平成22年4月～平成25年3月)において、あるべき姿として「地域の皆さまとともに未来を創造する質の高い金融サービス業」を目指しております。

厳しい経営環境下、お客さまロイヤルティ(お客さまの永続的信頼)の向上および高い健全性と低コスト・高収益体質を兼ね備えた銀行を構築すべく、「営業力の強化」、「経営基盤の強化」、「地域社会への貢献」の3つを基本戦略に据え、従来にも増してあるべき姿の実現に迅速に取り組んでまいります。

「営業力の強化」では、収益機会の発掘と営業基盤の強化を図るため、CSの向上とソリューション営業の更なる強化を基本として、個人・法人営業基盤拡充戦略、地区特性に応じた地区戦略、営業チャネル戦略を推進してまいります。

「経営基盤の強化」では、高い健全性と低コスト・高収益体質の実現を図るため、市場運用力の強化、営業店業務プロセス改革、効率的な業務運営体制の構築、人材の育成と組織の活性化、内部管理態勢の充実を図ってまいります。

「地域社会への貢献」では、地域経済の活性化、社会貢献活動、環境問題に積極的に取り組んでまいります。

また、中期経営計画で掲げた戦略を具現化するためのITインフラ(基盤)の一つとして、新総合融資支援システム「共同利用型『KeyMan(キーマン)』」を本年10月に全面稼働させる予定です。本システムにより、融資業務全体の合理化・効率化を図り、お客さまとのコミュニケーションに注力できる態勢をさらに進め、お客さまへのソリューション提供の充実など効果的な営業活動を展開してまいります。

さらに、厳しい経済環境下、お客さまの事業活動の円滑な遂行や生活の安定のために、地域密着型金融や金融円滑化に向けた取り組みを一層強化してまいります。

なお、東日本大震災により直接的・間接的な被害を受けられたお客さまのために、各営業店にご相談窓口を設置し特別融資の取り扱いを開始するなど、資金繰りに関するご相談、ご要望等に積極的にお応えしてまいります。

当行グループ各社は、今後とも、地域社会の繁栄と経済発展に貢献できるよう役職員一丸となって取り組んでまいり所存であります。

4 【事業等のリスク】

当行グループの事業その他に関するリスクについて、投資者の判断に重大な影響を及ぼす可能性があると考えられる主な事項を記載しております。

当行グループは、これらのリスクが顕在化する可能性を認識したうえで、発生の回避及び発生した場合には、迅速かつ適切な対応に努めてまいります。

なお、本項には将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 信用リスク

① 不良債権の状況

景気動向等により取引先の財務内容等が悪化した場合、当行グループの不良債権及び与信関係費用が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 貸倒引当金の状況

当行グループでは、取引先の状況や担保価値などに基づいて貸倒引当金を計上しています。取引先の業況の悪化や担保価値の下落などにより、貸倒引当金が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

③ 貸出先への対応

取引先に債務不履行等が生じた場合であっても、回収の効率・実効性等の観点から当行グループの債権者としての権利を行使しない場合や、取引先への支援のために債権放棄等を実行する場合があります。結果として貸倒引当金等の費用が増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 市場リスク

① 金利リスク

資産と負債の金利または期間の不一致がある中で金利が変動した場合、収益の低下や損失が発生する可能性があります。

② 価格変動リスク

当行グループが保有する有価証券等の市場価格の変動により、減損や評価損が発生する可能性があります。

③ 為替リスク

外貨建資産と負債について、為替相場の変動により損失が発生する可能性があります。

(3) 流動性リスク

当行グループの財務内容の悪化等により、資金繰りに悪影響を来したり短期借入金等の調達コストが増加し、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。また、市場の混乱等により市場において取引ができない場合や、通常よりも高い金利での調達を余儀なくされる可能性があります。

(4) オペレーショナル・リスク

① 事務リスク

当行グループの役職員が正確な事務を怠る、あるいは事故・不正等を起こすことにより、損失が発生する可能性があります。

② システムリスク

コンピュータシステムのダウンまたは誤作動等、コンピュータシステムの不具合や、コンピュータの不正使用、データ改ざん、情報漏洩等が発生した場合に、当行グループの信用や業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

③ 法務リスク

各種取引において、法令違反や不適切な契約等により損失が発生する可能性があります。

④ 風評リスク

当行グループに対する市場やお客さまの間での否定的な世論が広まることによって、収益や資本、顧客基盤等に重大な影響を及ぼす可能性があります。

⑤ 人的リスク

労務慣行の問題や職場の安全衛生環境の問題等に関連する訴訟等が発生した場合、当行グループの信用や業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

⑥ 有形資産リスク

自然災害、強盗、事故、資産管理の瑕疵等により、建物、車両、備品等の有形資産が損傷した場合、損失が発生する可能性があります。

(5) 自己資本に関するリスク

① 自己資本比率

平成23年3月期の連結自己資本比率は16.07%と、国内基準で要求される4%を上回っていますが、同基準を下回った場合には早期是正措置が発動され、金融庁から業務の全部または一部停止等の命令を受けることとなります。

② 繰延税金資産

当行グループでは、将来の課税所得の見積額を限度として、既に支払った税金のうち将来回収が可能と判断した額に係る繰延税金資産を計上していますが、課税制度の変更等により繰延税金資産の回収ができない場合には、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(6) その他のリスク

① 戦略リスク

当行グループは「地域密着と健全経営」という経営理念に基づき、「地域の皆さまとともに未来を創造する質の高い金融サービス業」の実現を目指し、お客さまロイヤルティの向上および高い健全性と低コスト・高収益体質を兼ね備えた銀行構築に取り組んでおりますが、経営基盤とする山梨県及び西東京地区における経済情勢の悪化、あるいは他金融機関との競合激化により、戦略が想定した成果を生まない可能性があります。

② 固定資産の減損会計

「固定資産の減損に係る会計基準」及び「固定資産の減損に係る会計基準の適用指針」を適用し、所有する固定資産に損失が発生した場合には、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

③ 大規模災害のリスク

東海地震等の大規模な災害で、当行グループの被災による損害のほか、取引先の業績悪化による信用リスクの上昇などを通じて、業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

④ 感染症の流行

新型インフルエンザ等感染症が大流行した場合、当行グループ役職員の欠勤の増加などにより、業務縮小などの可能性があるほか、経済活動への悪影響による取引先の業績悪化により信用リスクが増加するなど、当行の業績に悪影響を及ぼす可能性があります。

5 【経営上の重要な契約等】

該当ありません。

6 【研究開発活動】

該当ありません。

7 【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度における財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析は、以下のとおりであります。

なお、本文中における将来予想に関する記述は、有価証券報告書の提出日現在において入手可能な情報に基づき作成しており、実際の業績は環境の変化等により異なる結果となることがあります。

(1) 財政状態

① 総預金、国債・投資信託窓口販売残高

依然として金利は低水準で推移いたしました。多様化するお客さまの資産運用ニーズに迅速かつ適切にお応えすべく、商品やサービスの充実に努めてまいりました結果、総預金(預金及び譲渡性預金)の期末残高は、個人預金の増加(294億円)などにより、前年比394億円増加し2兆5,058億円となりました。

また、国債及び投資信託の窓口販売残高の合計は、前年比22億円減少し2,299億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)-(A)
総預金	2,466,416	2,505,877	39,461
金融機関	47,715	60,871	13,156
公金	197,926	186,189	△ 11,737
法人	473,693	482,365	8,672
個人	1,746,968	1,776,452	29,484
その他	112	—	△ 112

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)-(A)
国債	149,824	146,311	△ 3,513
投資信託	82,321	83,631	1,310
合計	232,146	229,943	△ 2,203

(注) 国債及び投資信託の残高は、売買の取扱高であり、連結貸借対照表には計上されておりません。

② 貸出金

引き続き資金需要は総じて低調に推移いたしました。個人向けローンや中堅・中小企業向け融資の拡大に努めるとともに、公共団体等の資金需要にも積極的にお応えしてまいりました。この結果、期末残高は、法人・公共団体向け貸出の増加(383億円)を主因に前年比242億円増加し、1兆5,166億円となりました。

消費者ローン残高は、前年比76億円減少し3,821億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
貸出金	1,492,384	1,516,665	24,281

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
法人・公共団体向け貸出	1,098,725	1,137,076	38,351
中小企業等向け貸出	878,076	851,236	△ 26,840
消費者ローン	389,776	382,153	△ 7,623

③ 有価証券

政府保証債・地方債などの公共債を引き受けるとともに、投資環境や市場動向を見極めながら効率的な運用に努めました。

当連結会計年度は、2,485億円(前年比428億円減)の購入・引受を行い、償還は964億円(前年比61億円減)となりました。また、売却は951億円(前年比370億円増)となりました。

その他有価証券の評価差額については、株式相場の下落などにより前年比63億円減少し、229億円の評価益となりました。このうち、株式は53億円(前年比65億円減)の評価益、債券は176億円(前年比2億円増)の評価益、その他は1億円(前年比1億円減)の評価損となりました。評価差額229億円から、繰延税金負債91億円を控除した残額137億円(前年比42億円減)を、その他有価証券評価差額金に計上しております。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
有価証券	1,045,175	1,091,852	46,677
国債	474,603	564,537	89,934
地方債	173,378	174,655	1,277
社債	308,246	278,354	△ 29,892
株式	60,651	50,312	△ 10,339
その他	28,295	23,992	△ 4,303

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
その他有価証券評価差額	29,302	22,922	△ 6,380
うち株式評価差額	11,898	5,386	△ 6,512
うち債券評価差額	17,384	17,665	281
うちその他評価差額	19	△ 128	△ 147

④ 繰延税金資産・負債

繰延税金資産は、貸倒引当金が減少したことなどから9億円減少いたしました。また、各項目の回収スケジュールを見直した結果、評価性引当額が4億円増加いたしました。

繰延税金負債は、その他有価証券評価益の減少により20億円減少いたしました。

以上の結果、当年度末の繰延税金資産(負債)の純額は前年比7億円増加し、2億円の繰延税金資産となりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)-(A)
繰延税金資産			
貸倒引当金	10,956	8,572	△ 2,384
有価証券償却	4,889	5,132	243
退職給付引当金	4,247	4,516	269
税務上の繰越欠損金	21	—	△ 21
減価償却費	451	1,273	822
その他	3,350	3,494	144
繰延税金資産小計	23,916	22,989	△ 927
評価性引当額	△ 11,579	△ 12,001	△ 422
繰延税金資産合計	12,337	10,987	△ 1,350
繰延税金負債			
その他有価証券評価差額金	△ 11,212	△ 9,118	2,094
その他	△ 1,568	△ 1,569	△ 1
繰延税金負債合計	△ 12,780	△ 10,687	2,093
繰延税金資産の純額 (△は繰延税金負債の純額)	△ 443	299	742

自己資本に占める繰延税金資産(その他有価証券評価差額を除く)の割合

		前連結会計年度 (A)	当連結会計年度 (B)	増減 (B)-(A)
純資産額(連結貸借対照表)	百万円	161,976	159,424	△ 2,552
純資産額に対する 繰延税金資産の割合	%	6.64	5.90	△ 0.74
Tier I 額	百万円	143,335	145,083	1,748
Tier I 額に対する 繰延税金資産の割合	%	7.51	6.49	△ 1.02

(注) Tier I 額は、自己資本比率算定上の自己資本額のうち、基本的項目の金額であります。

⑤ 不良債権残高

リスク管理債権(連結)及び金融再生法に基づく開示債権(当行単体)の状況、及びこれらの保全状況は以下の通りであります。

当連結会計年度は、引当手法の見直し等なお一層の厳格な対応を図りましたが、お取引先企業に対する経営相談や再生支援の積極的な取り組みに効果が表れたことなどから、不良債権残高は減少いたしました。

なお、部分直接償却は実施しておりません。

リスク管理債権(連結)

		前連結会計年度 (A)	当連結会計年度 (B)	増減 (B)－(A)
破綻先債権額	百万円	13,687	4,570	△ 9,117
延滞債権額	百万円	50,113	48,434	△ 1,679
3カ月以上延滞債権額	百万円	150	—	△ 150
貸出条件緩和債権額	百万円	1,253	2,379	1,126
合計 ①	百万円	65,205	55,383	△ 9,822
貸出金残高 ②	百万円	1,492,384	1,516,665	24,281
リスク管理債権比率 ①÷②	%	4.36	3.65	△ 0.71
担保・保証等による保全額 ③	百万円	63,063	52,974	△ 10,089
保全率 ③÷①	%	96.71	95.64	△ 1.07
一般貸倒引当金残高 ④	百万円	9,390	9,177	△ 213
保全率 (③+④)÷①	%	111.11	112.22	1.11

部分直接償却を実施した場合のリスク管理債権残高及びリスク管理債権比率は、以下のとおりとなります。

(当連結会計年度 連結)

		実施前 (A)	実施後 (B)	増減 (B)－(A)
破綻先債権額	百万円	4,570	2,222	△ 2,348
延滞債権額	百万円	48,434	44,606	△ 3,828
3カ月以上延滞債権額	百万円	—	—	—
貸出条件緩和債権額	百万円	2,379	2,379	0
合計	百万円	55,383	49,208	△ 6,175
リスク管理債権比率	%	3.65	3.25	△ 0.40

金融再生法開示債権(単体)

		前事業年度 (A)	当事業年度 (B)	増減 (B)－(A)
破産更生債権及び これらに準ずる債権	百万円	29,318	14,608	△ 14,710
危険債権	百万円	33,119	37,043	3,924
要管理債権	百万円	1,404	2,379	975
小計	① 百万円	63,842	54,030	△ 9,812
正常債権	百万円	1,451,921	1,483,001	31,080
合計	② 百万円	1,515,763	1,537,031	21,268
開示債権比率	①÷② %	4.21	3.51	△ 0.70
担保・保証等による保全額 ③	百万円	61,879	51,827	△ 10,052
保全率	③÷① %	96.92	95.92	△ 1.00

(注) 「担保・保証等による保全額」に含まれている要管理債権に対する貸倒引当金は、要管理先債権に対する貸倒引当金を、要管理先債権に対する要管理債権の割合により按分し計上しております。

部分直接償却を実施した場合の金融再生法開示債権及び開示債権比率は、以下のとおりとなります。

(当事業年度 単体)

		実施前 (A)	実施後 (B)	増減 (B)－(A)
破産更生債権及び これらに準ずる債権	百万円	14,608	9,635	△ 4,973
危険債権	百万円	37,043	37,043	0
要管理債権	百万円	2,379	2,379	0
小計	① 百万円	54,030	49,057	△ 4,973
正常債権	百万円	1,483,001	1,483,001	0
合計	② 百万円	1,537,031	1,532,058	△ 4,973
開示債権比率	①÷② %	3.51	3.20	△ 0.31

⑥ 引当金

当連結会計年度は、不良債権の最終処理を促進したことにより、個別貸倒引当金は112億円減少いたしました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
一般貸倒引当金	9,390	9,177	△ 213
個別貸倒引当金	27,581	16,293	△ 11,288
役員賞与引当金	23	31	8
役員退職慰労引当金	461	539	78
睡眠預金払戻損失引当金	226	332	106
偶発損失引当金	300	246	△ 54
退職給付引当金 (連結貸借対照表計上額純額)	5,494	6,128	634
前払年金費用	1,660	1,338	△ 322
退職給付引当金	7,155	7,467	312

⑦ 自己資本比率(国内基準)

自己資本額が当期純利益の計上により14億円増加し、リスク・アセット等が貸出金の減少等により420億円減少したことから、自己資本比率は前年比0.84ポイント上昇し16.07%となりました。

また、Tier I (基本的項目)比率も0.85ポイント上昇し15.46%となりました。

		前連結会計年度 (A)	当連結会計年度 (B)	増減 (B) - (A)
基本的項目 (Tier I)	① 百万円	143,335	145,083	1,748
補完的項目	百万円	6,127	5,865	△ 262
控除項目(△)	百万円	126	115	△ 11
自己資本額	② 百万円	149,336	150,833	1,497
リスク・アセット等	③ 百万円	980,435	938,416	△ 42,019
自己資本比率	②÷③ %	15.23	16.07	0.84
Tier I 比率	①÷③ %	14.61	15.46	0.85

(2) 経営成績

① 資金利益

資金運用収益は、貸出金利息の減少などにより前年比18億円減少し、386億円となりました。資金調達費用は、預金利息の減少などにより前年比16億円減少し22億円となりました。この結果、資金利益は前年比2億円減少し363億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
資金運用収益	40,565	38,674	△ 1,891
貸出金利息	27,979	25,675	△ 2,304
有価証券利息配当金	12,367	12,817	450
コールローン利息及び 買入手形利息	125	89	△ 36
その他	93	92	△ 1
資金調達費用	3,935	2,281	△ 1,654
預金利息	3,387	1,962	△ 1,425
譲渡性預金利息	377	254	△ 123
コールマネー利息及び 売渡手形利息	55	0	△ 55
その他	114	63	△ 51
資金利益	36,629	36,392	△ 237

② 役務取引等利益

投資信託販売手数料の増加などにより、役務取引等利益は前年比1億円増加し58億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
役務取引等収益	7,482	7,639	157
受入為替手数料	2,291	2,240	△ 51
その他の役務収益	5,191	5,398	207
役務取引等費用	1,714	1,748	34
支払為替手数料	714	723	9
その他の役務費用	999	1,025	26
役務取引等利益	5,768	5,890	122

③ その他業務利益

国債等債券関係損益が前年比3億円増加したことなどから、その他業務利益は前年比2億円増加し、18億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
その他業務収益	7,064	6,718	△ 346
その他業務費用	5,466	4,854	△ 612
その他業務利益	1,598	1,864	266

国債等債券関係損益は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
国債等債券売却益	1,098	1,353	255
国債等債券償還益	—	—	—
国債等債券売却損	317	254	△ 63
国債等債券償還損	—	—	—
国債等債券償却	2	—	△ 2
国債等債券関係損益	779	1,098	319

④ その他経常損益

株式関係損益が前年比36億円減少しましたが、不良債権処理費用も前年比59億円減少したことなどから、その他経常損益は前年比25億円増加し△52億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
その他経常収益	2,311	1,481	△ 830
その他経常費用	10,150	6,744	△ 3,406
その他経常損益	△ 7,839	△ 5,262	2,577

株式関係損益は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
株式等売却益	1,179	634	△ 545
株式等売却損	24	623	599
株式等償却	739	3,265	2,526
株式関係損益	415	△ 3,255	△ 3,670

不良債権処理費用は以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
一般貸倒引当金繰入額	444	△ 10	△ 454
個別貸倒引当金繰入額	7,402	2,214	△ 5,188
貸出金償却	53	37	△ 16
債権売却損	234	143	△ 91
偶発損失引当金繰入額	266	35	△ 231
不良債権処理費用	8,402	2,420	△ 5,982

⑤ 営業経費

システム更改を主因とした人件費の増加により、営業経費は前年比16億円増加し308億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
人件費	15,776	17,229	1,453
物件費	12,101	12,367	266
税金	1,364	1,274	△ 90
営業経費	29,243	30,871	1,628

⑥ 特別損益

特別利益が41百万円減少し、特別損失は減損損失の増加などにより5億円増加したことから、特別損益は前年比5億円減少し△5億円となりました。

	前連結会計年度 (百万円) (A)	当連結会計年度 (百万円) (B)	増減(百万円) (B) - (A)
特別利益	113	72	△ 41
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	82	—	△ 82
償却債権取立益	15	42	27
収用補償金	15	—	△ 15
その他	—	29	29
特別損失	142	647	505
固定資産処分損	114	230	116
減損損失	27	307	280
資産除去債務会計基準の 適用に伴う影響額	—	110	110
特別損益	△ 28	△ 575	△ 547

(3) キャッシュ・フローの状況

営業活動によるキャッシュ・フロー

預金、譲渡性預金が394億円増加、コールローン等が394億円減少したものの、貸出金が242億円増加、借入金で213億円減少したことなどから、446億円のキャッシュイン（前期は920億円のキャッシュイン）となりました。

投資活動によるキャッシュ・フロー

有価証券の取得を2,485億円行いましたが、売却・償還が1,915億円あったことなどから、612億円のキャッシュアウト（前期は1,356億円のキャッシュアウト）となりました。

財務活動によるキャッシュ・フロー

自己株式の取得14億円、配当金の支払11億円などにより、25億円のキャッシュアウト（前期は11億円のキャッシュアウト）となりました。

以上の結果、現金及び現金同等物の期末残高は、650億円（前期比192億円減少）となりました。

	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B)－(A)
営業活動によるキャッシュ・フロー	92,036	44,621	△ 47,415
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 135,694	△ 61,293	74,401
財務活動によるキャッシュ・フロー	△ 1,117	△ 2,551	△ 1,434
現金及び現金同等物の期末残高	84,251	65,030	△ 19,221

第3 【設備の状況】

当行グループは、報告セグメントが銀行業のみであり、セグメント情報の記載を省略しているため。設備の状況については、「銀行業」と「その他」に区分しております。

1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度は、中期経営計画達成のための戦略的な投資や勘定系システム更改に伴う投資等、銀行業は42億52百万円、その他の事業において61百万円の投資を行いました。

また、当連結会計年度において、主要な設備の除却、売却等はありません。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

平成23年3月31日現在													
	会社名	店舗名 その他	所在地	セグメントの 名称	設備の 内容	土地	建物	動産	リース 資産	ソフト ウェア	合計	従業員数 (人)	
						面積 (㎡)							帳簿価額(百万円)
当行	—	本店 他24店	山梨県 甲府市	銀行業	店舗	31,668 (6,012)	3,954	2,386	1,127	41	—	7,511	722
	—	吉田支店 他50店	山梨県 富士吉田 市他	銀行業	店舗	75,747 (6,037)	5,584	3,201	946	—	—	9,733	645
	—	東京支店 他14店	東京都	銀行業	店舗	8,064 (3,475)	914	379	168	—	—	1,462	200
	—	電算 センター	山梨県 甲府市	銀行業	電算 センター	3,122 (—)	87	496	304	1	7,686	8,576	58
	—	研修 センター	山梨県 甲府市	銀行業	研修 センター	2,953 (—)	1,541	808	296	—	—	2,647	1
	—	ローン センター	山梨県 甲府市	銀行業	ローン センター	920 (—)	124	418	13	—	—	555	25
	—	甲府寮 他61ヶ所	山梨県 甲府市他	銀行業	社宅・寮	16,335 (—)	1,019	877	10	—	—	1,906	2
	—	その他	山梨県 甲府市他	銀行業	その他	35,079 (9,355)	339	363	14	—	—	717	0
国内連結 子会社	山梨中央 保証 株式会社	本店	山梨県 甲府市	銀行業	営業所	— (—)	—	—	5	—	21	26	4
	山梨中銀 リース 株式会社	本店 他1店	山梨県 甲府市他	その他	営業所	— (—)	—	—	1	7	31	40	11
	山梨中銀 ディー シー カード 株式会社	本店	山梨県 甲府市	その他	営業所	— (—)	—	0	2	—	2	5	13
	山梨中銀 経営コン サルティ ング 株式会社	本店	山梨県 甲府市	その他	営業所	— (—)	—	—	1	—	—	1	10

(注) 1 土地の面積欄の()内は、借地の面積(うち書き)であり、その年間賃借料は建物も含め427百万円でありま

す。

2 動産は、事務機械1,644百万円、その他1,248百万円であります。

3 当行の法人営業所1か所、海外駐在員事務所1か所、店舗外現金自動設備130か所は、上記に含めて記載し

ております。

4 土地及び建物の帳簿価額には、その他の有形固定資産に含まれている遊休資産の帳簿価額を含んでおりま

す。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、営業基盤の強化とともに、合理化・効率化の進展を目的として計画を策定しております。

当連結会計年度末において計画中である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 新設、改修

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	セグメント の名称	設備の 内容	投資予定金額 (百万円)		資金調達 方法	着手年月	完了予定 年月
						総額	既支払額			
当行	本店他	山梨県 甲府市他	改修等	銀行業	店舗等	2,793	212	自己資金	—	—
	本店他	山梨県 甲府市他	新設等	銀行業	事務機械	603	—	自己資金	—	—

(注) 1 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおります。

2 店舗等及び事務機械の主なものは、平成24年3月までに設置予定であります。

(2) 売却、除却等

該当ありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	398,000,000
計	398,000,000

② 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (平成23年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (平成23年6月29日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	184,915,000	同 左	東京証券取引所 (市場第一部)	単元株式数は1,000株であります。
計	184,915,000	同 左	—	—

(2) 【新株予約権等の状況】

該当ありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当ありません。

(4) 【ライツプランの内容】

該当ありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金 増減額 (千円)	資本準備金 残高 (千円)
平成22年6月1日(注)	△ 5,000	184,915	—	15,400,000	—	8,287,374

(注) 平成22年5月26日開催の取締役会決議に基づき、平成22年6月1日に自己株式5,000,000株の消却を実施しました。

(6) 【所有者別状況】

平成23年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数1,000株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	0	67	28	414	126	3	6,065	6,703	—
所有株式数(単元)	0	80,267	1,056	33,237	15,019	4	53,953	183,536	1,379,000
所有株式数の割合(%)	0.00	43.73	0.58	18.11	8.18	0.00	29.40	100.00	—

(注) 自己株式4,367,504株は、「個人その他」に4,367単元、「単元未満株式の状況」に504株含まれております。

(7) 【大株主の状況】

平成23年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8番11号	10,306	5.70
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	7,169	3.97
明治安田生命保険相互会社(常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 (東京都中央区晴海一丁目8番12号 晴海アイランドトリトンスクエア オフィスタワーZ棟)	6,047	3.34
東京海上日動火災保険株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目2番1号	5,600	3.10
山梨中央銀行職員持株会	山梨県甲府市丸の内一丁目20番8号	5,346	2.96
株式会社損害保険ジャパン	東京都新宿区西新宿一丁目26番1号	3,549	1.96
株式会社常陽銀行(常任代理人 日本マスタートラスト信託銀行株式会社)	茨城県水戸市南町二丁目5番5号 (東京都港区浜松町二丁目11番3号)	3,217	1.78
富国生命保険相互会社(常任代理人 資産管理サービス信託銀行株式会社)	東京都千代田区内幸町二丁目2番2号 (東京都中央区晴海一丁目8番12号 晴海アイランドトリトンスクエア オフィスタワーZ棟)	3,000	1.66
学校法人帝京大学	東京都板橋区加賀二丁目11番1号	2,977	1.64
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町二丁目11番3号	2,973	1.64
計	—	50,185	27.79

(注) 1 上記の信託銀行所有株式数のうち、当該銀行の信託業務に係る株式数は、次のとおりです。

日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口) 10,306千株

日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口) 2,973千株

2 当行は、平成23年3月31日現在、自己株式を4,367千株(2.36%)保有しておりますが、上記大株主から除外しております。

3 株式会社三菱UFJフィナンシャル・グループから、平成16年11月15日付で大量保有報告書の提出があり、平成16年10月31日付で以下の株式を所有している旨の報告を受けておりますが、当行として当事業年度末時点における所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況では考慮しておりません。

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
株式会社三菱東京UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	8,962	4.72
三菱UFJ信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号	2,081	1.10
三菱UFJ証券株式会社	東京都千代田区丸の内二丁目4番1号	27	0.01
三菱UFJセキュリテーズ インターナショナル	6 Broadgate, London EC2M 2AA, United Kingdom	330	0.17
三菱UFJ投信株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番5号	154	0.08
計	—	11,554	6.08

4 Platinum Investment Management Limitedから、平成19年12月7日付で大量保有報告書の提出があり、平成19年12月3日現在で以下の株式を所有している旨の報告を受けておりますが、当行として当事業年度末時点における所有株式数の確認ができませんので、上記大株主の状況では考慮しておりません。

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に対する 所有株式数の割合(%)
Platinum Investment Management Limited	Level 8, 7 Macquarie Place, Sydney NSW 2000, Australia	8,760	4.61

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成23年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 4,367,000	—	単元株式数は1,000株であります。
完全議決権株式(その他)	普通株式 179,169,000	179,169	同上
単元未満株式	普通株式 1,379,000	—	1単元(1,000株)未満の株式であります。
発行済株式総数	184,915,000	—	—
総株主の議決権	—	179,169	—

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当行所有の自己株式504株が含まれております。

② 【自己株式等】

平成23年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社山梨中央銀行	甲府市丸の内 一丁目20番8号	4,367,000	—	4,367,000	2.36
計	—	4,367,000	—	4,367,000	2.36

(9) 【ストックオプション制度の内容】

当該制度は、会社法第236条、第238条及び第240条に基づく株式報酬型ストックオプションとして、当行の取締役(社外取締役を除く)に対して新株予約権を割り当てることを、平成23年6月29日開催の取締役会において決議されたものであり、その内容は以下のとおりであります。

決議年月日	平成23年6月29日
付与対象者の区分及び人数	当行取締役(社外取締役を除く) 12名
新株予約権の目的となる株式の種類	当行普通株式 下記〔募集事項〕7(1)に記載しております。
株式の数	240,000株 下記〔募集事項〕7(1)に記載しております。
新株予約権の行使時の払込金額	新株予約権の行使により交付を受けることができる株式1株当たり1円とし、これに付与新株式数の総数を乗じた金額とする。
新株予約権の行使期間	平成23年7月30日～平成53年7月29日 下記〔募集事項〕7(3)に記載しております。
新株予約権の行使の条件	下記〔募集事項〕7(6)に記載しております。
新株予約権の譲渡に関する事項	下記〔募集事項〕7(5)に記載しております。
代用払込みに関する事項	—
組織再編行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	下記〔募集事項〕7(8)に記載しております。

(注) 新株予約権の募集事項は以下のとおりであります。

〔募集事項〕

1. 新株予約権の名称
株式会社山梨中央銀行第1回新株予約権
2. 新株予約権の総数
当行取締役(社外取締役を除く)に付与する新株予約権の総数は1,022個とする。
上記総数は、割当予定数であり、引受けの申込みがなされなかった場合等、割り当てる新株予約権の総数が減少したときは、割り当てる新株予約権の総数をもって発行する新株予約権の総数とする。
3. 新株予約権の割り当ての対象者およびその人数ならびに割り当てる新株予約権の数
当行取締役(社外取締役を除く) 12名 1,022個
4. 新株予約権の払込金額の算定方法
各新株予約権の払込金額は、割当日において次式ブラック・ショールズモデルにより、以下の(2)から(7)の基礎数値に基づき算定した1株当たりのオプション価格に新株予約権1個当たりの目的である株式数を乗じた金額とする。

$$C = Se^{-qT}N(d_1) - e^{-rT}KN(d_2)$$

ここで、

$$d_1 = \frac{\ln\left(\frac{S}{K}\right) + \left(r - q + \frac{\sigma^2}{2}\right)T}{\sigma\sqrt{T}}, \quad d_2 = d_1 - \sigma\sqrt{T}$$

- (1) 1株あたりのオプション価格(C)
- (2) 株価(S)：平成23年7月29日の東京証券取引所における当行普通株式の普通取引の終値(当日に終値がない場合は、それに先立つ直近日の終値)
- (3) 行使価格(K)：1円
- (4) 予想残存期間(T)：1年6ヶ月
- (5) ボラティリティ(σ)：上記(4)の予想残存期間に対応する過去の連続した期間の各週最終取引日における当行普通株式の普通取引の終値に基づき算定した株価変動率
- (6) 無リスクの利子率(r)：残存年数が予想残存期間に対応する国債の利子率
- (7) 配当利回り(q)：直近年度の1株当たりの配当金÷上記(2)で定める株価
- (8) 標準正規分布の累積分布関数(N(・))

なお、当該価額は、新株予約権の公正価額であり、有利発行には該当しない。

また、会社法第246条第2項の規定に基づき、割り当てを受ける者が、当該払込金額の払込みに代えて、当行に対して有する報酬債権と新株予約権の払込金額の債務とを相殺するものとする。

5. 新株予約権の割当日 平成23年7月29日

6. 新株予約権と引換えにする金銭の払込みの期日 平成23年7月29日

7. 新株予約権の内容

- (1) 新株予約権の目的である株式の種類および数
 新株予約権の目的である株式の種類は当行普通株式とし、新株予約権1個当たりの目的である株式数(以下、「付与株式数」という。)は、100株とする。
 なお、当行が普通株式の株式の分割または株式の併合を行う場合は、次の算式により付与株式数の調整を行うものとする。ただし、かかる調整は、新株予約権のうち、当該株式の分割または株式の併合の時点で行使されていない新株予約権の目的である株式数について行われ、調整により生じる1株未満の端数株は、これを切り捨てる。

$$\text{調整後付与株式数} = \text{調整前付与株式数} \times \text{株式の分割または株式の併合の比率}$$
 また、割当日後に当行が合併、会社分割または株式交換を行う場合、その他付与株式数の調整を必要とする場合には、合理的な範囲で、付与株式数の調整を行うことができるものとする。
- (2) 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額
 各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、当該各新株予約権の行使により交付を受けることができる株式1株当たり1円とし、これに付与株式数の総数を乗じた金額とする。
- (3) 新株予約権を行使することができる期間
 平成23年7月30日から平成53年7月29日までとする(以下、「権利行使期間」という。)。ただし、権利行使期間の最終日が当行の休日にあたる時は、その前営業日を最終日とする。
- (4) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
 - ① 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条第1項の規定に従い算定される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数が生じたときは、その端数を切り上げるものとする。
 - ② 新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本準備金の額は、上記①記載の資本金等増加限度額から上記①に定める増加する資本金の額を減じた金額とする。
- (5) 譲渡による新株予約権の取得の制限
 譲渡による新株予約権の取得については、当行取締役会の承認を要するものとする。
- (6) 新株予約権の行使の条件
 - ① 新株予約権者は、当行の取締役の地位を喪失した日の翌日以降10日間に限り、一括してのみ新株予約権を行使することができる。
 - ② 新株予約権者が死亡した場合、新株予約権が、新株予約権者の法定相続人のうち配偶者または一親等の親族の1名(以下「相続承継人」という。)のみに帰属した場合に限り、相続承継人は次の各号の条件のもと、本契約に従って新株予約権を行使することができる。ただし、刑法犯のうち、重大な犯罪を行ったと認められる者は、相続承継人となることができない。
 - i 相続承継人が死亡した場合、その相続人は新株予約権を相続することはできない。
 - ii 相続承継人は、相続開始後10ヶ月以内かつ権利行使期間の最終日までに当行所定の相続手続を完了しなければならない。
 - iii 相続承継人は、権利行使期間内かつ当行所定の相続手続完了時から2ヶ月以内に限り、一括してのみ新株予約権を行使することができる。

(7) 新株予約権の取得条項

- ① 新株予約権者が権利行使をする前に、上記(6)の定めまたは契約の定めにより新株予約権の行使ができなくなった場合、当行は当行の取締役会が別途定める日をもって、当該新株予約権を無償で取得することができる。
- ② 当行が消滅会社となる合併契約、当行が分割会社となる吸収分割契約もしくは新設分割計画または当行が完全子会社となる株式交換契約もしくは株式移転計画の承認の議案が当行株主総会(株主総会が不要な場合は当行の取締役会)において承認された場合は、当行は当行の取締役会が別途定める日をもって、同日時点で権利行使されていない新株予約権を無償で取得することができる。

(8) 組織再編を実施する際の新株予約権の取扱い

当行が、合併(当行が合併により消滅する場合に限る。)、吸収分割、新設分割、株式交換または株式移転(以上を総称して以下、「組織再編行為」という。)をする場合において、組織再編行為の効力発生日の直前において残存する新株予約権(以下、「残存新株予約権」という。)を保有する新株予約権者に対し、会社法第236条第1項8号イからホまでに掲げる株式会社(以下、「再編対象会社」という。)の新株予約権を以下の条件に基づき交付することとする。この場合においては、残存新株予約権は消滅し、再編対象会社の新株予約権を新たに交付するものとする。

ただし、以下の条件に沿って再編対象会社の新株予約権を交付する旨を、合併契約、吸収分割契約、新設分割計画、株式交換契約または株式移転計画において定めた場合に限るものとする。

- ① 交付する再編対象会社の新株予約権の数
新株予約権者が保有する残存新株予約権の数と同一の数を交付するものとする。
- ② 新株予約権の目的である再編対象会社の株式の種類および数
新株予約権の目的である株式の種類は再編対象会社普通株式とし、新株予約権の行使により交付する再編対象会社普通株式の数は、組織再編行為の条件等を勘案のうえ、(1)に準じて決定する。
- ③ 新株予約権の行使に際して出資される財産の価額
交付される各新株予約権の行使に際して出資される財産の価額は、以下に定める再編後行使価額に当該各新株予約権の目的である株式数を乗じて得られる金額とする。再編後行使価額は、交付される各新株予約権を行使することにより交付を受けることができる再編対象会社の株式1株当たり1円とする。
- ④ 新株予約権を行使することができる期間
(3)に定める権利行使期間の開始日と組織再編行為の効力発生日のうちいずれか遅い日から、(3)に定める権利行使期間の満了日までとする。
- ⑤ 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金および資本準備金に関する事項
(4)に準じて決定する。
- ⑥ 譲渡による新株予約権の取得の制限
譲渡による新株予約権の取得については、再編対象会社の取締役会の承認を要するものとする。
- ⑦ 新株予約権の行使の条件
(6)に準じて決定する。
- ⑧ 新株予約権の取得条項
(7)に準じて決定する。
- (9) 新株予約権を行使した際に生ずる1株に満たない端数の処理
新株予約権者が新株予約権を行使した場合に新株予約権者に交付する株式の数に1株に満たない端数があるときは、これを切り捨てるものとする。
- (10) 新株予約権証券の不発行
当行は新株予約権に係る新株予約権証券を発行しない。

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当ありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第155条第3号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(平成22年5月26日)での決議状況 (取得日平成22年5月27日)	1,793,000	638,308,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	1,793,000	638,308,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	—	—
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	—	—
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	—	—

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(平成22年11月25日)での決議状況 (取得日平成22年12月1日～平成23年3月23日)	2,000,000	800,000,000
当事業年度前における取得自己株式	—	—
当事業年度における取得自己株式	1,906,000	794,748,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	94,000	5,252,000
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	4.7	0.6
当期間における取得自己株式	—	—
提出日現在の未行使割合(%)	4.7	0.6

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	34,352	14,000,170
当期間における取得自己株式	1,018	396,575

(注) 当期間における取得自己株式には、平成23年6月1日から本有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額 (円)	株式数(株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った 取得自己株式	—	—	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	5,000,000	2,116,750,000	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る 移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他(単元未満株式の買増請求によ る売渡)	4,432	1,858,284	—	—
保有自己株式数	4,367,504	—	4,368,522	—

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成23年6月1日から本有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び買増しによる株式数は含まれておりません。

3 【配当政策】

当行は、銀行業としての公共性に鑑み、健全経営を維持するため適正な内部留保の充実に努めるとともに、安定的な配当を継続実施することを基本方針としております。

また、剰余金の配当につきましては、中間配当と期末配当の年2回の配当を行うことを基本方針としております。配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当事業年度の剰余金の配当につきましては、1株当たり年6円（うち中間配当金3円）の普通配当いたしました。

内部留保資金につきましては、店舗設備の充実や機械化投資のほか、顧客サービスの向上や経営基盤の強化に向けて有効に活用いたします。

なお、当行は会社法第454条第5項に規定する中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成22年11月12日 取締役会	547	3.0
平成23年6月29日 定時株主総会	541	3.0

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第104期	第105期	第106期	第107期	第108期
決算年月	平成19年3月	平成20年3月	平成21年3月	平成22年3月	平成23年3月
最高(円)	955	820	690	542	468
最低(円)	714	551	441	359	289

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成22年10月	11月	12月	平成23年1月	2月	3月
最高(円)	345	367	381	424	468	457
最低(円)	289	311	340	370	416	330

(注) 最高・最低株価は東京証券取引所市場第一部におけるものであります。

5 【役員の状況】

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長	代表取締役	芦澤敏久	昭和18年3月25日生	昭和41年4月 当行入行 平成2年1月 青沼支店長 平成4年7月 富士支店長 平成7年7月 南支店長 平成11年6月 取締役吉田支店長 平成15年6月 常務取締役経営企画部長 平成17年6月 専務取締役 平成18年10月 代表取締役専務 平成19年6月 代表取締役頭取 平成23年6月 代表取締役会長(現職)	(注)3	79
取締役頭取	代表取締役	進藤中	昭和22年8月21日生	昭和47年4月 当行入行 平成6年4月 営業本部法人部 審査グループ主任審査役 平成6年9月 後屋支店長 平成8年7月 八王子支店長 平成10年1月 本店営業部副部長兼融資課長 兼外国為替課長 平成11年11月 営業本部情報調査部長 平成13年6月 日下部支店長 平成15年6月 取締役人事部長 平成17年6月 常務取締役経営企画部長 平成21年6月 代表取締役専務 平成23年6月 代表取締役頭取(現職)	(注)3	30
専務取締役		関光良	昭和28年9月19日生	昭和52年4月 当行入行 平成10年6月 営業本部営業統括部営業開発 グループ主任調査役 平成11年6月 めじろ台支店長 平成13年11月 経営企画部部長代理兼企画課長 平成14年10月 経営企画部副部長兼企画課長 平成16年8月 経営企画部副部長 平成17年6月 営業本部営業統括部長 平成17年7月 執行役員営業本部営業統括部長 平成19年6月 取締役リスク統括部長 平成20年3月 取締役人事部長 平成21年6月 常務取締役経営企画部長 平成23年6月 専務取締役(現職)	(注)3	19
常務取締役	営業統括 部長	くぬぎ茂夫	昭和26年1月3日生	昭和48年4月 当行入行 平成7年6月 和戸支店長 平成9年6月 青柳支店長 平成11年11月 総合企画部副部長兼企画課長 平成13年6月 営業本部情報調査部長 平成13年6月 営業本部公務部長 兼情報調査部長 平成13年7月 営業本部地域振興部長 平成15年5月 小笠原支店長 平成17年4月 営業本部西東京推進部長 兼八王子支店長 平成17年6月 取締役営業本部西東京推進部長 兼八王子支店長 平成19年6月 取締役東京支店長 兼西東京推進部長 平成21年4月 取締役本店営業部長 平成22年7月 取締役営業統括部長 平成23年6月 常務取締役営業統括部長(現職)	(注)3	22

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
常務取締役	経営企画部長	安藤昌夫	昭和27年7月9日生	昭和51年4月 当行入行 平成9年2月 総合企画部経営管理グループ主任調査役 平成9年7月 総合企画部主計グループ主任調査役兼収益管理グループ主任調査役 平成12年10月 総合企画部部長代理兼主計グループ主任調査役兼収益管理グループ主任調査役 平成13年6月 総合企画部副部長兼主計グループ主任調査役兼収益管理グループ主任調査役 平成13年9月 経営企画部副部長兼主計グループ主任調査役兼収益管理グループ主任調査役 平成15年11月 白根支店長 平成17年6月 金融市場部長 平成17年7月 執行役員金融市場部長 平成19年6月 取締役金融市場部長 平成21年6月 取締役人事部長 平成23年6月 常務取締役経営企画部長(現職)	(注)3	23
常務取締役	本店営業部長	田中正信	昭和28年11月28日生	昭和51年4月 当行入行 平成11年1月 明見支店長 平成13年6月 都留支店長 平成16年4月 大月支店長 平成17年7月 執行役員大月支店長 平成18年9月 執行役員大月支店長兼猿橋支店長 平成19年6月 取締役吉田支店長兼明見支店長 平成20年6月 取締役吉田支店長 平成21年6月 取締役総務部長 平成23年4月 取締役本店営業部長 平成23年6月 常務取締役本店営業部長(現職)	(注)3	16
取締役顧問		小野 聖太郎	昭和15年6月27日生	昭和39年4月 当行入行 平成3年7月 総合企画部副部長兼企画課長 平成4年5月 東支店長 平成7年6月 取締役本店営業部長 平成9年6月 常務取締役東京支店長 平成11年6月 専務取締役 平成13年6月 代表取締役頭取 平成19年6月 代表取締役会長 平成23年6月 取締役顧問(現職)	(注)3	79
取締役		細田明男	昭和8年11月15日生	昭和56年6月 株式会社山梨放送取締役 昭和56年6月 当行監査役 昭和62年6月 当行取締役(現職)	(注)3	707
取締役	事務統括部長	井上明彦	昭和28年1月1日生	昭和50年4月 当行入行 平成11年7月 忍野支店長 平成13年10月 河口湖支店長 平成16年6月 貢川支店長 平成18年1月 貢川支店長兼西支店長兼美術館前支店長 平成19年6月 事務統括部長 平成19年7月 執行役員事務統括部長 平成21年6月 取締役事務統括部長(現職)	(注)3	12

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役	東京支店長	荻原 政行	昭和28年7月13日生	昭和51年4月 当行入行 平成13年1月 東山梨支店長 平成15年6月 営業統括部副部長兼営業統括グループ主任調査役 平成16年6月 営業統括部副部長兼営業統括グループ主任調査役兼国際グループ主任調査役 平成16年8月 営業統括部副部長 平成17年4月 小笠原支店長 平成18年1月 小笠原支店長兼若草支店長兼甲西支店長 平成19年6月 貢川支店長兼西支店長兼美術館前支店長 平成19年7月 執行役員貢川支店長兼西支店長兼美術館前支店長 平成21年6月 執行役員吉田支店長 平成21年6月 取締役吉田支店長 平成23年6月 取締役東京支店長(現職)	(注)3	18
取締役	融資審査部長	加藤 正	昭和30年1月23日生	昭和53年4月 当行入行 平成13年6月 中央市場支店長 平成15年2月 融資審査部副部長兼審査グループ主任審査役 平成17年6月 柳町支店長 平成17年12月 柳町支店長兼東支店長 平成19年6月 八王子支店長 平成19年7月 執行役員八王子支店長 平成21年4月 執行役員東京支店長兼西東京推進部長 平成21年6月 取締役東京支店長 平成23年6月 取締役融資審査部長(現職)	(注)3	13
取締役	吉田支店長	広瀬 猛弘	昭和29年6月27日生	昭和53年4月 当行入行 平成13年3月 田町支店長 平成15年6月 石和支店長 平成17年11月 新宿支店長 平成19年6月 日下部支店長兼東山梨支店長兼加納岩支店長 平成21年4月 八王子支店長 平成21年7月 執行役員八王子支店長 平成23年6月 取締役吉田支店長(現職)	(注)3	13
取締役	人事部長	田辺 公久	昭和32年1月23日生	昭和54年4月 当行入行 平成12年10月 人事部部長代理兼人事課長 平成14年10月 一宮支店長 平成16年4月 国母支店長 平成17年6月 経営企画部副部長 平成21年6月 次期システム移行統括部長 平成21年7月 執行役員次期システム移行統括部長 平成23年4月 執行役員次期システム移行統括部長兼次期システム移行統括課長 平成23年6月 取締役人事部長(現職)	(注)3	10

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
常勤監査役		佐野 武彦	昭和17年7月29日生	昭和41年4月 当行入行 平成2年4月 人事部副部長兼人事課長 平成5年3月 市川支店長 平成7年6月 新宿支店長 平成10年6月 常勤監査役(現職)	(注)4	39
常勤監査役		岩間 美則	昭和29年1月10日生	昭和51年4月 当行入行 平成8年9月 審査部審査グループ主任審査役 平成9年7月 審査部審査第1グループ主任審査役 平成12年6月 上野原支店長 平成14年4月 融資審査部主任調査役 平成16年5月 本店営業部副部長兼融資課長兼外国為替課長 平成17年6月 監査部長 平成17年7月 執行役員監査部長 平成19年6月 常勤監査役(現職)	(注)4	21
監査役		武田 與光	昭和16年6月28日生	平成10年3月 株式会社テンヨ武田 代表取締役社長 平成10年3月 武田食品株式会社 代表取締役社長(現職) 平成13年6月 当行監査役(現職) 平成16年3月 株式会社テンヨ武田 代表取締役会長(現職)	(注)4	29
監査役		高野 孫左エ門	昭和31年7月22日生	平成7年5月 株式会社吉字屋本店 代表取締役社長(現職) 平成13年5月 ネットヨタ山梨株式会社 代表取締役社長 平成16年6月 当行監査役(現職) 平成17年3月 山梨トヨベツト株式会社 代表取締役社長(現職)	(注)4	11
監査役		古屋 俊仁	昭和20年8月4日生	昭和51年4月 古屋法律会計事務所開設 弁護士、公認会計士、 税理士各登録(現職) 平成20年6月 当行監査役(現職)	(注)4	16
計						1,157

(注) 1 取締役 細田明男氏は、会社法第2条第15号に定める社外取締役であります。

2 監査役 武田與光、高野孫左エ門及び古屋俊仁の各氏は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。

3 任期は、平成23年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成25年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

4 任期は、平成20年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成24年3月期に係る定時株主総会終結の時までであります。

5 当行では、経営の意思決定の迅速化と業務執行機能の拡充により経営の効率化を図るとともに、人材の抜擢・登用により、常に「進化」を目指す銀行として組織の活性化を図り、もって環境の変化に迅速・的確に対応し、コーポレート・ガバナンスの実効性を確保することを目的として、執行役員制度を導入しております。

執行役員は、以下の通りであります。(平成23年7月1日就任予定)

- 三宅 辰 幸 (金融市場部長)
- 浅川 文 明 (監査部長)
- 小泉 真 (経営管理部長)
- 井上 久 仁 (総務部長)
- 斉藤 正 輝 (業務集中部長)
- 内藤 恵 一 (八王子支店長)
- 佐藤 義 信 (経営企画部広報CSR室長)
- 早川 幸 夫 (韮崎支店長)

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

※コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当行は、銀行業としての社会的責任と公共的使命を認識し、健全経営の維持や経営の透明性の確保などを通じて地域社会からの信頼を確立し、地域社会の繁栄と経済の発展に貢献したいと考えております。

その実現のために、経営効率を高めるためのより強固な組織体制と内部統制の仕組みを構築し、役員全員が高い倫理観を維持するとともに企業内容の積極的な開示に取り組むなど、コーポレート・ガバナンスの充実に向けた各種施策を継続的に実施してまいります。

① 企業統治の体制の概要

当行の取締役会は、有価証券報告書の提出日現在、取締役13名により構成し、当行の経営方針その他の重要事項を決定するとともに、取締役の業務執行状況を監督しております。なお、取締役のうち、社外取締役1名が業務執行から独立した立場で取締役会に加わることにより、取締役会の経営監督機能の強化を図っております。

なお、当行の取締役は15名以内とする旨を定款で定めております。

当行は監査役会設置会社であり、監査役会は、現在、監査役5名により構成し、うち社外監査役は3名であります。

なお、当行の監査役は5名以内とする旨を定款で定めております。

業務執行においては、取締役頭取が、取締役会の決定した基本方針に基づき、業務執行上の最高責任者として当行の業務を統括しております。なお、常務取締役以上の取締役および常勤監査役等が出席し、取締役会の決定した経営の基本方針に基づき、当行の全般的経営管理および業務執行に関わる重要事項について審議および決議する機関である常務会、また、常勤取締役、常勤監査役および執行役員が出席し、当行の経営に関わる諸問題について情報を共有し、経営の方向性を確認することを目的とする常勤役員会を設置しております。また、取締役頭取の命によって、ALM委員会、内部統制委員会、コンプライアンス委員会、リスク管理委員会等、各種委員会を組成し、取締役頭取の諮問事項および本部横断的に検討すべき課題等について研究・審議を行い、主要な会議体の運営を補完しております。

また、経営の効率化や組織の活性化を図るため、銀行の重要な業務執行を分担する最高位の職員として執行役員を任命しております。

当行は、総合的な金融機能を提供するため、保証、リース、クレジットカード、コンサルティング等を事業内容とする4つのグループ会社を擁し、グループとしての一体的な運営にあっております。

② 当該体制を採用する理由

取締役会は、各取締役の業務執行状況を監督しており、その中で、業務執行を行う経営陣から独立性を有している社外取締役は客観的かつ大局的な視点に立ち、十分な助言を行っております。

一方、社外監査役は、経営全般の監視と有効な助言を行っております。また、監査役会は、内部監査部門及び会計監査人と相互に連携を図っており、ガバナンス体制が有効に機能する体制を敷いております。

③ 内部統制システムの整備の状況及びリスク管理体制の整備の状況

A 取締役および使用人の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制

a 当行は、法令等遵守を経営の最重要課題と位置付け、全ての取締役および職員の行動規範として制定したコンプライアンス規定に則り、職務を執行しております。あわせて、具体的な手引きとしてコンプライアンスマニュアルを、また実践計画としてコンプライアンスプログラムを作成し、態勢を強化しております。さらに内部通報制度を有効に活用し、組織の自浄機能の向上に努めております。

b コンプライアンス委員会は、当行全体のコンプライアンスに係る事項を統括・管理しております。

コンプライアンスに係る統括部署は、コンプライアンス委員会事務局を務め、各部所管業務に関するコンプライアンスへの取り組みについて統括・管理するとともに、同部署は法令等に違反する行為または違反の疑いがある行為について取締役会へ報告を行っております。

c 各部所店に配置されたコンプライアンス責任者は、日常業務での違法性のチェックを行うとともに、違反行為等を発見した場合は当該業務に係る所管部またはコンプライアンス担当に報告しております。

d 市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力とは、断固として対決します。

反社会的勢力への対応を統括する部署を定めるなど組織として対応する態勢を整備するとともに、警察や弁護士等の外部専門機関と連携し、不当要求に対しては毅然とした態度で臨みます。

B 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

a 当行は、取締役の職務の執行に係る重要文書を、文書管理規定に則って保存することを義務付けております。

b 特に株主総会議事録および取締役会議事録については、10年間の保存を義務付け、必要に応じて閲覧可能な状態を維持しております。

c また、各取締役が関わるその他の重要な会議議事録および各種稟議書・回議書等についても、文書管理規定の定めるところに則り保存しております。

d 情報の漏洩・滅失・紛失が生じた場合、顧客情報安全管理要領等に則り対応しております。

C 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

a 当行は、リスク・カテゴリー毎にリスク管理部署を定め、各種リスク管理規定に則った適正なリスク管理に努めております。

b リスク管理委員会は、当行全体の各種リスクに係る事項を統括・管理しております。

リスク管理に係る統括部署は、リスク管理委員会事務局を務め、各部所管業務に関するリスク管理への取り組みについて統括・管理するとともに、全てのリスクの把握に努めております。また、同部署はリスク管理状況について、必要に応じて取締役会へ報告を行っております。

c 危機が表面化した場合、コンティンジェンシープラン等に則り、円滑な業務の遂行および事業の継続性確保に努めております。

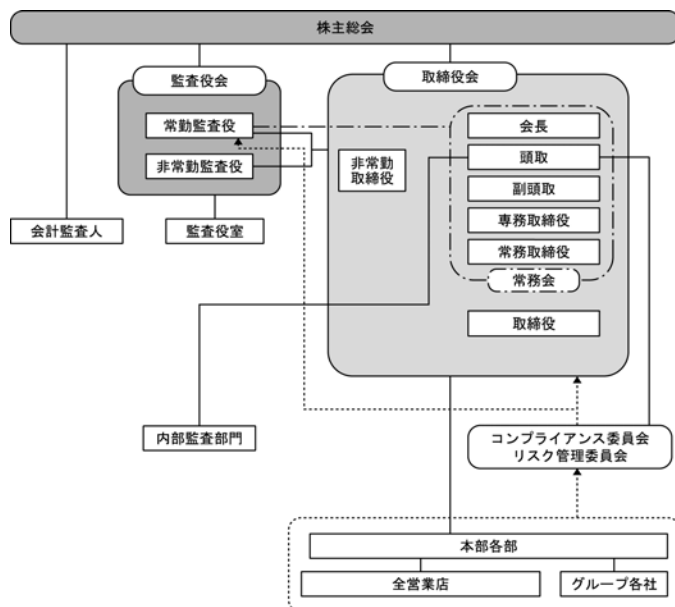
D 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

a 当行は、執行役員制度に基づき執行役員を置き、取締役の補佐にあたらせる等、取締役の職務の効率的執行の確保に努めております。

b 主要会議体の役割および付議基準を明確に定め、各種会議の効率的な運営を通して、取締役による迅速かつ合理的な意思決定に努めております。

- c 業務執行を委嘱された取締役および執行役員は、各種基本規定のもと所管する各種業務に必要な規定を制定し、それらの規定に則った適正な業務を執行いたします。
 - d 取締役は、常勤役員会、常務会、部長会等の会議に出席し、当行の全般的経営管理および業務執行に関わる重要事項について協議検討を行い、業務執行の適正化および迅速化に努めております。
 - e 取締役は、各業務執行部門に中期経営計画、総合予算計画および教育研修計画を策定させるとともに、それらの達成に向けて各業務への取り組みを促し、経営計画のマネジメントにあたっております。
 - f 業務執行の適正を確保するため、監査部門は取締役会の定める内部監査規定等に則り、内部管理体制の有効性を検証しております。
- E 当行および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- a グループ各社は、「グループ会社運営管理規定」に基づき各種業務に取り組むとともに、同規定内に記載した親会社である当行への協議・報告に関する取り決めに徹底することにより、グループ全体の業務の適正性の確保と連携強化に努めております。
 - b 当行の取締役頭取、専務取締役および所管部部長等は、グループ各社の非常勤取締役としての職務遂行を通して、企業集団としての一体性保持に努めております。
 - c グループ会社運営に関する統括部署およびコンプライアンス統括部署は、各社の代表取締役から定期的に業況およびコンプライアンスの状況等の報告をそれぞれ受けるとともに、適時指導・管理を行い、企業集団としての一体性保持に努めております。
 - d 当行内部監査部門は、グループ各社との業務監査委託契約に基づき監査を実施し、業務の適正化に努めております。
- F 財務報告の信頼性を確保するための体制
- 当行及びグループ各社は財務報告に係る内部統制の基本方針を定め、内部統制統括部署を経営企画部内に設置するなど財務報告に係る内部統制の態勢を構築するとともに、整備及び運用状況の有効性を評価することにより、財務報告の信頼性を確保しております。
- G 監査役職務の補助すべき使用人の配置およびその使用人の取締役からの独立性に関する事項
- a 当行は、監査役職務の実効性を高めるため、監査役室を設置するとともに専任の監査役スタッフを置き、監査役職務の補助にあたらせております。
 - b また、その使用人の取締役からの独立性を確保するため、専任の監査役スタッフの人事異動・考課については、監査役会の意見を尊重しております。
- H 取締役および使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制
- a 取締役は、業務または経営に重大な影響を与える事項を監査役に遅滞なく報告しております。
 - b 使用人は、業務または経営に重大な影響を与える事項を監査役の出席する重要な会議において適時適切に報告するとともに、その他必要な都度遅滞なく監査役へ報告しております。
- I その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制
- a 当行は、監査役が取締役会・常務会・その他重要な会議に出席し必要があると認めるときは意見を述べるができることを規定する等、監査役の監査の実効性確保に努めております。
 - b 監査役は、代表取締役および会計監査人等と定期的に意見交換を行い、内部監査部門との連携を強化し、必要と判断される要請を行う等、相互認識を深めるよう努めております。

(内部統制システム体制図)



④ 内部監査及び監査役監査の状況

当行の内部監査部門については、取締役頭取の直轄とし、被監査部門からの独立性を確保した監査部(平成23年3月31日現在、31名が在籍)を設置しております。監査部は、当行グループの内部統制の適切性、有効性を検証し、被監査部署における内部事務処理等の問題点の発見・指摘、内部管理態勢の評価及び問題点の改善方法の提言等を行っております。なお、内部監査の結果は、取締役会に定期的にあるいは随時報告しております。

当行は監査役会設置会社として、社外監査役3名と当行の業務に精通した常勤監査役2名によって監査役会を構成しております。なお、社外監査役1名は、弁護士、公認会計士、税理士として培われた高度な専門的知識と豊富な経験を有しております。監査役は、取締役会へ出席し、経営全般の監視と有効な助言を行っており、常勤監査役は、重要な意思決定の過程及び業務の執行状況を把握するため、常務会・常勤役員会・部長会及びリスク管理委員会等の重要な会議に出席し、必要に応じ意見を述べる等、適切な監査のための権限行使を行っております。また、監査役の職務を補助するため監査役室を設置し専任の監査役スタッフ2名を置いております。

会計監査人は、定期的に当行の主要業務について内部統制が有効に整備及び運用されているか監査を実施しております。

常勤監査役と監査部は、定期的な意見交換会、内部監査結果の監査役への報告、及び時宜に合った情報交換を実施しております。監査役と監査部および会計監査人は、定期的に意見交換を実施し、監査計画や実施した監査結果に係る情報を共有しております。

⑤ 社外取締役及び社外監査役

社外取締役 細田明男氏とは、通常の銀行取引を行っております。

社外監査役 武田與光氏とは、同氏が代表取締役を務める株式会社テンヨ武田及び武田食品株式会社と共に、通常の銀行取引を行っております。

社外監査役 高野孫左エ門氏とは、同氏が代表取締役を務める株式会社吉字屋本店及び山梨トヨペット株式会社と共に、通常の銀行取引を行っております。

社外監査役 古屋俊仁氏とは、通常の銀行取引を行っております。また、当行の顧問弁護士として顧問契約を締結し、報酬を支払っております。

社外取締役は、県内複数の企業の取締役を歴任し、その豊富な経験と見識を活かし、外部の立場から客観的かつ大局的な視点に立った十分な助言を期待して選任しております。なお、一般株主と利益相反が生じるおそれがないものと判断し、東京証券取引所の有価証券上場規程に定める独立役員に指定しております。

社外監査役は、企業経営者としての豊富な経験、幅広い知見を活かし、あるいは、弁護士、公認会計士、税理士として培われた高度な専門的知識と豊富な経験等を活かし、経営全般の監視と有効な助言を期待し、選任しております。

社外取締役または社外監査役は適切に監督または監査することができるよう、取締役会において、毎月の業務執行状況、重要な事項の報告を受けております。また、社外監査役は、監査役会において、常勤監査役から重要な会議等の状況及び監査実施状況等の報告を受けております。

⑥ 役員の報酬等の内容

当事業年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

役員区分	員数 (名)	報酬等の総額 (百万円)			
		基本報酬 (百万円)	賞与 (百万円)	退職慰労金 (百万円)	
取締役 (社外取締役を除く。)	12	226	132	24	69
監査役 (社外監査役を除く。)	2	40	28	5	6
社外役員	4	15	9	1	4

(注) 使用人兼務役員の使用人給与額は95百万円、員数は7人であり、その内容は基本報酬84百万円、賞与11百万円です。

当行の取締役(社外取締役を除く)に対する報酬等は、「役員報酬」、「役員賞与金」及び「ストックオプション報酬」で構成されております。

監査役及び社外取締役に対する報酬等は、「役員報酬」及び「役員賞与金」で構成されております。

なお、「ストックオプション報酬」は、経営改革の一環として、役員の業績向上及び企業価値向上に対する貢献意欲を高めるとともに、株主重視の経営意識を高めることを目的として、平成23年6月29日開催の定時株主総会決議により導入したものであります。

「役員報酬」は、別途定める「役員報酬内規」に基づき決定した金額としております。

具体的には、株主総会で決議された取締役及び監査役の報酬年額の範囲内において、支給対象者の役位、経験等を総合的に勘案し、取締役に対しては取締役会の決議により、監査役に対しては監査役の協議により、各々の役員の報酬額を決定しております。

「役員賞与金」は、別途定める「役員賞与金内規」に基づき決定した金額としております。

具体的には、株主総会で決議された報酬年額の範囲内において、当該事業年度の業績等を総合的に勘案し、取締役に対しては取締役会の決議により、監査役に対しては監査役の協議により、各々の役員の賞与金額を決定しております。

「ストックオプション報酬」の内容は、「1 株式等の状況 (9) スtockオプション制度の内容」に記載しております。

なお、役員ごとの連結報酬等の総額は、連結報酬等の総額が1億円以上である者が存在しないため、記載しておりません。

⑦ 株式の保有状況

イ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の銘柄数及び貸借対照表計上額

銘柄数 116銘柄
貸借対照表計上額の合計額 36,215百万円

ロ 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

(前事業年度)

貸借対照表計上額の大きい順の10銘柄は以下のとおりであります。

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
東京電力株式会社	1,506,888	3,755	総合取引の推進、取引関係強化のため
東京海上ホールディングス株式会社	1,212,000	3,191	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
小田急電鉄株式会社	3,569,315	2,776	総合取引の推進、取引関係強化のため
住友不動産株式会社	1,214,290	2,160	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社三菱UFJ フィナンシャルグループ	4,203,150	2,059	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社常陽銀行	4,905,000	2,045	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
東海旅客鉄道株式会社	2,000	1,424	総合取引の推進、取引関係強化のため
三菱地所株式会社	844,789	1,292	総合取引の推進、取引関係強化のため
電源開発株式会社	391,080	1,204	総合取引の推進、取引関係強化のため
富士急行株式会社	2,473,668	1,125	総合取引の推進、取引関係強化のため

(当事業年度)

貸借対照表計上額の大きい順の50銘柄は以下のとおりであります。

(特定投資株式)

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
東京海上ホールディングス株式会社	1,212,000	2,695	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
小田急電鉄株式会社	3,569,315	2,502	総合取引の推進、取引関係強化のため
住友不動産株式会社	1,214,290	2,020	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社三菱UFJ フィナンシャルグループ	4,203,150	1,614	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社常陽銀行	4,905,000	1,603	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
東海旅客鉄道株式会社	2,000	1,318	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社サンリオ	505,673	1,244	総合取引の推進、取引関係強化のため
三菱地所株式会社	844,789	1,188	総合取引の推進、取引関係強化のため
京王電鉄株式会社	2,152,282	1,069	総合取引の推進、取引関係強化のため
富士急行株式会社	2,473,668	1,058	総合取引の推進、取引関係強化のため
電源開発株式会社	391,080	1,001	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社群馬銀行	1,965,000	866	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
アサヒビール株式会社	604,440	835	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社第四銀行	2,867,000	788	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
東京電力株式会社	1,506,888	702	総合取引の推進、取引関係強化のため
三井不動産株式会社	464,151	637	総合取引の推進、取引関係強化のため
シチズンホールディングス 株式会社	1,327,790	636	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社三菱ケミカル ホールディングス	1,000,171	523	総合取引の推進、取引関係強化のため
三菱電機株式会社	526,000	516	総合取引の推進、取引関係強化のため
NK S Jホールディングス 株式会社	948,275	514	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社東京スタイル	814,000	489	総合取引の推進、取引関係強化のため
ファナック株式会社	38,028	478	総合取引の推進、取引関係強化のため
東日本旅客鉄道株式会社	100,000	462	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社大分銀行	1,528,000	430	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
キャノン株式会社	114,000	412	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社八十二銀行	800,000	383	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
野村ホールディングス 株式会社	850,114	369	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社鹿児島銀行	620,000	349	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社秋田銀行	1,222,000	329	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
相鉄ホールディングス 株式会社	1,371,671	316	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社南都銀行	756,000	306	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社東邦銀行	1,233,000	277	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社阿波銀行	542,000	273	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社山口 フィナンシャルグループ	350,000	269	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社十八銀行	1,096,000	253	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社岩手銀行	71,500	235	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
コニカミノルタ ホールディングス株式会社	329,500	229	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社キッツ	532,306	212	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社四国銀行	794,000	202	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社山形銀行	482,900	200	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社大和証券 グループ本社	518,169	197	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
東海カーボン株式会社	455,668	188	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社くろがねや	528,195	176	総合取引の推進、取引関係強化のため
株式会社清水銀行	47,200	173	経営戦略上の緊密な関係の維持、強化のため
株式会社松屋	371,000	168	総合取引の推進、取引関係強化のため
味の素株式会社	192,823	167	総合取引の推進、取引関係強化のため

(みなし保有株式)

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
株式会社サンリオ	450,000	1,107	退職給付信託の信託財産としている株式で、 議決権行使の指図権限を有しております。
三菱電機株式会社	500,000	491	同 上
シチズンホールディングス 株式会社	865,500	414	同 上
ファナック株式会社	30,000	377	同 上

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。

ハ 保有目的が純投資目的である投資株式の貸借対照表計上額、受取配当金、売却損益及び評価損益

	前事業年度					
	貸借対照表 計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)	貸借対照表計上 額と取得原価の 差額(百万円)	減損処理額 (百万円)
上場株式	20,372	325	1,154	3,695	3,553	141
非上場株式	—	—	—	—	—	—

	当事業年度					
	貸借対照表 計上額 (百万円)	受取配当金 (百万円)	売却損益 (百万円)	評価損益 (百万円)	貸借対照表計上 額と取得原価の 差額(百万円)	減損処理額 (百万円)
上場株式	16,980	395	△ 5	1,722	1,671	50
非上場株式	—	—	—	—	—	—

ニ 当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの

該当ありません。

ホ 当事業年度中に投資株式のうち、保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの

該当ありません。

⑧ 会計監査の状況

当行は、会社法及び金融商品取引法に基づく監査契約を、有限責任監査法人トーマツと締結しており、会計監査業務を執行した公認会計士は、園生裕之、鈴木順二の両氏であります。

監査業務に係る補助者は公認会計士8名、公認会計士試験合格者4名、その他18名であります。

⑨ 取締役の選任の決議要件

当行は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨、及び累積投票によらない旨を定款で定めております。

⑩ 株主総会決議事項を取締役会で決議することができることとしている事項

A 自己株式の取得

当行は、機動的な資本政策を遂行することが可能となるよう、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款で定めております。

B 中間配当

当行は、株主の皆様への利益還元を機動的に行うため、会社法第454条第5項の規定により、取締役会の決議によって、毎年9月30日の最終の株主名簿に記載または記録された株主または登録株式質権者に対し、中間配当を行うことができる旨を定款で定めております。

⑪ 株主総会の特別決議要件

当行は、株主総会の円滑な運営を行うため、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款で定めております。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に 基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)	監査証明業務 に基づく報酬(百万円)	非監査業務に 基づく報酬(百万円)
提出会社	63	3	65	—
連結子会社	8	—	8	—
計	71	3	73	—

② 【その他重要な報酬の内容】

該当ありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

(前連結会計年度)

当行が監査公認会計士等に対して報酬を支払っている非監査業務の内容は、金融商品の時価等の開示に関する助言・指導であります。

(当連結会計年度)

該当ありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

該当ありません。

第5 【経理の状況】

1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号。以下「連結財務諸表規則」という。)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。

ただし、前連結会計年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)は改正前の連結財務諸表規則及び銀行法施行規則に基づき作成し、当連結会計年度(自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)は改正後の連結財務諸表規則及び銀行法施行規則に基づき作成しております。

2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。

ただし、前事業年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)は改正前の財務諸表等規則及び銀行法施行規則に基づき作成し、当事業年度(自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)は改正後の財務諸表等規則及び銀行法施行規則に基づき作成しております。

3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、前連結会計年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)及び当連結会計年度(自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)の連結財務諸表並びに前事業年度(自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)及び当事業年度(自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツの監査証明を受けております。

4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを以下のとおり行っております。

会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構に加入し、同機構の行う研修や民間企業の行う研修等に参加しております。

1 【連結財務諸表等】
 (1) 【連結財務諸表】
 ① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
資産の部		
現金預け金	84,472	65,200
コールローン及び買入手形	53,153	13,234
買入金銭債権	10,041	10,515
商品有価証券	8	40
有価証券	※1, ※8, ※13 1,045,175	※1, ※8, ※13 1,091,852
貸出金	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※10 1,492,384	※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※7, ※10 1,516,665
外国為替	※6 459	※6 771
その他資産	※8, ※9 18,551	※8, ※9 16,785
有形固定資産	※11, ※12 26,574	※11, ※12 25,658
建物	9,121	8,837
土地	13,420	13,363
リース資産	269	42
建設仮勘定	399	223
その他の有形固定資産	3,363	3,191
無形固定資産	6,272	8,294
ソフトウェア	943	7,740
ソフトウェア仮勘定	4,652	—
リース資産	109	8
その他の無形固定資産	567	545
繰延税金資産	761	600
支払承諾見返	8,316	7,222
貸倒引当金	△36,972	△25,470
資産の部合計	2,709,198	2,731,372
負債の部		
預金	※8 2,313,758	※8 2,348,666
譲渡性預金	152,658	157,211
コールマネー及び売渡手形	—	922
借入金	※8, ※9 47,528	※8, ※9 26,191
外国為替	92	84
その他負債	15,494	22,730
役員賞与引当金	23	31
退職給付引当金	7,155	7,467
役員退職慰労引当金	461	539
睡眠預金払戻損失引当金	226	332
偶発損失引当金	300	246
繰延税金負債	1,204	301
支払承諾	8,316	7,222
負債の部合計	2,547,221	2,571,948

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
純資産の部		
資本金	15,400	15,400
資本剰余金	8,307	8,287
利益剰余金	122,029	122,889
自己株式	△2,507	△1,836
株主資本合計	143,229	144,740
その他有価証券評価差額金	18,088	13,798
繰延ヘッジ損益	△0	△0
その他の包括利益累計額合計	18,088	13,798
少数株主持分	659	885
純資産の部合計	161,976	159,424
負債及び純資産の部合計	2,709,198	2,731,372

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】
【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
経常収益	57,423	54,514
資金運用収益	40,565	38,674
貸出金利息	27,979	25,675
有価証券利息配当金	12,367	12,817
コールローン利息及び買入手形利息	125	89
預け金利息	10	7
その他の受入利息	82	84
役務取引等収益	7,482	7,639
その他業務収益	7,064	6,718
その他経常収益	※1 2,311	※1 1,481
経常費用	50,509	46,500
資金調達費用	3,935	2,281
預金利息	3,387	1,962
譲渡性預金利息	377	254
コールマネー利息及び売渡手形利息	55	0
借入金利息	27	38
その他の支払利息	86	25
役務取引等費用	1,714	1,748
その他業務費用	5,466	4,854
営業経費	29,243	30,871
その他経常費用	10,150	6,744
貸倒引当金繰入額	7,847	2,204
その他の経常費用	2,303	※2 4,540
経常利益	6,913	8,013
特別利益	113	72
償却債権取立益	15	42
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	82	—
収用補償金	15	—
その他の特別利益	—	29
特別損失	142	647
減損損失	27	307
固定資産処分損	114	230
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	—	110
税金等調整前当期純利益	6,885	7,437
法人税、住民税及び事業税	1,927	683
過年度法人税等	—	1,122
法人税等調整額	1,280	1,351
法人税等合計	3,208	3,156
少数株主損益調整前当期純利益	—	4,281
少数株主利益	201	224
当期純利益	3,475	4,056

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
少数株主損益調整前当期純利益	—	4,281
その他の包括利益	—	※1 △4,286
その他有価証券評価差額金	—	△4,286
繰延ヘッジ損益	—	0
包括利益	—	※2 △5
親会社株主に係る包括利益	—	△232
少数株主に係る包括利益	—	227

③【連結株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
株主資本		
資本金		
前期末残高	15,400	15,400
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	15,400	15,400
資本剰余金		
前期末残高	8,307	8,307
当期変動額		
自己株式の消却	—	△2,116
自己株式の処分	0	△0
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	2,097
当期変動額合計	0	△19
当期末残高	8,307	8,287
利益剰余金		
前期末残高	119,660	122,029
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	△2,097
当期純利益	3,475	4,056
当期変動額合計	2,369	859
当期末残高	122,029	122,889
自己株式		
前期末残高	△2,497	△2,507
当期変動額		
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の消却	—	2,116
自己株式の処分	1	1
当期変動額合計	△10	671
当期末残高	△2,507	△1,836
株主資本合計		
前期末残高	140,870	143,229
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
当期純利益	3,475	4,056
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の処分	1	1
当期変動額合計	2,359	1,511
当期末残高	143,229	144,740

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金		
前期末残高	5,402	18,088
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,685	△4,289
当期変動額合計	12,685	△4,289
当期末残高	18,088	13,798
繰延ヘッジ損益		
前期末残高	△0	△0
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	0	0
当期変動額合計	0	0
当期末残高	△0	△0
その他の包括利益累計額合計		
前期末残高	5,402	18,088
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,685	△4,289
当期変動額合計	12,685	△4,289
当期末残高	18,088	13,798
少数株主持分		
前期末残高	450	659
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	209	225
当期変動額合計	209	225
当期末残高	659	885
純資産合計		
前期末残高	146,722	161,976
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
当期純利益	3,475	4,056
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の処分	1	1
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,894	△4,063
当期変動額合計	15,253	△2,552
当期末残高	161,976	159,424

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	6,885	7,437
減価償却費	2,186	2,343
減損損失	27	307
貸倒引当金の増減(△)	3,462	△11,501
役員賞与引当金の増減額(△は減少)	1	7
退職給付引当金の増減額(△は減少)	14	311
役員退職慰労引当金の増減額(△は減少)	△154	77
睡眠預金払戻損失引当金の増減(△)	△129	106
偶発損失引当金の増減(△)	79	△53
資金運用収益	△40,565	△38,674
資金調達費用	3,935	2,281
有価証券関係損益(△)	△1,194	2,156
為替差損益(△は益)	667	46
固定資産処分損益(△は益)	114	230
貸出金の純増(△)減	39,931	△24,281
預金の純増減(△)	13,919	34,907
譲渡性預金の純増減(△)	40,201	4,553
借入金の純増減(△)	46,627	△21,337
預け金(日銀預け金を除く)の純増(△)減	40	51
コールローン等の純増(△)減	△51,794	39,444
コールマネー等の純増減(△)	△11,591	922
外国為替(資産)の純増(△)減	△98	△311
外国為替(負債)の純増減(△)	△5	△8
資金運用による収入	41,567	40,359
資金調達による支出	△4,303	△2,887
その他	911	10,848
小計	90,738	47,338
法人税等の支払額又は還付額(△は支払)	1,298	△2,716
営業活動によるキャッシュ・フロー	92,036	44,621
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	△291,404	△248,539
有価証券の売却による収入	58,144	95,159
有価証券の償還による収入	102,555	96,400
有形固定資産の取得による支出	△1,662	△1,422
有形固定資産の売却による収入	12	—
無形固定資産の取得による支出	△3,341	△2,892
無形固定資産の売却による収入	0	—
投資活動によるキャッシュ・フロー	△135,694	△61,293

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	△1,105	△1,100
少数株主への配当金の支払額	△1	△1
自己株式の取得による支出	△12	△652
自己株式の売却による収入	1	1
自己株式取得目的の金銭の信託の設定による支出	—	△800
自己株式取得目的の金銭の信託の終了による収入	—	0
財務活動によるキャッシュ・フロー	△1,117	△2,551
現金及び現金同等物に係る換算差額	7	3
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△44,767	△19,220
現金及び現金同等物の期首残高	129,018	84,251
現金及び現金同等物の期末残高	※1 84,251	※1 65,030

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項】

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
1 連結の範囲に関する事項	<p>(1) 連結子会社 5社 連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。 なお、山梨中銀ビジネスサービス株式会社は、平成22年 3月 31日付で解散いたしました。</p> <p>(2) 非連結子会社 1社 やまなしベンチャー育成投資事業有限責任組合 非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。</p>	<p>(1) 連結子会社 4社 連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。 なお、山梨中銀ビジネスサービス株式会社は清算したため、連結の範囲から除外しております。</p> <p>(2) 非連結子会社 1社 同 左</p>
2 持分法の適用に関する事項	<p>(1) 持分法適用の非連結子会社 該当ありません。</p> <p>(2) 持分法適用の関連会社 該当ありません。</p> <p>(3) 持分法非適用の非連結子会社 1社 やまなしベンチャー育成投資事業有限責任組合 持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。</p> <p>(4) 持分法非適用の関連会社 該当ありません。</p>	<p>(1) 持分法適用の非連結子会社 同 左</p> <p>(2) 持分法適用の関連会社 同 左</p> <p>(3) 持分法非適用の非連結子会社 同 左</p> <p>(4) 持分法非適用の関連会社 同 左</p>
3 連結子会社の事業年度等に関する事項	すべての連結子会社の決算日は連結決算日と一致しております。	同 左
4 開示対象特別目的会社に関する事項	—————	—————
5 会計処理基準に関する事項	<p>(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法 商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。</p>	<p>(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法 同 左</p>

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	<p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法 有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については連結決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。ただし、その他有価証券のうち時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。</p> <p>なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。</p>	<p>(2) 有価証券の評価基準及び評価方法</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>
	<p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法 デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。</p>	<p>(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>
	<p>(4) 減価償却の方法</p> <p>① 有形固定資産(リース資産を除く。)</p> <p>有形固定資産は、主として定率法(ただし、平成10年 4月 1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法)を採用しております。</p> <p>なお、主な耐用年数は次のとおりであります。</p> <p style="margin-left: 2em;">建物 3年～50年 その他の有形固定資産 2年～20年</p> <p>また、有形固定資産に計上した連結子会社所有のリース投資資産については、リース期間を償却年数とし、リース期間満了時の見積処分価額を残存価額とする定額法により償却しております。</p> <p>② 無形固定資産(リース資産を除く。)</p> <p>無形固定資産は、定額法を採用しております。</p> <p>また、無形固定資産に計上した連結子会社所有のリース投資資産については、リース期間を償却年数とし、リース期間満了時の見積処分価額を残存価額とする定額法により償却しております。</p>	<p>(4) 減価償却の方法</p> <p>① 有形固定資産(リース資産を除く。)</p> <p style="text-align: center;">同 左</p> <p>② 無形固定資産(リース資産を除く。)</p> <p>無形固定資産は、定額法を採用しております。</p> <p>また、無形固定資産に計上した連結子会社所有のリース投資資産については、リース期間を償却年数とし、リース期間満了時の見積処分価額を残存価額とする定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。</p>

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	<p>③ リース資産</p> <p>所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。</p> <p>なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。</p>	<p>③ リース資産</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>
	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準</p> <p>当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。</p> <p>破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(破綻先)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(実質破綻先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。</p> <p>また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(破綻懸念先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。</p> <p>上記以外の債権(正常先債権・要注意先債権)については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。</p> <p>すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。</p> <p>連結子会社の貸倒引当金も、主として当行と同一の方法により計上しております。</p>	<p>(5) 貸倒引当金の計上基準</p> <p>当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。</p> <p>破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(破綻先)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(実質破綻先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。</p> <p>また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(破綻懸念先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。</p> <p>貸出条件緩和債権(注記事項(連結貸借対照表関係)4. 参照)等を有する債務者及びその関連先に係る債権のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを当初の約定利率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により引き当てております。</p> <p>上記以外の債権(正常先債権及び要注意先債権のうちキャッシュ・フロー見積法を適用した債権を除いた債権)については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。</p>

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
		<p>すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。</p> <p>連結子会社の貸倒引当金も、主として当行と同一の方法により計上しております。</p>
	<p>(6) 役員賞与引当金の計上基準</p> <p>役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当連結会計年度に帰属する額を計上しております。</p>	<p>(6) 役員賞与引当金の計上基準</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>
	<p>(7) 退職給付引当金の計上基準</p> <p>退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。</p> <p>また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は、以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理</p> <p>数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から損益処理</p> <p>(会計方針の変更)</p> <p>当連結会計年度末から「『退職給付に係る会計基準』の一部改正(その3)」(企業会計基準第19号 平成20年 7月31日)を適用しております。</p> <p>なお、従来の方法による割引率と同一の割引率を使用することとなったため、当連結会計年度の連結財務諸表に与える影響はありません。</p>	<p>(7) 退職給付引当金の計上基準</p> <p>退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。</p> <p>また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は、以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理</p> <p>数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から損益処理</p>
	<p>(8) 役員退職慰労引当金の計上基準</p> <p>役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員退職慰労金内規に基づく連結会計年度末現在の要支給額を計上しております。</p>	<p>(8) 役員退職慰労引当金の計上基準</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	<p>(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準</p> <p>睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認める額を計上しております。</p>	<p>(9) 睡眠預金払戻損失引当金の計上基準</p> <p>同 左</p>
	<p>(10) 偶発損失引当金の計上基準</p> <p>偶発損失引当金は、偶発的に発生する損失に備えるため、将来発生する損失を見積り、必要と認める額を計上しております。</p>	<p>(10) 偶発損失引当金の計上基準</p> <p>同 左</p>
	<p>(11) 外貨建資産・負債の換算基準</p> <p>外貨建資産・負債は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。</p>	<p>(11) 外貨建資産・負債の換算基準</p> <p>同 左</p>
	<p>(12) リース取引の収益・費用の計上基準 (貸手側)</p> <p>ファイナンス・リース取引に係る収益・費用の計上基準は、リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっております。</p>	<p>(12) リース取引の収益・費用の計上基準 (貸手側)</p> <p>同 左</p>
	<p>(13) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。</p> <p>繰延ヘッジの採用にあたっては、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引等をヘッジ手段として指定し、当該ヘッジ手段の残存期間を通じて、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認しております。</p>	<p>(13) 重要なヘッジ会計の方法</p> <p>同 左</p>
	<p>—————</p>	<p>(14) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲</p> <p>連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。</p>

	前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	(15) 消費税等の会計処理 消費税及び地方消費税(以下、「消費税等」という。)の会計処理は、税抜方式によっております。 ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当連結会計年度の費用に計上しております。	(15) 消費税等の会計処理 同 左
6 連結子会社の資産及び負債の評価に関する事項	連結子会社の資産及び負債の評価については、全面時価評価法を採用しております。	—————
7 のれん及び負ののれんの償却に関する事項	—————	—————
8 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲	連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。	—————

【連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項の変更】

前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
(金融商品に関する会計基準) 当連結会計年度末から「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 平成20年 3月 10日)及び「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 平成20年 3月 10日)を適用しております。 これによる連結財務諸表への影響は軽微であります。	—————
—————	(資産除去債務に関する会計基準) 当連結会計年度から「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年 3月 31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年 3月 31日)を適用しております。 これにより、経常利益は5百万円、税金等調整前当期純利益は116百万円それぞれ減少しております。

【表示方法の変更】

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
—————	(連結損益計算書関係) 「連結財務諸表に関する会計基準」(企業会計基準第22号 平成20年12月26日)に基づく「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則等の一部を改正する内閣府令」(内閣府令第5号 平成21年3月24日)の適用により、当連結会計年度では、「少数株主損益調整前当期純利益」を表示しております。

【追加情報】

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
—————	当連結会計年度から「包括利益の表示に関する会計基準」(企業会計基準第25号 平成22年6月30日)を適用しております。ただし、「その他の包括利益累計額」及び「その他の包括利益累計額合計」の前連結会計年度の金額は、「評価・換算差額等」及び「評価・換算差額等合計」の金額を記載しております。

【注記事項】

(連結貸借対照表関係)

前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
<p>※1 有価証券には、非連結子会社への出資金126百万円を含んでおります。</p> <p>※2 貸出金のうち、破綻先債権額は13,687百万円、延滞債権額は50,113百万円であります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は150百万円であります。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は1,253百万円であります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で、破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は65,205百万円であります。</p> <p>なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は7,897百万円であります。</p>	<p>※1 有価証券には、非連結子会社への出資金115百万円を含んでおります。</p> <p>※2 貸出金のうち、破綻先債権額は4,570百万円、延滞債権額は48,434百万円であります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は該当ありません。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は2,379百万円であります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で、破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は55,383百万円であります。</p> <p>なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は7,546百万円であります。</p> <p>※7 ローン・パーティシペーションで、平成7年6月1日付日本公認会計士協会会計制度委員会報告第3号に基づいて、原債務者に対する貸出金として会計処理した参加元本金額のうち、連結貸借対照表計上額は、1,480百万円であります。</p>

前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)												
<p>※8 担保に供している資産は次のとおりであります。 担保に供している資産</p> <table border="0"> <tr> <td>有価証券</td> <td>149,923百万円</td> </tr> </table> <p>担保資産に対応する債務</p> <table border="0"> <tr> <td>預金</td> <td>14,020百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>46,850百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、有価証券66,886百万円を差し入れております。 また、その他資産のうち保証金は302百万円であります。</p> <p>※9 借入金のうち558百万円の担保として、未経過リース期間に係るリース契約債権(「その他資産」に含まれるリース投資資産とリース投資資産に係る受取利息相当額の合計額)1,180百万円を供しております。</p> <p>※10 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は368,989百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが353,884百万円あります。 なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※11 有形固定資産の減価償却累計額 33,353百万円</p> <p>※12 有形固定資産の圧縮記帳額 1,062百万円 (当連結会計年度圧縮記帳額 一百万円)</p> <p>※13 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額は2,920百万円であります。</p>	有価証券	149,923百万円	預金	14,020百万円	借入金	46,850百万円	<p>※8 担保に供している資産は次のとおりであります。 担保に供している資産</p> <table border="0"> <tr> <td>有価証券</td> <td>163,879百万円</td> </tr> </table> <p>担保資産に対応する債務</p> <table border="0"> <tr> <td>預金</td> <td>10,223百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>25,400百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、有価証券66,757百万円を差し入れております。 また、その他資産のうち保証金は271百万円あります。</p> <p>※9 借入金のうち616百万円の担保として、未経過リース期間に係るリース契約債権(「その他資産」に含まれるリース投資資産とリース投資資産に係る受取利息相当額の合計額)1,041百万円を供しております。</p> <p>※10 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は377,625百万円あります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが362,305百万円あります。 なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続きに基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※11 有形固定資産の減価償却累計額 33,104百万円</p> <p>※12 有形固定資産の圧縮記帳額 1,062百万円 (当連結会計年度圧縮記帳額 一百万円)</p> <p>※13 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額は2,556百万円あります。</p>	有価証券	163,879百万円	預金	10,223百万円	借入金	25,400百万円
有価証券	149,923百万円												
預金	14,020百万円												
借入金	46,850百万円												
有価証券	163,879百万円												
預金	10,223百万円												
借入金	25,400百万円												

(連結損益計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<p>※1 「その他経常収益」には、株式等売却益1,179百万円を含んでおります。</p>	<p>※1 「その他経常収益」には、株式等売却益634百万円を含んでおります。</p> <p>※2 「その他の経常費用」には、株式等償却3,265百万円を含んでおります。</p>

(連結包括利益計算書関係)

当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)	
※1 当連結会計年度の直前連結会計年度におけるその 他の包括利益	
その他の包括利益	12,694百万円
その他有価証券評価差額金	12,694百万円
繰延ヘッジ損益	0百万円
※2 当連結会計年度の直前連結会計年度における包括 利益	
包括利益	16,371百万円
親会社株主に係る包括利益	16,160百万円
少数株主に係る包括利益	210百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前連結会計年度末 株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	189,915	—	—	189,915	
自己株式					
普通株式	5,615	26	3	5,638	(注)

(注) 当連結会計年度中の変動事由は、単元未満株式の買取請求による増加及び買増請求による減少であります。

2 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成21年6月26日 定時株主総会	普通株式	552	3.0	平成21年3月31日	平成21年6月29日
平成21年11月13日 取締役会	普通株式	552	3.0	平成21年9月30日	平成21年12月7日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成22年6月29日 定時株主総会	普通株式	552	利益剰余金	3.0	平成22年3月31日	平成22年6月30日

II 当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前連結会計年度末 株式数 (千株)	当連結会計年度 増加株式数 (千株)	当連結会計年度 減少株式数 (千株)	当連結会計年度末 株式数 (千株)	摘要
発行済株式					
普通株式	189,915	—	5,000	184,915	(注)2
自己株式					
普通株式	5,638	3,733	5,004	4,367	(注)1,2

(注) 1 当連結会計年度中の増加株式数の内訳は以下のとおりであります。

自己株式

取締役会決議による自己株式の取得による増加 3,699千株

単元未満株式の買取請求による増加 34千株

2 当連結会計年度中の減少株式数の内訳は以下のとおりであります。

(1) 発行済株式

取締役会決議による自己株式の消却による減少 5,000千株

(2) 自己株式

取締役会決議による自己株式の消却による減少 5,000千株

単元未満株式の買増請求による減少 4千株

2 配当に関する事項

(1) 当連結会計年度中の配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)	基準日	効力発生日
平成22年6月29日 定時株主総会	普通株式	552	3.0	平成22年3月31日	平成22年6月30日
平成22年11月12日 取締役会	普通株式	547	3.0	平成22年9月30日	平成22年12月6日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
平成23年6月29日 定時株主総会	普通株式	541	利益剰余金	3.0	平成23年3月31日	平成23年6月30日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表 に掲記されている科目の金額との関係 平成22年3月31日現在 現金預け金勘定 84,472百万円 日本銀行以外への預け金 △ 221百万円 現金及び現金同等物 84,251百万円	※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表 に掲記されている科目の金額との関係 平成23年3月31日現在 現金預け金勘定 65,200百万円 日本銀行以外への預け金 △ 170百万円 現金及び現金同等物 65,030百万円

(リース取引関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
ファイナンス・リース取引 (借手側) 所有権移転外ファイナンス・リース取引 1 リース資産の内容 (1) 有形固定資産 主として事務機器等であります。 (2) 無形固定資産 ソフトウェアであります。 2 リース資産の減価償却の方法 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 「5 会計処理基準に関する事項」の「(4) 減価償却の方法」に記載のとおりであります。 (貸手側) 1 リース投資資産の内訳 リース料債権部分 9,845百万円 見積残存価額部分 —百万円 受取利息相当額 △ 1,093百万円 <u>リース投資資産</u> 8,751百万円 2 リース投資資産に係るリース料債権部分の連結会計年度末日後の回収予定額 1年以内 3,411百万円 1年超2年以内 2,676百万円 2年超3年以内 1,892百万円 3年超4年以内 1,098百万円 4年超5年以内 475百万円 5年超 291百万円 <u>合計</u> 9,845百万円	ファイナンス・リース取引 (借手側) 所有権移転外ファイナンス・リース取引 1 リース資産の内容 (1) 有形固定資産 同 左 (2) 無形固定資産 同 左 2 リース資産の減価償却の方法 同 左 (貸手側) 1 リース投資資産の内訳 リース料債権部分 8,825百万円 見積残存価額部分 —百万円 受取利息相当額 △ 910百万円 <u>リース投資資産</u> 7,915百万円 2 リース投資資産に係るリース料債権部分の連結会計年度末日後の回収予定額 1年以内 3,165百万円 1年超2年以内 2,395百万円 2年超3年以内 1,601百万円 3年超4年以内 974百万円 4年超5年以内 459百万円 5年超 229百万円 <u>合計</u> 8,825百万円

(金融商品関係)

前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業を中心にリース業、クレジットカード業等の金融サービスに係る事業を行っております。銀行業では、預金業務、貸出業務、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務等のほか、国債等公共債、投資信託及び保険の窓口販売等の付随する業務を行っております。また、短期的な資金繰りの調整のために、インターバンク市場においてコールローン及びコールマネー取引等を行っております。このほか、デリバティブ取引としては、為替リスクのヘッジ及び異なる通貨での資金調達・運用のために、先物外国為替予約取引及び資金関連スワップ取引を行っておりますが、仕組みが複雑で投機的な取引は行わない方針であります。このように、主として金利変動リスクを伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響を被らないように、資産及び負債の総合的管理(ALM)を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先に対する貸出金及び国内の有価証券であります。貸出金には、貸出先の契約不履行によってもたらされる信用リスクがあります。有価証券は、主に債券、株式及び投資信託であり、満期保有目的、純投資目的及び政策投資目的(営業推進目的等)で保有しております。また、ごく一部の有価証券(商品有価証券)は、売買目的で保有しております。これらには、それぞれ発行体の信用リスク、金利の変動リスク及び市場価格の変動リスクがあります。

当行グループは、お客さまからの預金を主な調達原資としており、財務内容の健全性を維持することで、安定的な資金調達を確保しておりますが、予期せぬ資金の流出により、必要な資金確保ができなくなる流動性リスクがあります。

デリバティブ取引は、主として資金関連スワップ取引を行っておりますが、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)等に準拠する行内基準に基づき、ヘッジ会計を適用しております。なお、ごく一部ではありますが、ヘッジ会計の要件を満たしていない取引には、為替の変動リスクがあります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行グループは、信用リスクへの対応として、審査体制の整備や人材の育成を進めるとともに、信用リスク管理の高度化に積極的に取り組んでおります。審査体制については、審査部門の独立性を堅持し、事前審査・中間審査・債権保全における厳格な審査及び与信実行後の管理を行っております。日々の業務運営では、営業部門と審査部門あるいは本部と営業店が相互牽制機能を発揮するなかで、融資規定の遵守と適切な運用に努めるほか、融資支援システムの活用などのシステムサポートの充実にも努めております。さらに、刻々と変動するリスクに対応するために、定期的あるいは随時行う信用格付及び自己査定を通して、取引先の実態把握に努めております。また、地方銀行協会加盟行の共同事業である信用リスク情報統合サービスを導入し、バリュー・アット・リスク(過去のデータ等に基づき、今後の一定期間において、特定の確率で、保有する金融商品に生じ得る損失額の推計値。以下「V a R」という。)のより精緻な計量化を目指すなど、信用リスク管理の高度化に積極的に取り組んでおります。

有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、リスク管理部署において、信用情報、時価及びV a Rの把握を行うことで管理しております。

これらの管理状況につきましては、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

② 市場リスクの管理

(A) 金利リスクの管理

当行グループは、多様な金融サービスに対するお客さまのニーズに適切に対応するとともに、銀行全体の収益力向上に資するべく、銀行勘定全体の金利リスク管理を行うことを基本方針としております。具体的には、経営陣を主要メンバーとするA L M委員会において、金利リスクを適切にコントロールするため、「金利リスクヘッジに関する基本方針」を原則半期毎に策定し、金利変動に対する施策の検討を行い、定期的に見直しております。また、毎月開催されるA L M委員会においては、金利予測委員会の作成した金利予測レポートについて検討を行うほか、銀行勘定全体の金利リスク量の推移を注視しております。リスク管理部署においては、銀行勘定の金利リスク量について、V a R及びベシス・ポイント・バリュー(例えば、金利が1ベシス・ポイント(0.01%)変化したときの価値の変動。)を算出して管理しております。このほか、各リスクカテゴリーにまたがるストレスシナリオ及び金利変動についてのモンテカルロ・シミュレーションによるストレステストも併せて実施しており、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

(B) 為替リスクの管理

当行グループは、リスク管理部署において、為替の変動リスクを外国為替持高及びV a Rの把握により管理し、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。為替リスクの大半は、資金関連スワップ取引等によりヘッジしております。

(C) 価格変動リスクの管理

有価証券を含む運用商品の保有については、「市場取引業務を行う上で、公正性の確保と迅速な対応を図るなか、計測かつ管理が可能なリスクについては、収益や自己資本等経営体力の裏付けを前提に能動的に一定のリスクを取り収益機会を捉えていくことを基本とする」というリスク管理の基本運営方針に則り、リスク管理を行っております。運用計画については、先行きの金利及び株式相場の見通しに基づく期待収益率、相場変動リスク並びに運用対象間の相関関係を考慮した市場部門のリスク・リターンを検討し、A L M委員会の協議を経て常務会にて決定しております。株式等の価格変動リスクの計測は、V a Rによって行っております。A L M委員会において、リスク限度額に対するV a R及びストレステストの結果をモニタリングし、健全性の確保及び収益の獲得の両立に努めております。

(D) デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、当行のリスク管理基準に基づき、ポジション限度額の設定及びロスカットルールの厳正な運用等に努め、損益に大きな影響を及ぼさないよう強固な管理態勢の維持を図っており、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、金利動向の分析及び資金の運用・調達期間のミスマッチの管理等によって流動性リスクを管理しております。不測の資金流出に備えた流動性の高い支払準備資産の保持等により、資金繰りリスクを回避し、円滑な資金繰りを確保しており、定期的にリスク管理委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

平成22年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません((注2)参照)。

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金預け金	84,472	84,472	—
(2) コールローン及び買入手形	53,153	53,153	—
(3) 商品有価証券			
売買目的有価証券	8	8	—
(4) 有価証券			
満期保有目的の債券	2,918	2,931	12
その他有価証券	1,041,738	1,041,738	—
(5) 貸出金	1,492,384		
未収収益(貸出金利息)	1,139		
前受収益(貸出金利息及び保証料)(※1)	△ 2,029		
貸倒引当金(※2)	△ 35,777		
	1,455,715	1,470,753	15,037
資産計	2,638,007	2,653,058	15,050
(1) 預金	2,313,758		
未払費用(預金利息)	2,054		
	2,315,813	2,316,772	959
(2) 譲渡性預金	152,658		
未払費用(譲渡性預金利息)	94		
	152,752	152,850	98
(3) 借入金	47,528	47,532	4
負債計	2,516,094	2,517,156	1,061
デリバティブ取引(※3)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	2	2	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(24)	(24)	—
デリバティブ取引計	(22)	(22)	—

(※1) 貸出金の前受利息及び保証業務を行っている連結子会社の前受保証料であります。

(※2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(※3) その他資産又はその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して純額表示しております。なお、負債計上額が資産計上額を上回る項目については、()で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金預け金

預け金はすべて満期のないものであり、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

(2) コールローン及び買入手形

約定期間が短期間(1年以内)であり、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

(3) 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

(4) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

非上場事業債券は、発行体の内部格付、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを、無リスクの利率に信用リスクや経費率等を反映させた利率で割り引いて時価を算出しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「(有価証券関係)」に記載しております。

(5) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを、同様の新規貸出を行った場合に想定される利率若しくは無リスクの利率に信用リスクや経費率等を反映させた利率で割り引いて時価を算出しております。

なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における取得原価又は償却原価から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込期間及び金利条件等により、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金及び譲渡性預金の時価は、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(3) 借入金

借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当行及び連結子会社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、当該借入金の元利金の合計額を、同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は、通貨関連取引(為替予約)であり、インターバンク、ディーラー間市場等での気配値により時価を算出しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は次のとおりであり、金融商品の時価等に関する事項の「資産(4)有価証券」には含まれておりません。

区分	連結貸借対照表計上額(百万円)
① 非上場株式(*1)(*2)	391
② 組合出資金(*1)(*3)	126
合計	517

(※1) 市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象とはしておりません。

(※2) その他有価証券に区分しており、当連結会計年度において、15百万円減損処理を行っております。

(※3) 非連結子会社に該当する組合への出資金であります。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超3年以内 (百万円)	3年超5年以内 (百万円)	5年超7年以内 (百万円)	7年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預け金	54,469	—	—	—	—	—
コールローン及び 買入手形	53,153	—	—	—	—	—
有価証券	94,331	167,465	235,294	227,381	187,092	20,000
満期保有目的の 債券	664	1,629	436	140	—	—
うち社債	664	1,629	436	140	—	—
その他有価証券 のうち満期があ るもの	93,667	165,836	234,857	227,240	187,092	20,000
うち国債	45,007	87,366	91,067	104,503	114,200	20,000
地方債	18,639	32,432	43,903	29,456	44,076	—
社債	30,021	46,037	99,421	91,281	28,816	—
その他	—	—	465	2,000	—	—
貸出金(※)	319,253	291,353	234,603	107,730	132,998	218,329
合計	521,208	458,819	469,897	335,111	320,090	238,329

(※) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めないもの63,801百万円、期間の定めのないもの124,191百万円は含めておりません。

(注4) 有利子負債の連結決算日後の返済予定額

	1年以内 (百万円)	1年超3年以内 (百万円)	3年超5年以内 (百万円)	5年超7年以内 (百万円)	7年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金(※)	2,070,003	168,459	13,327	—	—	—
譲渡性預金	141,673	10,985	—	—	—	—
借入金	47,187	288	52	—	—	—
合計	2,258,864	179,733	13,380	—	—	—

(※) 預金のうち、当座預金等無利息の預金は含めておりません。
また、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループは、銀行業を中心にリース業、クレジットカード業等の金融サービスに係る事業を行っております。銀行業では、預金業務、貸出業務を中心に、商品有価証券売買業務、有価証券投資業務、内国為替業務、外国為替業務、社債受託業務、国債等公共債・投資信託・保険の窓口販売業務などを行っております。また、短期的な資金繰りの調整のために、インターバンク市場においてコールローン及びコールマネー取引等を行っております。このほか、デリバティブ取引としては、為替リスクのヘッジ及び異なる通貨での資金調達・運用のために、先物外国為替予約取引及び資金関連スワップ取引を行っておりますが、仕組みが複雑で投機的な取引は行わない方針であります。このように、主として金利変動リスクを伴う金融資産及び金融負債を有しているため、金利変動による不利な影響を被らないように、資産及び負債の総合的管理(ALM)を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行グループが保有する金融資産は、主として国内の取引先に対する貸出金及び国内の有価証券であります。貸出金には、貸出先の契約不履行によってもたらされる信用リスクがあります。有価証券は、主に債券、株式及び投資信託であり、満期保有目的、純投資目的及び政策投資目的(営業推進目的等)で保有しております。また、ごく一部の有価証券(商品有価証券)は、売買目的で保有しております。これらには、それぞれ発行体の信用リスク、金利の変動リスク及び市場価格の変動リスクがあります。

当行グループは、お客さまからの預金を主な調達原資としており、財務内容の健全性を維持することで、安定的な資金調達を確保しておりますが、予期せぬ資金の流出により、必要な資金確保ができなくなる流動性リスクがあります。

デリバティブ取引は、主として資金関連スワップ取引を行っておりますが、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)等に準拠する行内基準に基づき、ヘッジ会計を適用しております。なお、ごく一部ではありますが、ヘッジ会計の要件を満たしていない取引には、為替の変動リスクがあります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

① 信用リスクの管理

当行グループは、信用リスクへの対応として、審査体制の整備や人材の育成を進めるとともに、信用リスク管理の高度化に積極的に取り組んでおります。審査体制については、審査部門の独立性を堅持し、事前審査・中間審査・債権保全における厳格な審査及び与信実行後の管理を行っております。日々の業務運営では、営業部門と審査部門あるいは本部と営業店が相互牽制機能を発揮するなかで、融資規定の遵守と適切な運用に努めるほか、融資支援システムの活用などのシステムサポートの充実にも努めております。さらに、刻々と変動するリスクに対応するために、定期的あるいは随時行う信用格付及び自己査定を通して、貸出先の実態把握に努めております。また、地方銀行協会加盟行の共同事業である信用リスク情報統合サービスを導入し、バリュー・アット・リスク(過去のデータ等に基づき、今後の一定期間において、特定の確率で、保有する金融商品に生じ得る損失額の推計値。以下「V a R」という。)のより精緻な計量化を目指すなど、信用リスク管理の高度化に積極的に取り組んでおります。

有価証券の発行体の信用リスク及びデリバティブ取引のカウンターパーティーリスクに関しては、リスク管理部署において、信用情報、時価及びV a Rの把握を行うことで管理しております。

これらの管理状況につきましては、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

② 市場リスクの管理

(A) 金利リスクの管理

当行グループは、多様な金融サービスに対するお客さまのニーズに適切に対応するとともに、銀行全体の収益力向上に資するべく、銀行勘定全体の金利リスク管理を行うことを基本方針としております。具体的には、経営陣を主要メンバーとするA L M委員会において、金利リスクを適切にコントロールするため、「金利リスクヘッジに関する基本方針」を原則半期毎に策定し、金利変動に対する施策の検討を行い、定期的に見直しております。また、毎月開催されるA L M委員会においては、金利予測委員会の作成した金利予測レポートについて検討を行うほか、銀行勘定全体の金利リスク量の推移を注視しております。リスク管理部署においては、銀行勘定の金利リスク量について、V a R及びベース・ポイント・バリュー(例えば、金利が1 ベース・ポイント(0.01%)変化したときの価値の変動。)を算出して管理しております。このほか、各リスクカテゴリーにまたがるストレスシナリオ及び金利変動についてのモンテカルロ・シミュレーションによるストレステストも併せて実施しており、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

(B) 為替リスクの管理

当行グループは、リスク管理部署において、為替の変動リスクを外国為替持高及びV a Rの把握により管理し、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。為替リスクの大半は、資金関連スワップ取引等によりヘッジしております。

(C) 価格変動リスクの管理

有価証券を含む運用商品の保有については、「市場取引業務において、公正性の確保と迅速な対応を図るなか、計測および管理が可能なリスクについては、収益や自己資本等経営体力の裏付けを前提に能動的に一定のリスクを取り収益機会を捉える」というリスク管理の基本方針に則り、リスク管理を行っております。運用計画については、先行きの金利及び株式相場の見通しに基づく期待収益率、相場変動リスク並びに運用対象間の相関関係を考慮した市場部門のリスク・リターンを検討し、A L M委員会の審議を経て常務会にて決定しております。株式等の価格変動リスクの計測は、V a Rによって行っております。A L M委員会において、リスク限度額に対するV a R及びストレステストの結果をモニタリングし、健全性の確保及び収益の獲得の両立に努めております。

(D) デリバティブ取引

デリバティブ取引に関しては、当行のリスク管理基準に基づき、ポジション限度額の設定及びロスカットルールの厳正な運用等に努め、損益に大きな影響を及ぼさないよう強固な管理態勢の維持を図っており、定期的にA L M委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

(E) 市場リスクに係る定量的情報

当行グループは、原則保有する全ての金融商品について市場リスクに関する定量的分析を行っており、主にV a Rを用いて市場リスク量を管理しております。具体的には、V a R(一部については、政策投資株式の評価益控除後のリスク量)が取締役会等で決議したリスク限度額(資本配賦額)を超過しないよう市場リスクをコントロールしております。V a R(商品有価証券を除く)の計測にあたっては、分散共分散法(保有期間240日、信頼区間99%、観測期間240営業日)を採用し、円金利、株式、及び投資信託の間の相関を考慮しております。また、要求払預金の円金利リスクについては、コア預金を内部モデルで推計し、V a Rを計測しております。商品有価証券(売買目的有価証券)のV a Rは、別途保有期間10日で計測しております。なお、非上場株式等の時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は信用リスクとして管理しており、連結子会社が保有する金融商品の市場リスク量については極めて僅少であることからV a Rの計測対象外としております。

平成23年3月31日(当期の連結決算日)現在で、当行グループのV a R(商品有価証券を除く)は、全体で31,474百万円、商品有価証券のV a Rは0百万円であります。なお、当行グループでは、V a R計測モデルにより計測したV a Rと実際の損益を比較するバックテストを実施し、結果を毎月ALM委員会に報告しております。バックテストの結果、当行グループが使用するV a R計測モデルは十分な精度で市場リスクを捕捉しているものと考えております。ただし、V a Rは過去の相場変動をベースに統計的に算出した、一定の発生確率における市場リスク量を示しており、通常では考えられないほど市場環境が激変する状況下においては、リスクを適切に捕捉できない場合がございます。

③ 資金調達に係る流動性リスクの管理

当行グループは、金利動向の分析及び資金の運用・調達期間のミスマッチの管理等によって流動性リスクを管理しております。不測の資金流出に備えた流動性の高い支払準備資産の保持等により、資金繰りリスクを回避し、円滑な資金繰りを確保しており、定期的にリスク管理委員会及び取締役会等において経営陣に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価には、市場価格に基づく価額のほか、市場価格がない場合には合理的に算定された価額が含まれております。当該価額の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

平成23年3月31日における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式等は、次表には含めておりません(注2)参照)。

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
(1) 現金預け金	65,200	65,200	—
(2) 商品有価証券			
売買目的有価証券	40	40	—
(3) 有価証券			
満期保有目的の債券	2,554	2,560	6
その他有価証券	1,088,808	1,088,808	—
(4) 貸出金	1,516,665		
未収収益(貸出金利息)	1,023		
前受収益(貸出金利息及び保証料)(※1)	△ 1,711		
貸倒引当金(※2)	△ 24,807		
	1,491,169	1,507,357	16,187
資産計	2,647,773	2,663,967	16,194
(1) 預金	2,348,666		
未払費用(預金利息)	1,445		
	2,350,111	2,350,749	637
(2) 譲渡性預金	157,211		
未払費用(譲渡性預金利息)	101		
	157,313	157,351	37
負債計	2,507,425	2,508,100	674
デリバティブ取引(※3)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(22)	(22)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(1)	(1)	—
デリバティブ取引計	(23)	(23)	—

(※1) 貸出金の前受利息及び保証業務を行っている連結子会社の前受保証料であります。

(※2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(※3) その他資産又はその他負債に計上しているデリバティブ取引を一括して純額表示しております。なお、負債計上額が資産計上額を上回る項目については、()で表示しております。

(注1) 金融商品の時価の算定方法

資 産

(1) 現金預け金

預け金はすべて満期のないものであり、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

(2) 商品有価証券

ディーリング業務のために保有している債券等の有価証券については、取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。

(3) 有価証券

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

非上場事業債券は、発行体の内部格付、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを、無リスクの利率に信用リスクや経費率等を反映させた利率で割り引いて時価を算出しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については「(有価証券関係)」に記載しております。

(4) 貸出金

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを、同様の新規貸出を行った場合に想定される利率若しくは無リスクの利率に信用リスクや経費率等を反映させた利率で割り引いて時価を算出しております。

なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結決算日における取得原価又は償却原価から現在の貸倒見積高を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込期間及び金利条件等により、時価は取得原価又は償却原価と近似していることから、当該価額を時価としております。

負債

(1) 預金、及び(2) 譲渡性預金

要求払預金については、連結決算日に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金及び譲渡性預金の時価は、期間に基づく区分ごとの見積将来キャッシュ・フローを割引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引は、通貨関連取引(為替予約)であり、インターバンク、ディーラー間市場等での気配値により時価を算出しております。

(注2) 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品は次のとおりであり、金融商品の時価等に関する事項の「資産(3)有価証券」には含まれておりません。

区分	連結貸借対照表計上額(百万円)
① 非上場株式(*1)(*2)	374
② 組合出資金(*1)(*3)	115
合計	489

(※1) 市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、時価開示の対象とはしておりません。

(※2) その他有価証券に区分しており、当連結会計年度において、16百万円減損処理を行っております。

(※3) 非連結子会社に該当する組合への出資金であります。

(注3) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

	1年以内 (百万円)	1年超3年以内 (百万円)	3年超5年以内 (百万円)	5年超7年以内 (百万円)	7年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預け金	37,621	—	—	—	—	—
有価証券	84,700	221,901	313,604	225,966	146,469	—
満期保有目的の 債券	799	1,347	350	60	—	—
うち社債	799	1,347	350	60	—	—
その他有価証券 のうち満期があ るもの	83,901	220,553	313,254	225,906	146,469	—
うち国債	39,055	125,896	150,284	130,700	105,400	—
地方債	21,730	37,830	41,654	39,346	29,216	—
社債	22,699	56,493	120,068	55,860	11,853	—
その他	415	332	1,247	—	—	—
貸出金(※)	345,156	308,564	233,532	106,359	142,644	208,993
合計	467,478	530,465	547,136	332,325	289,113	208,993

(※) 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めないもの53,004百万円、期間の定めのないもの118,167百万円は含めておりません。

(注4) 有利子負債の連結決算日後の返済予定額

	1年以内 (百万円)	1年超3年以内 (百万円)	3年超5年以内 (百万円)	5年超7年以内 (百万円)	7年超10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
預金(※)	2,072,591	180,454	26,541	—	—	—
譲渡性預金	153,757	3,454	—	—	—	—
合計	2,226,348	183,909	26,541	—	—	—

(※) 預金のうち、当座預金等無利息の預金は含めておりません。
また、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

(有価証券関係)

※1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」を含めて記載しております。

※2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

I 前連結会計年度

1 売買目的有価証券(平成22年3月31日現在)

	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
売買目的有価証券	0

2 満期保有目的の債券(平成22年3月31日現在)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照 表計上額を超えるもの	社債	1,647	1,669	22
時価が連結貸借対照 表計上額を超えないもの	社債	1,271	1,262	△ 9
合計		2,918	2,931	12

3 その他有価証券(平成22年3月31日現在)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超えるもの	株式	50,246	36,674	13,572
	債券	873,273	855,453	17,820
	国債	402,736	396,657	6,078
	地方債	171,335	166,216	5,119
	社債	299,201	292,579	6,621
	その他	11,133	9,290	1,842
	小計	934,653	901,418	33,235
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超えないもの	株式	10,014	11,687	△ 1,673
	債券	80,035	80,471	△ 435
	国債	71,866	72,264	△ 398
	地方債	2,042	2,056	△ 14
	社債	6,126	6,150	△ 23
	その他	17,035	18,858	△ 1,823
	小計	107,085	111,017	△ 3,932
合計		1,041,738	1,012,435	29,302

(注) 上記には、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式(連結貸借対照表計上額及び取得原価391百万円)を含めておりません。

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	売却原価(百万円)	売却額(百万円)	売却損益(百万円)
社債	40	41	1

(売却の理由) 買入消却によるものであります。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	3,429	1,179	24
債券	49,330	1,097	—
国債	3,035	93	—
地方債	23,301	315	—
社債	22,994	688	—
その他	805	—	194
合計	53,566	2,276	218

6 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

7 減損処理を行った有価証券

その他有価証券で時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

当連結会計年度における減損処理額は、727百万円(全額が株式)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断し、減損処理する基準は以下のとおりであります。

- ① 連結決算日における当該有価証券の時価の取得原価に対する下落率が50%以上の銘柄については一律減損処理。
- ② 下落率が30%以上50%未満の銘柄については、過去1年間の時価水準を勘案したうえで、回復の可能性がない銘柄について減損処理。
- ③ 下落率が30%未満の銘柄については、発行者の財政状態等を勘案し、必要と認める場合に減損処理。

II 当連結会計年度

1 売買目的有価証券(平成23年3月31日現在)

	当連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
売買目的有価証券	△ 0

2 満期保有目的の債券(平成23年3月31日現在)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
時価が連結貸借対照 表計上額を超えるもの	社債	1,460	1,479	18
時価が連結貸借対照 表計上額を超えないもの	社債	1,093	1,081	△ 12
合計		2,554	2,560	6

3 その他有価証券(平成23年3月31日現在)

	種類	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え るもの	株式	29,669	20,970	8,699
	債券	903,187	884,647	18,539
	国債	470,910	464,052	6,858
	地方債	162,598	157,422	5,175
	社債	269,678	263,173	6,505
	その他	10,828	8,949	1,878
	小計	943,685	914,567	29,117
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	株式	20,261	23,574	△ 3,313
	債券	111,805	112,679	△ 874
	国債	93,627	94,313	△ 686
	地方債	12,057	12,172	△ 114
	社債	6,121	6,194	△ 73
	その他	13,056	15,063	△ 2,007
	小計	145,122	151,318	△ 6,195
合計		1,088,808	1,065,885	22,922

(注) 上記には、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場株式(連結貸借対照表計上額及び取得原価374百万円)を含めておりません。

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

	売却原価(百万円)	売却額(百万円)	売却損益(百万円)
社債	500	507	7

(売却の理由) 買入消却によるものであります。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	3,232	579	571
債券	81,740	1,262	81
国債	51,648	644	81
地方債	23,286	424	—
社債	6,805	193	—
その他	3,117	138	224
合計	88,090	1,980	878

6 保有目的を変更した有価証券

該当ありません。

7 減損処理を行った有価証券

有価証券(売買目的有価証券を除く。)で時価のあるもののうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

当連結会計年度における減損処理額は、3,249百万円(全額が株式)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断し、減損処理する基準は以下のとおりであります。

- ① 連結決算日における当該有価証券の時価の取得原価に対する下落率が50%以上の銘柄については一律減損処理。
- ② 下落率が30%以上50%未満の銘柄については、過去1年間の時価水準を勘案したうえで、回復の可能性がない銘柄について減損処理。
- ③ 下落率が30%未満の銘柄については、発行者の財政状態等を勘案し、必要と認める場合に減損処理。

(金銭の信託関係)

I 前連結会計年度
該当ありません。

II 当連結会計年度
該当ありません。

(その他有価証券評価差額金)

I 前連結会計年度

○その他有価証券評価差額金(平成22年3月31日現在)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額(百万円)
評価差額	29,302
その他有価証券	29,302
(△)繰延税金負債	11,212
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	18,090
(△)少数株主持分相当額	2
その他有価証券評価差額金	18,088

II 当連結会計年度

○その他有価証券評価差額金(平成23年3月31日現在)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

	金額(百万円)
評価差額	22,922
その他有価証券	22,922
(△)繰延税金負債	9,118
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	13,803
(△)少数株主持分相当額	5
その他有価証券評価差額金	13,798

(デリバティブ取引関係)

I 前連結会計年度

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(2) 通貨関連取引(平成22年3月31日現在)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年 超のもの(百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
店頭	通貨スワップ	—	—	—	—
	為替予約				
	売建	178	—	△ 5	△ 5
	買建	219	—	7	7
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	その他				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	合計	—	—	2	2

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定
割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(4) 債券関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(5) 商品関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(2) 通貨関連取引(平成22年3月31日現在)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	為替予約	外貨建の貸出金、 コールローン等	763	—	△ 24
	合計	—	—	—	△ 24

(注) 1 主として「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

(4) 債券関連取引(平成22年3月31日現在)

該当ありません。

II 当連結会計年度

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(2) 通貨関連取引(平成23年3月31日現在)

区分	種類	契約額等 (百万円)	契約額等のうち1年 超のもの(百万円)	時価 (百万円)	評価損益 (百万円)
金融商品 取引所	通貨先物				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
店頭	通貨スワップ	—	—	—	—
	為替予約				
	売建	750	—	△ 10	△ 10
	買建	825	—	△ 11	△ 11
	通貨オプション				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	その他				
	売建	—	—	—	—
	買建	—	—	—	—
	合計	—	—	△ 22	△ 22

(注) 1 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(4) 債券関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(5) 商品関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(6) クレジットデリバティブ取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価並びに当該時価の算定方法は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(2) 通貨関連取引(平成23年3月31日現在)

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	為替予約	外貨建の貸出金、 コールローン等	151	—	△ 1
	合計	—	—	—	△ 1

(注) 1 「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に基づき、繰延ヘッジによっております。

2 時価の算定

割引現在価値等により算定しております。

(3) 株式関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(4) 債券関連取引(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行は、確定給付型の制度として、企業年金基金及び退職一時金制度を設けております。
また、当行は退職給付信託を設定しております。

2 退職給付債務に関する事項

区分	前連結会計年度 (平成22年3月31日)	当連結会計年度 (平成23年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
退職給付債務 (A)	△ 22,143	△ 22,503
年金資産 (B)	12,871	13,292
未積立退職給付債務 (C) = (A) + (B)	△ 9,271	△ 9,211
未認識数理計算上の差異 (D)	4,161	3,397
未認識過去勤務債務 (E)	△ 385	△ 314
連結貸借対照表計上額純額 (F) = (C) + (D) + (E)	△ 5,494	△ 6,128
前払年金費用 (G)	1,660	1,338
退職給付引当金 (F) - (G)	△ 7,155	△ 7,467

3 退職給付費用に関する事項

区分	前連結会計年度 (自平成21年4月1日 至平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自平成22年4月1日 至平成23年3月31日)
	金額(百万円)	金額(百万円)
勤務費用 (A)	688	720
利息費用 (B)	423	442
期待運用収益 (C)	△ 178	△ 196
過去勤務債務の費用処理額 (D)	△ 71	△ 71
数理計算上の差異の費用処理額 (E)	776	700
退職給付費用 (F) = (A) + (B) + (C) + (D) + (E)	1,637	1,595

4 退職給付債務等の計算の基礎に関する事項

区分	前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
(1) 割引率	2.0%	同 左
(2) 期待運用収益率	2.0%	同 左
(3) 退職給付見込額の期間配 分方法	期間定額基準	同 左
(4) 過去勤務債務の額の処理 年数	10年(その発生時の従業員の平均残存 勤務期間内の一定の年数による定額法 による。)	同 左
(5) 数理計算上の差異の処理 年数	10年(各連結会計年度の発生時の従業 員の平均残存勤務期間内の一定の年数 による定額法により按分した額を、そ れぞれ発生の際連結会計年度から損益 処理することとしている。)	同 左

(ストック・オプション等関係)

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当ありません。

II 当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

(税効果会計関係)

前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>繰延税金資産</p> <p>貸倒引当金 10,956百万円</p> <p>有価証券償却 4,889百万円</p> <p>退職給付引当金 4,247百万円</p> <p>減価償却費 451百万円</p> <p>その他 3,371百万円</p> <p>繰延税金資産小計 23,916百万円</p> <p>評価性引当額 △ 11,579百万円</p> <p>繰延税金資産合計 12,337百万円</p> <p>繰延税金負債</p> <p>その他有価証券評価差額金 △ 11,212百万円</p> <p>その他 △ 1,568百万円</p> <p>繰延税金負債合計 △ 12,780百万円</p> <p>繰延税金負債の純額 △ 443百万円</p>	<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>繰延税金資産</p> <p>貸倒引当金 8,572百万円</p> <p>有価証券償却 5,132百万円</p> <p>退職給付引当金 4,516百万円</p> <p>減価償却費 1,273百万円</p> <p>その他 3,494百万円</p> <p>繰延税金資産小計 22,989百万円</p> <p>評価性引当額 △ 12,001百万円</p> <p>繰延税金資産合計 10,987百万円</p> <p>繰延税金負債</p> <p>その他有価証券評価差額金 △ 9,118百万円</p> <p>その他 △ 1,569百万円</p> <p>繰延税金負債合計 △ 10,687百万円</p> <p>繰延税金資産の純額 299百万円</p>
<p>2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <p>法定実効税率 40.2%</p> <p>(調整)</p> <p>評価性引当額 16.7%</p> <p>受取配当金等永久に益金に算入されない項目 △ 2.9%</p> <p>交際費等永久に損金に算入されない項目 0.5%</p> <p>連結子会社株式の償却に伴う連結上の調整 △ 8.5%</p> <p>その他 0.6%</p> <p>税効果会計適用後の法人税等の負担率 46.6%</p>	<p>2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <p>法定実効税率 40.2%</p> <p>(調整)</p> <p>評価性引当額 5.3%</p> <p>受取配当金等永久に益金に算入されない項目 △ 3.0%</p> <p>交際費等永久に損金に算入されない項目 0.5%</p> <p>連結子会社株式の償却に伴う連結上の調整 △ 2.7%</p> <p>その他 2.1%</p> <p>税効果会計適用後の法人税等の負担率 42.4%</p>

(資産除去債務関係)

当連結会計年度末(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(賃貸等不動産関係)

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当ありません。

II 当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

(セグメント情報等)

【事業の種類別セグメント情報】

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

	銀行業 (百万円)	リース業 (百万円)	その他の事業 (百万円)	計(百万円)	消去 又は全社 (百万円)	連結 (百万円)
I 経常収益						
(1) 外部顧客に対する 経常収益	50,763	5,840	819	57,423	—	57,423
(2) セグメント間の内部 経常収益	315	744	370	1,430	(1,430)	—
計	51,078	6,585	1,190	58,854	(1,430)	57,423
経常費用	44,626	6,157	1,106	51,889	(1,379)	50,509
経常利益	6,452	428	84	6,964	(51)	6,913
II 資産、減価償却費、減損 損失及び資本的支出						
資産	2,708,684	13,263	10,378	2,732,326	(23,128)	2,709,198
減価償却費	2,170	11	4	2,186	—	2,186
減損損失	27	—	—	27	—	27
資本的支出	4,940	61	1	5,003	—	5,003

(注) 1 一般企業の売上高及び営業利益に代えて、それぞれ経常収益及び経常利益を記載しております。

2 各事業の主な内容は次のとおりであります。

- (1) 銀行業・・・銀行業
- (2) リース業・・・リース業
- (3) その他の事業・・・クレジットカード業、ベンチャーキャピタル業、コンサルティング業

【所在地別セグメント情報】

本邦以外の国または地域に所在する連結子会社及び海外支店を有していないため、所在地別セグメント情報は記載しておりません。

【国際業務経常収益】

国際業務経常収益が連結経常収益の10%未満のため、国際業務経常収益は記載を省略しております。

【セグメント情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

当行グループは、報告セグメントが1つ(銀行業)であり、開示情報としての重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(追加情報)

当連結会計年度から「セグメント情報等の開示に関する会計基準」(企業会計基準第17号 平成21年3月27日)及び「セグメント情報等の開示に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第20号 平成20年3月21日)を適用しております。

【関連情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	26,498	14,860	13,154	54,514

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報**(1) 経常収益**

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

当行グループは、報告セグメントが1つ(銀行業)であり、開示情報としての重要性が乏しいため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

【関連当事者情報】

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等
該当ありません。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
該当ありません。

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係
会社の子会社等
該当ありません。

(エ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

種類	会社等の 名称 又は氏名	所在地	資本金又は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の被所有割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及びその近親者	古屋俊仁	—	—	当行監査役 顧問弁護士	0.00	資金の貸付 顧問契約の締結	資金の貸付 利息の受取 弁護士報酬	— 5 2	貸出金 — —	245 — —
役員及びその近親者	荻原ゆう子	—	—	当行取締役 の配偶者	—	資金の貸付	資金の貸付 利息の受取	— 0	貸出金 —	32 —

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

取引条件は、一般の取引先と同様に決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引
該当ありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当ありません。

II 当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等の場合に限る。)等
該当ありません。

(イ) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等
該当ありません。

(ウ) 連結財務諸表提出会社と同一の親会社を持つ会社等及び連結財務諸表提出会社のその他の関係
会社の子会社等
該当ありません。

(エ) 連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

種類	会社等の 名称 又は氏名	所在地	資本金又 は出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の被所有割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及 びその 近親者	古屋俊仁	—	—	当行監査役 顧問弁護士	0.00	資金の貸付 顧問契約の締結	資金の貸付 利息の受取 弁護士報酬	— 5 2	貸出金 — —	220 — —
役員及 びその 近親者	長坂真由美	—	—	当行取締役 の義姉	—	資金の貸付	資金の貸付 利息の受取	— 0	貸出金 —	48 —
役員及 びその 近親者	荻原ゆう子	—	—	当行取締役 の配偶者	—	資金の貸付	資金の貸付 利息の受取	— 0	貸出金 —	29 —

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

取引条件は、一般の取引先と同様に決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引
該当ありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当ありません。

(企業結合等関係)

I 前連結会計年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当ありません。

II 当連結会計年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

(1株当たり情報)

		前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
1株当たり純資産額	円	875.40	878.10
1株当たり当期純利益金額	円	18.85	22.23

(注) 1 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
当期純利益	百万円	3,475	4,056
普通株主に帰属しない金額	百万円	—	—
普通株式に係る当期純利益	百万円	3,475	4,056
普通株式の期中平均株式数	千株	184,285	182,431

- 2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前連結会計年度末 (平成22年3月31日)	当連結会計年度末 (平成23年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	161,976	159,424
純資産の部の合計額から 控除する金額	百万円	659	885
うち少数株主持分	百万円	659	885
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	161,317	158,539
1株当たり純資産額の算定に 用いられた期末の普通株式の数	千株	184,276	180,547

(重要な後発事象)

前連結会計年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
<p>(自己株式の取得)</p> <p>当行は、平成22年 5月26日開催の取締役会において、会社法第165条第3項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式を取得することを決議し、実施いたしました。</p> <p>1 決議内容</p> <p>(1) 理由 経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行及び株主の皆さまへの利益還元を図るため</p> <p>(2) 取得する株式の種類 普通株式</p> <p>(3) 取得する株式の総数 1,793,000株(上限)</p> <p>(4) 株式の取得価額の総額 638百万円(上限)</p> <p>(5) 株式の取得期間 平成22年 5月27日(1日間)</p> <p>2 取得結果</p> <p>(1) 取得した株式の種類 普通株式</p> <p>(2) 取得した株式の総数 1,793,000株</p> <p>(3) 取得価額 638百万円</p> <p>(4) 取得日 平成22年 5月27日</p> <p>(自己株式の消却)</p> <p>当行は、平成22年 5月26日開催の取締役会において、会社法第178条の規定に基づき、1株当たり株式価値の向上を図るため、自己株式の消却を行うことを決議し、実施いたしました。</p> <p>1 決議内容</p> <p>(1) 消却する株式の種類及び総数 普通株式 5,000,000株</p> <p>(2) 消却の時期 平成22年 6月 1日</p> <p>2 実施結果</p> <p>(1) 消却した株式の種類及び総数 普通株式 5,000,000株</p> <p>(2) 消却の時期 平成22年 6月 1日</p> <p>(3) 消却価額の総額 2,116百万円</p> <p>(4) 消却後の発行済株式総数 184,915,000株</p>	

⑤ 【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当ありません。

【借入金等明細表】

区分	前期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	47,528	26,191	0.13	—
再割引手形	—	—	—	—
借入金	47,528	26,191	0.13	平成23年4月～ 平成26年10月
リース債務	326	58	4.38	平成23年4月～ 平成25年9月

- (注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。
2 借入金及びリース債務の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	25,729	267	139	38	15
リース債務 (百万円)	53	3	1	—	—

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については、連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」及び「その他負債」中のリース債務の内訳を記載しております。

(参考) なお、営業活動として資金調達を行っている約束手形方式によるコマーシャル・ペーパーについては、前連結会計年度末、当連結会計年度末とも、残高はありません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度末及び直前連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当該各連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

① 当連結会計年度における四半期情報

	第1四半期 (自平成22年4月1日 至平成22年6月30日)	第2四半期 (自平成22年7月1日 至平成22年9月30日)	第3四半期 (自平成22年10月1日 至平成22年12月31日)	第4四半期 (自平成23年1月1日 至平成23年3月31日)
経常収益 (百万円)	14,840	13,320	13,441	12,912
税金等調整前四半期純利益金額又は税金等調整前四半期純損失金額(△) (百万円)	3,984	3,950	3,170	△ 3,668
四半期純利益金額又は四半期純損失金額(△) (百万円)	2,389	2,973	1,688	△ 2,994
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額(△) (円)	13.01	16.29	9.25	△ 16.52

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

② その他

該当ありません。

2 【財務諸表等】
 (1) 【財務諸表】
 ① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
資産の部		
現金預け金	84,469	65,197
現金	30,001	27,577
預け金	54,467	37,619
コールローン	53,153	13,234
買入金銭債権	8,027	8,732
商品有価証券	8	40
商品国債	8	40
有価証券	※1, ※8, ※12 1,048,515	※1, ※8, ※12 1,094,686
国債	474,603	564,537
地方債	173,378	174,655
社債	308,197	278,304
株式	64,050	53,196
その他の証券	28,286	23,992
貸出金	※2, ※3, ※4, ※5, ※9, ※13 1,503,191	※2, ※3, ※4, ※5, ※7, ※9, ※13 1,526,084
割引手形	※6 7,883	※6 7,543
手形貸付	63,561	62,368
証書貸付	1,300,025	1,332,914
当座貸越	131,721	123,257
外国為替	459	771
外国他店預け	417	753
買入外国為替	※6 14	※6 3
取立外国為替	28	14
その他資産	※8 7,169	※8 6,712
未決済為替貸	20	15
前払費用	90	137
前払年金費用	1,660	1,338
未収収益	2,930	2,892
金融派生商品	12	11
その他の資産	2,454	2,316
有形固定資産	※10, ※11 26,171	※10, ※11 25,384
建物	9,121	8,837
土地	13,420	13,363
リース資産	1,219	1,146
建設仮勘定	399	223
その他の有形固定資産	2,011	1,813
無形固定資産	6,137	8,164
ソフトウェア	—	6,627
ソフトウェア仮勘定	4,652	—
リース資産	933	1,009
その他の無形固定資産	550	528
支払承諾見返	8,316	7,222
貸倒引当金	△31,203	△19,682
資産の部合計	2,714,416	2,736,548

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
負債の部		
預金	※8 2,314,434	※8 2,349,338
当座預金	61,967	69,079
普通預金	1,134,370	1,159,344
貯蓄預金	23,636	22,538
通知預金	3,209	8,577
定期預金	1,064,860	1,064,764
定期積金	223	—
その他の預金	26,166	25,034
譲渡性預金	159,458	163,911
コールマネー	—	922
借入金	※8 46,800	※8 25,400
借入金	46,800	25,400
外国為替	92	84
売渡外国為替	75	61
未払外国為替	17	23
その他負債	15,016	22,796
未決済為替借	44	6
未払法人税等	1,779	838
未払費用	4,269	3,463
前受収益	635	589
金融派生商品	35	35
リース債務	2,233	2,136
その他の負債	6,017	15,726
役員賞与引当金	23	31
退職給付引当金	7,155	7,467
役員退職慰労引当金	452	531
睡眠預金払戻損失引当金	226	332
偶発損失引当金	300	246
繰延税金負債	1,186	287
支払承諾	8,316	7,222
負債の部合計	2,553,462	2,578,573

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
純資産の部		
資本金	15,400	15,400
資本剰余金	8,307	8,287
資本準備金	8,287	8,287
その他資本剰余金	19	—
利益剰余金	121,685	122,349
利益準備金	9,405	9,405
その他利益剰余金	112,280	112,943
固定資産圧縮積立金	101	101
別途積立金	107,801	107,801
繰越利益剰余金	4,377	5,041
自己株式	△2,507	△1,836
株主資本合計	142,884	144,200
その他有価証券評価差額金	18,068	13,774
繰延ヘッジ損益	△0	△0
評価・換算差額等合計	18,068	13,774
純資産の部合計	160,953	157,974
負債及び純資産の部合計	2,714,416	2,736,548

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
経常収益	50,830	48,511
資金運用収益	40,678	38,791
貸出金利息	28,095	25,794
有価証券利息配当金	12,364	12,815
コールローン利息	125	89
預け金利息	10	7
その他の受入利息	82	84
役務取引等収益	6,617	6,763
受入為替手数料	2,298	2,246
その他の役務収益	4,319	4,517
その他業務収益	1,227	1,495
外国為替売買益	120	137
商品有価証券売買益	7	4
国債等債券売却益	1,098	1,353
その他の業務収益	0	0
その他経常収益	2,306	1,461
株式等売却益	1,179	620
その他の経常収益	1,127	841
経常費用	44,967	41,131
資金調達費用	3,996	2,375
預金利息	3,388	1,963
譲渡性預金利息	381	258
コールマネー利息	55	0
借入金利息	10	23
その他の支払利息	160	129
役務取引等費用	2,137	2,172
支払為替手数料	714	723
その他の役務費用	1,423	1,449
その他業務費用	319	254
国債等債券売却損	317	254
国債等債券償却	2	—
営業経費	28,429	30,081
その他経常費用	10,085	6,247
貸倒引当金繰入額	6,457	1,258
貸出金償却	1	9
株式等売却損	24	623
株式等償却	2,164	3,755
債権売却損	213	143
退職給付費用	704	—
睡眠預金払戻損失引当金繰入額	—	160
偶発損失引当金繰入額	266	35
その他の経常費用	252	260
経常利益	5,863	7,380

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
特別利益	110	39
償却債権取立益	12	39
睡眠預金払戻損失引当金戻入益	82	—
収用補償金	15	—
特別損失	142	647
減損損失	27	307
固定資産処分損	114	230
資産除去債務会計基準の適用に伴う影響額	—	110
税引前当期純利益	5,831	6,772
法人税、住民税及び事業税	1,783	589
過年度法人税等	—	1,122
法人税等調整額	1,302	1,199
法人税等合計	3,086	2,911
当期純利益	2,744	3,861

③【株主資本等変動計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
株主資本		
資本金		
前期末残高	15,400	15,400
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	15,400	15,400
資本剰余金		
資本準備金		
前期末残高	8,287	8,287
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	8,287	8,287
その他資本剰余金		
前期末残高	19	19
当期変動額		
自己株式の消却	—	△2,116
自己株式の処分	0	△0
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	2,097
当期変動額合計	0	△19
当期末残高	19	—
資本剰余金合計		
前期末残高	8,307	8,307
当期変動額		
自己株式の消却	—	△2,116
自己株式の処分	0	△0
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	2,097
当期変動額合計	0	△19
当期末残高	8,307	8,287
利益剰余金		
利益準備金		
前期末残高	9,405	9,405
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	9,405	9,405
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金		
前期末残高	101	101
当期変動額		
当期変動額合計	—	—
当期末残高	101	101
別途積立金		
前期末残高	102,801	107,801
当期変動額		
別途積立金の積立	5,000	—
当期変動額合計	5,000	—
当期末残高	107,801	107,801

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
繰越利益剰余金		
前期末残高	7,738	4,377
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	△2,097
別途積立金の積立	△5,000	—
当期純利益	2,744	3,861
当期変動額合計	△3,360	663
当期末残高	4,377	5,041
利益剰余金合計		
前期末残高	120,046	121,685
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
別途積立金の積立	—	—
利益剰余金から資本剰余金への振替	—	△2,097
当期純利益	2,744	3,861
当期変動額合計	1,639	663
当期末残高	121,685	122,349
自己株式		
前期末残高	△2,497	△2,507
当期変動額		
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の消却	—	2,116
自己株式の処分	1	1
当期変動額合計	△10	671
当期末残高	△2,507	△1,836
株主資本合計		
前期末残高	141,256	142,884
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
当期純利益	2,744	3,861
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の処分	1	1
当期変動額合計	1,628	1,315
当期末残高	142,884	144,200

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成21年 4 月 1 日 至 平成22年 3 月 31 日)	当事業年度 (自 平成22年 4 月 1 日 至 平成23年 3 月 31 日)
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金		
前期末残高	5,396	18,068
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,672	△4,294
当期変動額合計	12,672	△4,294
当期末残高	18,068	13,774
繰延ヘッジ損益		
前期末残高	△0	△0
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	0	0
当期変動額合計	0	0
当期末残高	△0	△0
評価・換算差額等合計		
前期末残高	5,396	18,068
当期変動額		
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,672	△4,294
当期変動額合計	12,672	△4,294
当期末残高	18,068	13,774
純資産合計		
前期末残高	146,652	160,953
当期変動額		
剰余金の配当	△1,105	△1,100
当期純利益	2,744	3,861
自己株式の取得	△12	△1,447
自己株式の処分	1	1
株主資本以外の項目の当期変動額 (純額)	12,672	△4,294
当期変動額合計	14,301	△2,978
当期末残高	160,953	157,974

【重要な会計方針】

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)
1 商品有価証券の評価基準及び評価方法	商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。	同 左
2 有価証券の評価基準及び評価方法	有価証券の評価は、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、子会社株式については移動平均法による原価法、その他有価証券については決算日の市場価格等に基づく時価法(売却原価は移動平均法により算定)により行っております。ただし、その他有価証券のうち時価を把握することが極めて困難と認められるものについては移動平均法による原価法により行っております。 なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。	同 左
3 デリバティブ取引の評価基準及び評価方法	デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。	同 左
4 固定資産の減価償却の方法	(1) 有形固定資産(リース資産を除く。) 有形固定資産は、主として定率法(ただし、平成10年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。))については定額法)を採用しております。 なお、主な耐用年数は次のとおりであります。 建物 3年～50年 その他の有形固定資産 2年～20年	(1) 有形固定資産(リース資産を除く。) 同 左
	(2) 無形固定資産(リース資産を除く。) 無形固定資産は、定額法を採用しております。	(2) 無形固定資産(リース資産を除く。) 無形固定資産は、定額法を採用しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、行内における利用可能期間(5年)に基づいて償却しております。
	(3) リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法によっております。 なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のものは零としております。	(3) リース資産 同 左
5 外貨建資産及び負債の本邦通貨への換算基準	外貨建資産・負債は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。	同 左

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
6 引当金の計上基準	<p>(1) 貸倒引当金</p> <p>貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。</p> <p>破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(破綻先)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(実質破綻先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。</p> <p>また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(破綻懸念先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。</p> <p>上記以外の債権(正常先債権・要注意先債権)については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。</p> <p>すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。</p>	<p>(1) 貸倒引当金</p> <p>貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。</p> <p>破産、特別清算等、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(破綻先)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(実質破綻先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。</p> <p>また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(破綻懸念先)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を計上しております。</p> <p>貸出条件緩和債権(注記事項(貸借対照表関係)4. 参照)等を有する債務者及びその関連先に係る債権のうち、債権の元本の回収及び利息の受取りに係るキャッシュ・フローを合理的に見積もることができる債権については、当該キャッシュ・フローを当初の約定利率で割引いた金額と債権の帳簿価額との差額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー見積法)により引き当てております。</p> <p>上記以外の債権(正常先債権及び要注意先債権のうちキャッシュ・フロー見積法を適用した債権を除いた債権)については、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき計上しております。</p> <p>すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。</p>
	<p>(2) 役員賞与引当金</p> <p>役員賞与引当金は、役員への賞与の支払いに備えるため、役員に対する賞与の支給見込額のうち、当事業年度に帰属する額を計上しております。</p>	<p>(2) 役員賞与引当金</p> <p style="text-align: center;">同 左</p>

	前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月 31日)	当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月 31日)
	<p>(3) 退職給付引当金</p> <p>退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。</p> <p>また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は、以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理</p> <p>数理計算上の差異：各発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理(会計方針の変更)</p> <p>当事業年度末から「『退職給付に係る会計基準』の一部改正(その3)」(企業会計基準第19号 平成20年7月31日)を適用しております。</p> <p>なお、従来の方法による割引率と同一の割引率を使用することとなったため、当事業年度の財務諸表に与える影響はありません。</p>	<p>(3) 退職給付引当金</p> <p>退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。</p> <p>また、過去勤務債務及び数理計算上の差異の費用処理方法は、以下のとおりであります。</p> <p>過去勤務債務：その発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理</p> <p>数理計算上の差異：各発生年度の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生翌事業年度から損益処理</p>
	<p>(4) 役員退職慰労引当金</p> <p>役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員退職慰労金内規に基づく期末現在の要支給額を計上しております。</p>	<p>(4) 役員退職慰労引当金</p> <p>同 左</p>
	<p>(5) 睡眠預金払戻損失引当金</p> <p>睡眠預金払戻損失引当金は、負債計上を中止した預金について、預金者からの払戻請求に備えるため、将来の払戻請求に応じて発生する損失を見積り、必要と認める額を計上しております。</p>	<p>(5) 睡眠預金払戻損失引当金</p> <p>同 左</p>
	<p>(6) 偶発損失引当金</p> <p>偶発損失引当金は、偶発的に発生する損失に備えるため、将来発生する損失を見積り、必要と認める額を計上しております。</p>	<p>(6) 偶発損失引当金</p> <p>同 左</p>
7 リース取引の処理方法	<p>所有権移転外ファイナンス・リース取引のうち、リース取引開始日が平成20年4月1日前に開始する事業年度に属するものについては、通常の賃貸借取引に準じた会計処理によっております。</p>	<p>同 左</p>

	前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
8 ヘッジ会計の方法	<p>外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号)に規定する繰延ヘッジによっております。</p> <p>繰延ヘッジの採用にあたっては、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う為替スワップ取引等をヘッジ手段として指定し、当該ヘッジ手段の残存期間を通じて、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認しております。</p>	同 左
9 消費税等の会計処理	<p>消費税及び地方消費税(以下、「消費税等」という。)の会計処理は、税抜方式によっております。</p> <p>ただし、有形固定資産に係る控除対象外消費税等は当事業年度の費用に計上しております。</p>	同 左

【会計方針の変更】

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
<p>(金融商品に関する会計基準)</p> <p>当事業年度末から「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 平成20年3月10日)を適用しております。</p> <p>これによる財務諸表への影響は軽微であります。</p>	<p>—————</p>
<p>—————</p>	<p>(資産除去債務に関する会計基準)</p> <p>当事業年度から「資産除去債務に関する会計基準」(企業会計基準第18号 平成20年3月31日)及び「資産除去債務に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第21号 平成20年3月31日)を適用しております。</p> <p>これにより、経常利益は5百万円、税引前当期純利益は116百万円それぞれ減少しております。</p>

【注記事項】

(貸借対照表関係)

前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
<p>※1 関係会社の株式及び出資金総額 3,687百万円</p> <p>※2 貸出金のうち、破綻先債権額は13,398百万円、延滞債権額は48,559百万円であります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は150百万円であります。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は1,253百万円であります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は63,362百万円であります。</p> <p>なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は7,897百万円であります。</p>	<p>※1 関係会社の株式及び出資金総額 3,160百万円</p> <p>※2 貸出金のうち、破綻先債権額は4,235百万円、延滞債権額は47,048百万円であります。</p> <p>なお、破綻先債権とは、元本又は利息の支払の遅延が相当期間継続していることその他の事由により元本又は利息の取立て又は弁済の見込みがないものとして未収利息を計上しなかった貸出金(貸倒償却を行った部分を除く。以下「未収利息不計上貸出金」という。)のうち、法人税法施行令(昭和40年政令第97号)第96条第1項第3号のイからホまでに掲げる事由又は同項第4号に規定する事由が生じている貸出金であります。</p> <p>また、延滞債権とは、未収利息不計上貸出金であって、破綻先債権及び債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として利息の支払を猶予した貸出金以外の貸出金であります。</p> <p>※3 貸出金のうち、3カ月以上延滞債権額は該当ありません。</p> <p>なお、3カ月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日から3月以上遅延している貸出金で破綻先債権及び延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※4 貸出金のうち、貸出条件緩和債権額は2,379百万円であります。</p> <p>なお、貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破綻先債権、延滞債権及び3カ月以上延滞債権に該当しないものであります。</p> <p>※5 破綻先債権額、延滞債権額、3カ月以上延滞債権額及び貸出条件緩和債権額の合計額は53,663百万円であります。</p> <p>なお、上記2から5に掲げた債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。</p> <p>※6 手形割引は、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第24号)に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は7,546百万円であります。</p> <p>※7 ローン・パーティシペーションで、平成7年6月1日付日本公認会計士協会会計制度委員会報告第3号に基づいて、原債務者に対する貸出金として会計処理した参加元本金額のうち、貸借対照表計上額は、1,480百万円であります。</p>

前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)																
<p>※8 担保に供している資産は次のとおりであります。 担保に供している資産</p> <table data-bbox="239 280 766 436"> <tr> <td>有価証券</td> <td>149,873百万円</td> </tr> <tr> <td>担保資産に対応する債務</td> <td></td> </tr> <tr> <td>預金</td> <td>14,020百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>46,800百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、有価証券66,886百万円を差し入れております。 また、その他の資産のうち保証金は302百万円あります。</p> <p>※9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は299,139百万円であります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが284,033百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※10 有形固定資産の減価償却累計額 32,083百万円</p> <p>※11 有形固定資産の圧縮記帳額 1,062百万円 (当事業年度圧縮記帳額 一百万円)</p> <p>※12 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当行の保証債務の額は2,920百万円あります。</p> <p>※13 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額 278百万円</p>	有価証券	149,873百万円	担保資産に対応する債務		預金	14,020百万円	借入金	46,800百万円	<p>※8 担保に供している資産は次のとおりであります。 担保に供している資産</p> <table data-bbox="869 280 1396 436"> <tr> <td>有価証券</td> <td>163,879百万円</td> </tr> <tr> <td>担保資産に対応する債務</td> <td></td> </tr> <tr> <td>預金</td> <td>10,223百万円</td> </tr> <tr> <td>借入金</td> <td>25,400百万円</td> </tr> </table> <p>上記のほか、為替決済等の取引の担保等として、有価証券66,757百万円を差し入れております。 また、その他の資産のうち保証金は271百万円あります。</p> <p>※9 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は309,227百万円あります。このうち原契約期間が1年以内のもの又は任意の時期に無条件で取消可能なものが293,907百万円あります。</p> <p>なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。</p> <p>※10 有形固定資産の減価償却累計額 32,273百万円</p> <p>※11 有形固定資産の圧縮記帳額 1,062百万円 (当事業年度圧縮記帳額 一百万円)</p> <p>※12 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する当行の保証債務の額は2,556百万円あります。</p> <p>※13 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債権総額 251百万円</p>	有価証券	163,879百万円	担保資産に対応する債務		預金	10,223百万円	借入金	25,400百万円
有価証券	149,873百万円																
担保資産に対応する債務																	
預金	14,020百万円																
借入金	46,800百万円																
有価証券	163,879百万円																
担保資産に対応する債務																	
預金	10,223百万円																
借入金	25,400百万円																

前事業年度 (平成22年3月31日)	当事業年度 (平成23年3月31日)
<p>14 銀行法第18条の定めにより剰余金の配当に制限を受けております。</p> <p>剰余金の配当をする場合には、会社法第445条第4項(資本金の額及び準備金の額)の規定にかかわらず、当該剰余金の配当により減少する剰余金の額に5分の1を乗じて得た額を資本準備金又は利益準備金として計上することとされております。</p> <p>ただし、銀行法施行規則第17条の7の3の規定により、剰余金の配当をする日における資本準備金、利益準備金の総額が当該日における資本金の額以上であるため、当事業年度における当該剰余金の配当に係る利益準備金は計上しておりません。</p>	同 左

(損益計算書関係)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
—	—

(株主資本等変動計算書関係)

I 前事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前事業年度末 株式数 (千株)	当事業年度 増加株式数 (千株)	当事業年度 減少株式数 (千株)	当事業年度末 株式数 (千株)	摘要
自己株式					
普通株式	5,615	26	3	5,638	(注)

(注) 当事業年度中の変動事由は、単元未満株式の買取請求による増加及び買増請求による減少であります。

II 当事業年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

自己株式の種類及び株式数に関する事項

	前事業年度末 株式数 (千株)	当事業年度 増加株式数 (千株)	当事業年度 減少株式数 (千株)	当事業年度末 株式数 (千株)	摘要
自己株式					
普通株式	5,638	3,733	5,004	4,367	(注)1、2

(注) 1 当事業年度中の増加株式数の内訳は以下のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の取得による増加 3,699千株
単元未満株式の買取請求による増加 34千株

2 当事業年度中の減少株式数の内訳は以下のとおりであります。

取締役会決議による自己株式の消却による減少 5,000千株
単元未満株式の買増請求による減少 4千株

(リース取引関係)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
ファイナンス・リース取引 1 所有権移転外ファイナンス・リース取引 (1) リース資産の内容 ① 有形固定資産 主として事務機器等であります。 ② 無形固定資産 ソフトウェアであります。 (2) リース資産の減価償却の方法 重要な会計方針「4 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。 2 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 ・リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額 取得価額相当額 有形固定資産 725百万円 無形固定資産 188百万円 合計 <u>914百万円</u> 減価償却累計額相当額 有形固定資産 421百万円 無形固定資産 107百万円 合計 <u>529百万円</u> 期末残高相当額 有形固定資産 304百万円 無形固定資産 80百万円 合計 <u>384百万円</u> ・未経過リース料期末残高相当額 1年内 170百万円 1年超 240百万円 合計 <u>410百万円</u> ・当期の支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額 支払リース料 236百万円 減価償却費相当額 207百万円 支払利息相当額 27百万円 ・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 ・利息相当額の算定方法 リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。 (減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありませんので、項目等の記載は省略しております。	ファイナンス・リース取引 1 所有権移転外ファイナンス・リース取引 (1) リース資産の内容 ① 有形固定資産 同 左 ② 無形固定資産 同 左 (2) リース資産の減価償却の方法 同 左 2 通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っている所有権移転外ファイナンス・リース取引 ・リース物件の取得価額相当額、減価償却累計額相当額及び期末残高相当額 取得価額相当額 有形固定資産 629百万円 無形固定資産 150百万円 合計 <u>779百万円</u> 減価償却累計額相当額 有形固定資産 457百万円 無形固定資産 101百万円 合計 <u>559百万円</u> 期末残高相当額 有形固定資産 171百万円 無形固定資産 48百万円 合計 <u>220百万円</u> ・未経過リース料期末残高相当額 1年内 153百万円 1年超 86百万円 合計 <u>240百万円</u> ・当期の支払リース料、減価償却費相当額及び支払利息相当額 支払リース料 187百万円 減価償却費相当額 164百万円 支払利息相当額 17百万円 ・減価償却費相当額の算定方法 リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法によっております。 ・利息相当額の算定方法 リース料総額とリース物件の取得価額相当額との差額を利息相当額とし、各期への配分方法については、利息法によっております。 (減損損失について) リース資産に配分された減損損失はありませんので、項目等の記載は省略しております。

(有価証券関係)

I 前事業年度(平成22年3月31日現在)

子会社株式及び関連会社株式

該当ありません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は、子会社株式3,687百万円であります。

II 当事業年度(平成23年3月31日現在)

子会社株式及び関連会社株式

該当ありません。

なお、時価を把握することが極めて困難と認められる非上場の子会社株式及び関連会社株式の貸借対照表計上額は、子会社株式3,160百万円であります。

(税効果会計関係)

前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)																																																
<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>繰延税金資産</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">貸倒引当金</td> <td style="text-align: right;">8,761百万円</td> </tr> <tr> <td>有価証券償却</td> <td style="text-align: right;">5,252百万円</td> </tr> <tr> <td>退職給付引当金</td> <td style="text-align: right;">4,247百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費</td> <td style="text-align: right;">446百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">2,593百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産小計</td> <td style="text-align: right;">21,300百万円</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">△ 9,721百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産合計</td> <td style="text-align: right;">11,579百万円</td> </tr> <p>繰延税金負債</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">その他有価証券評価差額金</td> <td style="text-align: right;">△ 11,197百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">△ 1,568百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債合計</td> <td style="text-align: right;">△ 12,765百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債の純額</td> <td style="text-align: right;">△ 1,186百万円</td> </tr> </table> </table>	貸倒引当金	8,761百万円	有価証券償却	5,252百万円	退職給付引当金	4,247百万円	減価償却費	446百万円	その他	2,593百万円	繰延税金資産小計	21,300百万円	評価性引当額	△ 9,721百万円	繰延税金資産合計	11,579百万円	その他有価証券評価差額金	△ 11,197百万円	その他	△ 1,568百万円	繰延税金負債合計	△ 12,765百万円	繰延税金負債の純額	△ 1,186百万円	<p>1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳</p> <p>繰延税金資産</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">貸倒引当金</td> <td style="text-align: right;">6,321百万円</td> </tr> <tr> <td>有価証券償却</td> <td style="text-align: right;">5,058百万円</td> </tr> <tr> <td>退職給付引当金</td> <td style="text-align: right;">4,516百万円</td> </tr> <tr> <td>減価償却費</td> <td style="text-align: right;">1,227百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">3,230百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産小計</td> <td style="text-align: right;">20,354百万円</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">△ 9,975百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金資産合計</td> <td style="text-align: right;">10,379百万円</td> </tr> <p>繰延税金負債</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">その他有価証券評価差額金</td> <td style="text-align: right;">△ 9,098百万円</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">△ 1,568百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債合計</td> <td style="text-align: right;">△ 10,666百万円</td> </tr> <tr> <td>繰延税金負債の純額</td> <td style="text-align: right;">△ 287百万円</td> </tr> </table> </table>	貸倒引当金	6,321百万円	有価証券償却	5,058百万円	退職給付引当金	4,516百万円	減価償却費	1,227百万円	その他	3,230百万円	繰延税金資産小計	20,354百万円	評価性引当額	△ 9,975百万円	繰延税金資産合計	10,379百万円	その他有価証券評価差額金	△ 9,098百万円	その他	△ 1,568百万円	繰延税金負債合計	△ 10,666百万円	繰延税金負債の純額	△ 287百万円
貸倒引当金	8,761百万円																																																
有価証券償却	5,252百万円																																																
退職給付引当金	4,247百万円																																																
減価償却費	446百万円																																																
その他	2,593百万円																																																
繰延税金資産小計	21,300百万円																																																
評価性引当額	△ 9,721百万円																																																
繰延税金資産合計	11,579百万円																																																
その他有価証券評価差額金	△ 11,197百万円																																																
その他	△ 1,568百万円																																																
繰延税金負債合計	△ 12,765百万円																																																
繰延税金負債の純額	△ 1,186百万円																																																
貸倒引当金	6,321百万円																																																
有価証券償却	5,058百万円																																																
退職給付引当金	4,516百万円																																																
減価償却費	1,227百万円																																																
その他	3,230百万円																																																
繰延税金資産小計	20,354百万円																																																
評価性引当額	△ 9,975百万円																																																
繰延税金資産合計	10,379百万円																																																
その他有価証券評価差額金	△ 9,098百万円																																																
その他	△ 1,568百万円																																																
繰延税金負債合計	△ 10,666百万円																																																
繰延税金負債の純額	△ 287百万円																																																
<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">法定実効税率 (調整)</td> <td style="text-align: right;">40.2%</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">15.0%</td> </tr> <tr> <td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">△ 3.4%</td> </tr> <tr> <td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">0.6%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">0.5%</td> </tr> <tr> <td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td> <td style="text-align: right;">52.9%</td> </tr> </table>	法定実効税率 (調整)	40.2%	評価性引当額	15.0%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△ 3.4%	交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6%	その他	0.5%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	52.9%	<p>2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 80%;">法定実効税率 (調整)</td> <td style="text-align: right;">40.2%</td> </tr> <tr> <td>評価性引当額</td> <td style="text-align: right;">3.7%</td> </tr> <tr> <td>受取配当金等永久に益金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">△ 3.3%</td> </tr> <tr> <td>交際費等永久に損金に算入されない項目</td> <td style="text-align: right;">0.6%</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td style="text-align: right;">1.7%</td> </tr> <tr> <td>税効果会計適用後の法人税等の負担率</td> <td style="text-align: right;">42.9%</td> </tr> </table>	法定実効税率 (調整)	40.2%	評価性引当額	3.7%	受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△ 3.3%	交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6%	その他	1.7%	税効果会計適用後の法人税等の負担率	42.9%																								
法定実効税率 (調整)	40.2%																																																
評価性引当額	15.0%																																																
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△ 3.4%																																																
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6%																																																
その他	0.5%																																																
税効果会計適用後の法人税等の負担率	52.9%																																																
法定実効税率 (調整)	40.2%																																																
評価性引当額	3.7%																																																
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△ 3.3%																																																
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.6%																																																
その他	1.7%																																																
税効果会計適用後の法人税等の負担率	42.9%																																																

(企業結合等関係)

I 前事業年度(自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)

該当ありません。

II 当事業年度(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)

該当ありません。

(資産除去債務関係)

当事業年度末(平成23年3月31日現在)

該当ありません。

(1株当たり情報)

		前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
1株当たり純資産額	円	873.43	874.97
1株当たり当期純利益金額	円	14.89	21.16

(注) 1 1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前事業年度 (自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日)	当事業年度 (自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)
当期純利益	百万円	2,744	3,861
普通株主に帰属しない金額	百万円	—	—
普通株式に係る当期純利益	百万円	2,744	3,861
普通株式の期中平均株式数	千株	184,285	182,431

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

3 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前事業年度末 (平成22年3月31日)	当事業年度末 (平成23年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	160,953	157,974
純資産の部の合計額から 控除する金額	百万円	—	—
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	160,953	157,974
1株当たり純資産額の算定に 用いられた期末の普通株式の数	千株	184,276	180,547

(重要な後発事象)

<p style="text-align: center;">前事業年度 (自 平成21年 4月 1日 至 平成22年 3月31日)</p>	<p style="text-align: center;">当事業年度 (自 平成22年 4月 1日 至 平成23年 3月31日)</p>
<p>(自己株式の取得)</p> <p>当行は、平成22年 5月26日開催の取締役会において、会社法第165条第 3 項の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、自己株式を取得することを決議し、実施いたしました。</p> <p>1 決議内容</p> <p>(1) 理由 経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行及び株主の皆さまへの利益還元を図るため</p> <p>(2) 取得する株式の種類 普通株式</p> <p>(3) 取得する株式の総数 1,793,000株(上限)</p> <p>(4) 株式の取得価額の総額 638百万円(上限)</p> <p>(5) 株式の取得期間 平成22年 5月27日(1日間)</p> <p>2 取得結果</p> <p>(1) 取得した株式の種類 普通株式</p> <p>(2) 取得した株式の総数 1,793,000株</p> <p>(3) 取得価額 638百万円</p> <p>(4) 取得日 平成22年 5月27日</p> <p>(自己株式の消却)</p> <p>当行は、平成22年 5月26日開催の取締役会において、会社法第178条の規定に基づき、1株当たり株式価値の向上を図るため、自己株式の消却を行うことを決議し、実施いたしました。</p> <p>1 決議内容</p> <p>(1) 消却する株式の種類及び総数 普通株式 5,000,000株</p> <p>(2) 消却の時期 平成22年 6月 1日</p> <p>2 実施結果</p> <p>(1) 消却した株式の種類及び総数 普通株式 5,000,000株</p> <p>(2) 消却の時期 平成22年 6月 1日</p> <p>(3) 消却価額の総額 2,116百万円</p> <p>(4) 消却後の発行済株式総数 184,915,000株</p>	<p style="text-align: center;">—————</p>

④ 【附属明細表】

当事業年度（平成22年4月1日から平成23年3月31日まで）

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	前期末残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差引 当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	30,995	446	366 (51)	31,076	22,238	642	8,837
土地	13,420	174	231 (231)	13,363	—	—	13,363
リース資産	1,817	474	400	1,892	745	493	1,146
建設仮勘定	399	497	673	223	—	—	223
その他の有形固定資産	11,621	548	1,067 (3)	11,103	9,289	567	1,813
有形固定資産計	58,254	2,141	2,738 (286)	57,658	32,273	1,703	25,384
無形固定資産							
ソフトウェア	—	6,971	—	6,971	344	344	6,627
ソフトウェア仮勘定	4,652	2,319	6,971	—	—	—	—
リース資産	1,001	186	31	1,156	146	110	1,009
その他の無形固定資産	621	0	24 (20)	598	70	2	528
無形固定資産計	6,275	9,478	7,027 (20)	8,726	561	457	8,164

(注) 当期減少額欄における()内は、減損損失の計上額(内書き)であります。

【引当金明細表】

区分	前期末残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	31,203	19,682	12,779	18,423	19,682
一般貸倒引当金	5,820	5,068	—	5,820	5,068
個別貸倒引当金	25,382	14,613	12,779	12,602	14,613
役員賞与引当金	23	31	23	—	31
役員退職慰労引当金	452	79	—	—	531
睡眠預金払戻損失 引当金	226	332	54	172	332
偶発損失引当金	300	246	88	211	246
計	32,205	20,372	12,946	18,807	20,824

(注) 当期減少額(その他)欄に記載の減少額は、それぞれ次の理由によるものであります。

- 一般貸倒引当金・・・洗替による取崩額
- 個別貸倒引当金・・・洗替による取崩額
- 睡眠預金払戻損失引当金・・・洗替による取崩額
- 偶発損失引当金・・・洗替による取崩額

○未払法人税等

区分	前期末残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	1,779	798	1,740	—	838
未払法人税等	1,375	643	1,366	—	652
未払事業税	404	155	373	—	185

(2) 【主な資産及び負債の内容】

当事業年度末(平成23年3月31日現在)の主な資産及び負債の内容は、次のとおりであります。

① 資産の部

預け金 日本銀行への預け金37,451百万円その他であります。
 その他の証券 投資信託21,880百万円その他であります。
 未収収益 有価証券利息1,593百万円、貸出金利息1,023百万円その他であります。
 その他の資産 預金保険機構金融安定化拠出基金への拠出金811百万円、社団法人新金融安定化基金への拠出金670百万円、仮払金370百万円(提携ATM利用立替金、訴訟関係保証金等)その他であります。

② 負債の部

その他の預金 別段預金19,237百万円その他であります。
 未払費用 営業経費1,764百万円、預金利息1,445百万円その他であります。
 前受収益 貸出金利息536百万円その他であります。
 その他の負債 仮受金10,200百万円(口座振替決済資金等)、ファクタリング未払金4,647百万円その他であります。

(3) 【その他】

該当ありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日
1単元の株式数	1,000株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	—
買取・買増手数料	当行所定の算式により1単元当たりの合計金額を算定し、これを買取りまたは買増しした単元未満株式の数で按分した金額に消費税等を加えた金額とする。
公告掲載方法	山梨日日新聞および日本経済新聞
株主に対する特典	ありません

(注) 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款で定めております。

- ・会社法第189条第2項各号に掲げる権利
- ・会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
- ・株主の有する株式数に応じて募集株式の割当ておよび募集新株予約権の割当てを受ける権利
- ・株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度(第107期)	自 平成21年4月1日 至 平成22年3月31日	平成22年6月29日	関東財務局長に提出
-------------	-----------------------------	------------	-----------

(2) 内部統制報告書及びその添付書類		平成22年6月29日	関東財務局長に提出
---------------------	--	------------	-----------

(3) 四半期報告書及び確認書

第108期第1四半期	自 平成22年4月1日 至 平成22年6月30日	平成22年8月10日	関東財務局長に提出
------------	-----------------------------	------------	-----------

第108期第2四半期	自 平成22年7月1日 至 平成22年9月30日	平成22年11月24日	関東財務局長に提出
------------	-----------------------------	-------------	-----------

第108期第3四半期	自 平成22年10月1日 至 平成22年12月31日	平成23年2月9日	関東財務局長に提出
------------	-------------------------------	-----------	-----------

(4) 臨時報告書

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2(株主総会における議決権行使の結果)の規定に基づく臨時報告書		平成22年7月1日	関東財務局長に提出
--	--	-----------	-----------

(5) 自己株券買付状況報告書

	平成22年12月3日	関東財務局長に提出
--	------------	-----------

	平成23年1月5日	関東財務局長に提出
--	-----------	-----------

	平成23年2月9日	関東財務局長に提出
--	-----------	-----------

	平成23年3月10日	関東財務局長に提出
--	------------	-----------

	平成23年4月6日	関東財務局長に提出
--	-----------	-----------

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成22年6月17日

株式会社 山梨中央銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野 中 俊 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 園 生 裕 之 ㊞

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社山梨中央銀行の平成21年4月1日から平成22年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表について監査を行った。この連結財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社山梨中央銀行及び連結子会社の平成22年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社山梨中央銀行の平成22年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。財務報告に係る内部統制を整備及び運用並びに内部統制報告書を作成する責任は、経営者にあり、当監査法人の責任は、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。また、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。内部統制監査は、試査を基礎として行われ、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果についての、経営者が行った記載を含め全体としての内部統制報告書の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、内部統制監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、株式会社山梨中央銀行が平成22年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成23年6月29日

株式会社 山梨中央銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 園 生 裕 之 ㊞

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴 木 順 二 ㊞

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社山梨中央銀行の平成22年4月1日から平成23年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書及び連結附属明細表について監査を行った。この連結財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社山梨中央銀行及び連結子会社の平成23年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<内部統制監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社山梨中央銀行の平成23年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。財務報告に係る内部統制を整備及び運用並びに内部統制報告書を作成する責任は、経営者にあり、当監査法人の責任は、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。また、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。内部統制監査は、試査を基礎として行われ、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果についての、経営者が行った記載を含め全体としての内部統制報告書の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、内部統制監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、株式会社山梨中央銀行が平成23年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 連結財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成22年6月17日

株式会社 山梨中央銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 野 中 俊 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 園 生 裕 之 ⑩

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社山梨中央銀行の平成21年4月1日から平成22年3月31日までの第107期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び附属明細表について監査を行った。この財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社山梨中央銀行の平成22年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成23年6月29日

株式会社 山梨中央銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 園 生 裕 之 ⑩

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 鈴 木 順 二 ⑩

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社山梨中央銀行の平成22年4月1日から平成23年3月31日までの第108期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書及び附属明細表について監査を行った。この財務諸表の作成責任は経営者にあり、当監査法人の責任は独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽の表示がないかどうかの合理的な保証を得ることを求めている。監査は、試査を基礎として行われ、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することを含んでいる。当監査法人は、監査の結果として意見表明のための合理的な基礎を得たと判断している。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社山梨中央銀行の平成23年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

-
- (注) 1 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当行(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
2 財務諸表の範囲にはXBRLデータ自体は含まれていません。

【表紙】

【提出書類】 内部統制報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の4第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成23年6月29日

【会社名】 株式会社 山梨中央銀行

【英訳名】 The Yamanashi Chuo Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役頭取 進 藤 中

【最高財務責任者の役職氏名】 ー

【本店の所在の場所】 山梨県甲府市丸の内一丁目20番8号

【縦覧に供する場所】 株式会社 山梨中央銀行東京支店
(東京都千代田区鍛冶町一丁目6番10号)

株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【財務報告に係る内部統制の基本的枠組みに関する事項】

当行代表取締役頭取進藤中は、金融商品取引法に基づく、当行の財務報告に係る内部統制の整備及び運用に責任を有しております。

当行は、企業会計審議会の公表した「財務報告に係る内部統制の評価及び監査の基準並びに財務報告に係る内部統制の評価及び監査に関する実施基準の設定について(意見書)」に示されている内部統制の基本的枠組みに準拠して財務報告に係る内部統制を整備及び運用しております。

なお、内部統制は、内部統制の各基本的要素が有機的に結びつき、一体となって機能することで、その目的を合理的な範囲で達成しようとするものであります。このため、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性があります。

2 【評価の範囲、基準日及び評価手続に関する事項】

(1) 財務報告に係る内部統制の評価を行った基準日

平成23年3月31日

(2) 財務報告に係る内部統制の評価に当たり準拠した基準

一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠しております。

(3) 財務報告に係る内部統制の評価手続の概要

本評価においては、連結ベースでの財務報告全体に重要な影響を及ぼす内部統制(全社的な内部統制)の評価を行った上で、その結果を踏まえて、評価対象とする業務プロセスを選定しております。当該業務プロセスの評価においては、選定された業務プロセスを分析した上で、財務報告の信頼性に重要な影響を及ぼす統制上の要点を識別し、当該統制上の要点について整備及び運用状況を評価することによって、内部統制の有効性に関する評価を行っております。

(4) 財務報告に係る内部統制の評価の範囲

当行及び連結子会社について、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性の観点から必要な範囲を決定しております。財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性は、金額的及び質的影響の重要性を考慮して決定しており、当行及び連結子会社1社を対象として行った全社的な内部統制の評価結果を踏まえ、業務プロセスに係る内部統制の評価範囲を合理的に決定しております。なお、連結子会社3社については、金額的及び質的重要性の観点から財務報告の信頼性に及ぼす影響が僅少であると判断し、全社的な内部統制の評価範囲に含めておりません。

業務プロセスに係る内部統制の評価範囲については、各事業拠点の前連結会計年度の経常収益(連結会社間取引消去後)の金額が高い拠点から合算していき、前連結会計年度の連結経常収益の2/3を超えている1事業拠点(当行)を「重要な事業拠点」としてしております。選定した重要な事業拠点においては、企業の事業目的に大きく関わる勘定科目として「預金」、「貸出金」及び「有価証券」に至る業務プロセスを評価の対象としております。

さらに、選定した重要な事業拠点にかかわらず、それ以外の事業拠点をも含めた範囲について、見積りや予測を伴う重要な勘定科目に係る業務プロセスやリスクが大きい取引を行っている業務に係る業務プロセスを財務報告への影響を勘案して重要性の大きい業務プロセスとして評価対象に追加しております。

3 【評価結果に関する事項】

上記の評価の結果、当事業年度末日時点において、当行の財務報告に係る内部統制は有効であると判断しました。

4 【付記事項】

該当ありません。

5 【特記事項】

該当ありません。

【表紙】

【提出書類】 確認書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の2第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 平成23年6月29日

【会社名】 株式会社 山梨中央銀行

【英訳名】 The Yamanashi Chuo Bank, Ltd.

【代表者の役職氏名】 代表取締役頭取 進 藤 中

【最高財務責任者の役職氏名】 ー

【本店の所在の場所】 山梨県甲府市丸の内一丁目20番8号

【縦覧に供する場所】 株式会社 山梨中央銀行東京支店
(東京都千代田区鍛冶町一丁目6番10号)

株式会社 東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【有価証券報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当行代表取締役頭取進藤中は、当行の第108期(自 平成22年4月1日 至 平成23年3月31日)の有価証券報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。

